三重県埋蔵文化財調査報告　123-5

一般国道42号線松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅴ

朱中遺跡・朱中古墳群

1996・3

三重県埋蔵文化財センター

朱中遺跡調査区全景

序

県下有数の大河である櫛田川が中流から下流域へと、その景観を変えようとする、松阪市および多気町一帯には、古くは旧石器時代から営々とした人間の営みがありました。

それらは、土に埋もれた遺跡として今に残り、住居の跡や彼らが使った土器などの多数の遺物が、遠い昔のひとびとの暮らしぶりを思いおこさせてくれます。

いうまでもなく、これらの遺跡・遺物（埋蔵文化財）は、地域固有の歴史遺産として私たち祖先の生活の一端を知る唯一の手掛かりとなるものです。そして、それは一度破壊してしまうと二度と復元できなくなってしまうかけがえのないものです。

三重県教育委員会では、これら埋蔵文化財の保護と道路建設などの各種開発との調和をはかるべく努力しておりますが、工事などによってどうしても保存ができないものについては、当埋蔵文化財センターで発掘調査を行い、記録を保存することにしております。

ここに報告いたします朱中遺跡・朱中古墳は、国道42号松阪・多気バイパスの建設に伴って、平成２・３・６年度に発掘調査を実施した遺跡で、この報告書は松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書の第５分冊にあたります。

詳しくは報告書本文にゆずりますが、古くは縄文時代の土器や石器をはじめとして、弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・室町と、ほとんど絶え間なく人々が生活を営んだ場であったことがわかりました。この発掘調査の成果が、歴史研究のみならず地域文化の理解と向上の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、事業の推進にあたっては建設省中部地方建設局紀勢国道工事事務所、社団法人中部建設協会、松阪市教育委員会、多気町教育委員会をはじめとする関係機関各位や地元の方々など、ひとかたならぬご理解とご協力をいただきましたことに対しまして厚くお礼申し上げます。

平成８年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　川　村　政　敬

例　言

1．本書は、三重県教育委員会が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した、一般国道42号松阪・多気バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査事業のうち、平成６・７年度に整理・報告書作成業務を実施した、朱中遺跡・朱中古墳の発掘調査報告書である。

2．現地発掘調査および整理・報告書作成にかかる費用は、建設省中部地方建設局の全額負担による。

3．本書に掲載した各遺跡の概要については、すでに当センター発行の『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概要』Ⅰ・Ⅱ・Ⅴおよび『国道42号バイパス　松阪・多気　発掘調査だより』No.４で紹介しているが、本書の記述をもって最終報告とする。

4．本書に使用した地図は、建設省紀勢国道工事事務所作成の松阪・多気バイパス平面図（１：1,000）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図（１：25,000)，松阪市作成の都市計画図（１：2,500)を使用した。

5．現地調査は試掘調査を河瀬信幸が、朱中遺跡Ａ地区・同Ｂ地区を田中喜久雄と野原宏司が、同Ｃ地区を東良樹が担当した。また、朱中遺跡古墳の追加調査は西村修久が担当した。

6．本書執筆の分担については、目次に示したほか文末にも記した。編集・校正を田村が行い、伊藤克幸が全体を校閲した。本書に掲載した遺構写真は田中、野原、東、西村が、遺物写真は田村、西村、小浜が撮影した。

7．本書で報告した各遺跡の記録類および出土遺物は三重県埋蔵文化財センターが保管している。

8．発掘調査および報告書作成にあたって、下記の諸氏・諸機関からご指導・ご援助をいただいた。記して謝意を表する。なお、所属と敬称は省略させていただいた。

泉　拓良　　磯部　克　　伊藤正人　　岩瀬彰利　　岩野見司　　大下　明　　岡田　登　　奥　義次
河瀬信幸　　久保勝正　　千葉　豊　　外山秀一　　八賀　晋　　藤澤良祐　　家根祥多　　矢野健一

9．調査区の位置は、国土座標第Ⅵ系を基準とし、図面上の方位は座標北を用いた。
なお、真北は座標北のＮ０°18′44″Ｗ、磁北は座標北のＮ６°48′44″Ｗである。

10. 発掘調査および整理作業は、『埋蔵文化財の調査・整理・保管に関する基本マニュアル』（三重県埋蔵文化財センター　1993）に基づき実施した。本報告書で使用した遺構表示略記号は下記のとおりである。

ＳＨ　竪穴住居	ＳＢ　掘立柱建物	ＳＸ　墓	ＳＺ　性格不明遺構
ＳＤ　溝	ＳＥ　井戸	ＳＫ　土坑	Ｐｉｔ　ピット

11. 本報告書では、土層および遺物の色調を、小山・竹原編『新版標準土色帖』（９版1989）を使用した。

12. 本報告書に掲載した遺物写真の縮尺は概ね1:3もしくは1:2である。

13. 本報告書では、用語の漢字表記を次のように統一した。

どこう…… その性格が墓と認められるものについては「土壙」「墓壙」とし、それ以外のものは「土坑」とした。

わ　ん……「碗」「垸」「椀」があるが、「椀」を用いた。

つ　き……「坏」「杯」があるが、「杯」を用いた。

な　べ……「堝」「鍋」があるが、「鍋」を用いた。

14. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目　次

Ⅰ．前　言 ……（田村陽一）…… 1

1．調査にいたる経過 …… 1

Ⅱ．位置と環境 ……（田村陽一）…… 6

Ⅲ．朱中遺跡

1．遺構 ……（小浜　学）…… 11
2．遺物 ……（田村・小浜）…… 27
3．結語 ……（小浜）…… 39
遺物観察表 …… 43
写真図版 …… 49

Ⅳ．朱中古墳 ……（西村修久）…… 73

1．位置と周辺の古墳 …… 73
2．調査の結果 …… 73
3．まとめ …… 80
遺物観察表 …… 81
写真図版 …… 82

報告書抄録 …… 87

図　版　目　次

Ⅰ．前言

朱中遺跡現地説明会実施風景

Ⅲ．朱中遺跡

PL. 1　Ａ・Ｂ地区全景

PL. 2　Ｃ地区全景，Ａ地区全景

PL. 3　ＳＢ1 ・ＳＨ4，ＳＤ6・ＳＢ7・8

PL. 4　ＳＨ4 ・ＳＢ８

PL. 5　ＳＤ5 ・ＳＫ11，ＳＢ12・13

PL. 6　ＳＤ14，ＳＫ15

PL. 7　ＳＺ17

PL. 8　ＳＺ17，ＳＤ14・ＳＺ17

PL. 9　ＳＫ18検出状況・ＳＫ18大甕底部

PL. 10　ＳＤ19・20・21，ＳＢ27・ＳＤ31

PL. 11　ＳＢ24，ＳＢ27

PL. 12　ＳＥ34，ＳＢ35

PL. 13　ＳＨ36，ＳＤ38

PL. 14　出土遺物

PL. 15　土遺物

PL. 16　出土遺物

PL. 17　出土遺物

PL. 18　出土遺物

PL. 19　出土遺物

PL. 20　出土遺物

PL. 21　出土遺物

PL. 22　包含層出土遺物

PL. 23　包含層出土遺物

PL. 24　包含層出土遺物

Ⅳ．朱中古墳

PL. 25　朱中古墳全景・伐開後の墳丘状況

PL. 26　朱中古墳墳丘・朱中古墳トレンチ状況

PL. 27　ＳＺ１

PL. 28　ＳＺ２，ＳＺ３

PL. 29　朱中古墳出土遺物

挿　図　目　次

Ⅰ．前言

第１図　路線・工区・遺跡位置図（1:50,000）…２

第２図　明治期の遺跡周辺地形図（1:20,000）…７

Ⅱ．位置と環境

第３図　遺跡位置図（1:25,000）……９

第４図　遺跡地形図（1:2,500）……10

Ⅲ．朱中遺跡

第５図　調査区位置図（1:2,000）……12

第６図　地区割図（1:500）……13

第７図　Ａ地区西壁、北壁土層断面図（1:80）…14

第８図　遺構平面図(1:300)……15・16

第９図　Ｂ地区東壁、南壁土層断面図（1:80）　17

第10図　SD14(1:100),SK15・SK16実測図(1:60) 18

第11図　SH4,SH36実測図（1:40）……19

第12図　SH35,SH37 実測図（1:100）……20

第13図　SZ17(1:100)SK18(1:30)SE34(1:80) 実測図
SD38実測図(1:400) 土層断面図(1:40) 22

第14図　SB1,SB2,SB3 実測図(1:100)……23

第15図　SB7,SB8,SB12,SB13 実測図（1:100）…24

第16図　SB24,SB25,SB26実測図(1:100)……25

第17図　SB27実測図(1:100)……26

第18図　SD14(1:3,1:4)SK15(1:3)SK16(1:4)
出土遺物実測図……28

第19図　SH4 出土遺物実測図(1:3,1:4)……29

第20図　SH36出土遺物実測図(1:4)……30

第21図　SH36出土遺物実測図(1:4)……31

第22図　SD38出土遺物実測図(1:4)……32

第23図　SK8(1:8),SZ17(1:4),SD41(1:4)
出土遺物実測図……33

第24図　包含層出土遺物実測図(1:3)……35

第25図　包含層出土遺物実測図(1:3,1:4)……36

第26図　包含層出土遺物実測図(1:2)……37

第27図　包含層出土遺物実測図(1:2,1:1)……38

第28図　加工円盤分布図……40

Ⅳ．朱中古墳

第29図　朱中古墳と周辺の古墳(1:50,000)……74

第30図　遺跡地形図(1:2,000)……75

第31図　調査区地形測量図(1:200)……76
第32図　調査区地形断面図(1:200)……77
第33図　遺物実測図・拓影 (1:3,1:4) ……79

表　目　次

Ⅰ．前言
第１表　遺跡概況 …… 3
第２表　発掘調査遺跡一覧 …… 4
第３表　調査経過及び予定 …… 5
Ⅲ．朱中遺跡
第４表　加工円盤分類・比率表 ……40
第５表　遺構対照表 ……42
第６表　遺物観察表No.１ ……43
第７表　遺物観察表No.２ ……44
第８表　遺物観察表No.３ ……45
第９表　遺物観察表No.４ ……46
第10表　遺物観察表No.５ ……47
第11表　遺物観察表No.６ ……48
Ⅳ．朱中古墳
第12表　遺物観察表 ……81

Ⅰ. 前　言

1. 調査の経過

当事業の全体についての調査にいたる経過等については、第1分冊に詳述しているので省略する。

朱中遺跡の現地発掘調査については、平成2年度に試掘調査を実施し、本調査面積（5,200㎡）を確定した。そして、平成3年度に2次に分けて本調査を行った。既存する農業用水路を境として、A・Bの2地区に分け、A地区（2,300㎡）を平成3(1991)年6月1日から8月24日まで実施した。また、B地区（2,500㎡）は10月14日から開始し、平成4（1992)年3月13日に終了した。

A地区では奈良～平安時代を中心とする掘立柱建物、竪穴住居、溝、土坑などを検出した。

B地区においては、A地区同様の時期の掘立柱建物や竪穴住居、溝などを検出した。また、B地区では南に隣接する鴻ノ木遺跡の縄文時代早期押型文土器の遺物包含層が一部に広がっており、約900㎡については下層調査として、この包含層の調査も行った。しかし、めぼしい遺構は認められず、遺物も少量にとどまった。これによって鴻ノ木遺跡縄文早期の遺構の広がりの北限を確認した。

調査期間中、発掘調査の経過や調査成果を広く一般の人々に公開するため、平成4年2月1日に現地説明会を実施した。折からの猛烈な吹雪の中、地元の方々をはじめ、県内外からの約100名の熱心な参加者があった。

平成6(1994)年には、用地買収のため残っていた遺跡の北端部分400㎡の本調査を実施した。調査前には工場敷地となっていたため、大規模なゴミ投棄穴が掘られており、ほとんどの部分が破壊され旧状をとどめていなかった。

一方、朱中古墳の方は、平成2年度の試掘調査で自然地形と判断されていたが、現地を再確認したところ、円筒埴輪片や須恵器片が採集された。そのため、平成5(1993)年6月25日から8月20日までの間、1,000㎡について再調査を実施した。その結果、明確な古墳の主体部や周溝などの古墳の痕跡は確認できなかったものの、埴輪片や樽型甕の破片なども確認されたことから、古墳があったことはほぼ間違いないものと考えるに至った。

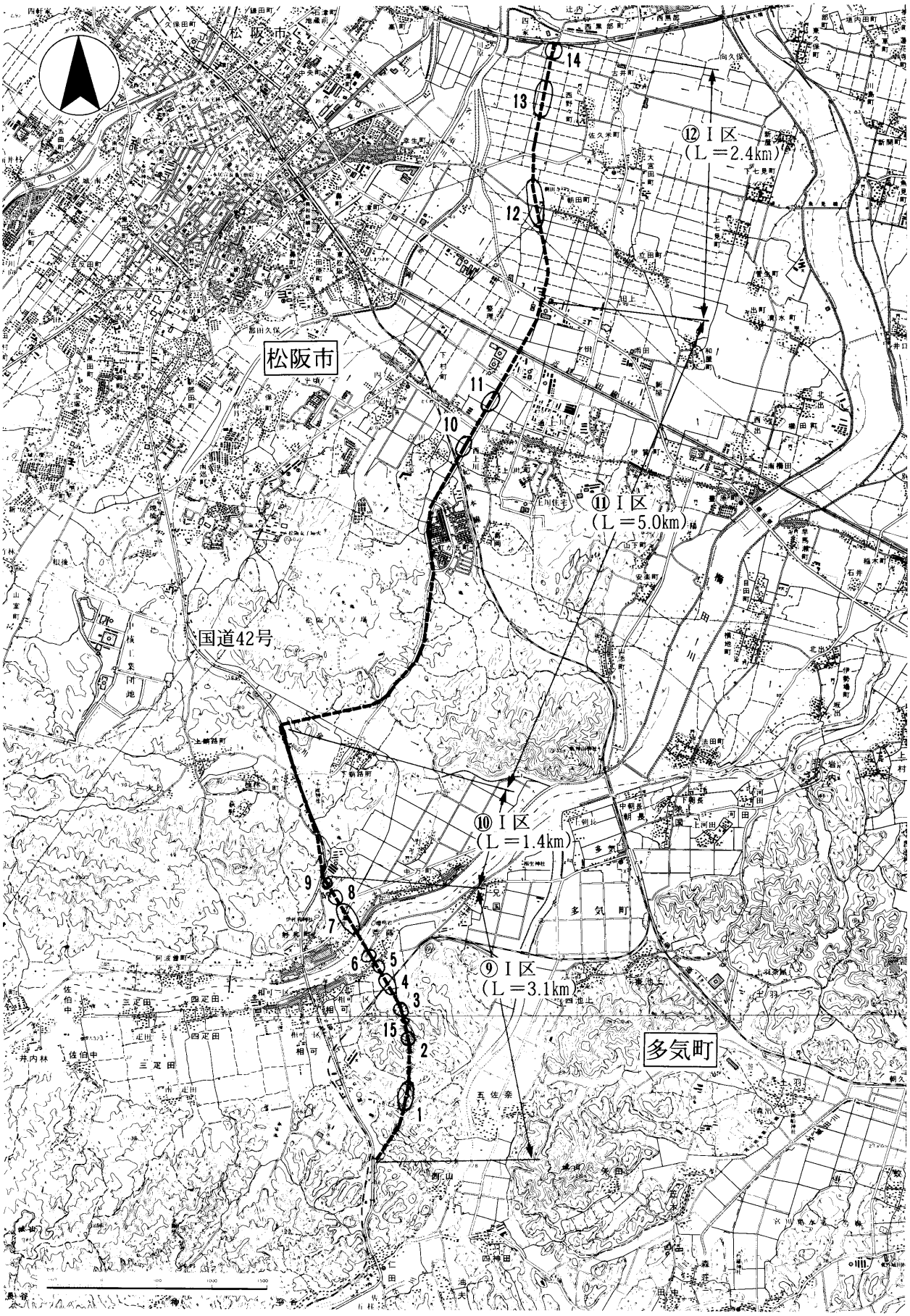
遺物整理および報告書の作成は、朱中遺跡を小浜・田村・西村が、朱中古墳を西村が行った。平成6年度に第2次調査と平行して遺物整理を行い、平成7年度に第2次調査の遺物整理などとともに、報告書作成を実施した。

遺物の整理や、各種記録類の整理にあたっては、原則的には『埋蔵文化財の調査・整理・保管に関するマニュアル』（三重県埋蔵文化財センター1993）に基づき行った。

平成6年度までの調査および整理の体制については、既刊の第1分冊に示したので、ここでは平成7年度の体制を以下に記す。

【平成7年度】

所長	川村政敬
次長	田中　守
次長	山澤義貴
主幹兼	
調査第二課長	伊藤克幸
主査兼第二係長	田村陽一
主事	下平康弘
主事	松本美先
主事	小林　秀
主事	西村修久（多気町より派遣）
主事	小浜　学（松阪市より派遣）
調査補助員	瀬野弥知世（皇學館大学生）
	塚田　幸子（皇學館大学生）
	松井理栄子（橘女子大学生）
総務課課長	中西　勝之



第１図　路線・工区・遺跡位置図（１：50,000）

番号	遺跡名	所在地	確認面積 ㎡	現状	種類	時代	概要	工区
1	明気窯跡群	多気町相可字明気	2,000	山林	散布地 窯後	古墳	平成4～5年度調査。須恵器窯5基、竪穴住居等を確認。	9工区
2	明気古墳群	多気町相可字明気	900	山林	古墳	古墳	平成3年度多気町教委試掘で7号墳確認。協議の結果、多気町教委が調査を実施	
3	甘糟遺跡	多気町荒蒔字甘糟	2,650	畑	散布地 水田	中世	平成3年度試掘調査。後世の開墾等で削平され本調査除外地となる。	
4	巣護遺跡	多気町荒蒔字巣護	7,500	水田	散布地 条里	古墳～中世	平成5年度調査。旧称【多気郡条里遺構】。明確な条里遺構は確認できず。	
5	上ノ垣外遺跡	多気町荒蒔 字上ノ垣外	6,000	畑 水田	散布地 集落跡	縄文 古墳～中世	平成5～6年度調査。縄文～中世の遺構・遺物を検出。	
6	新徳寺遺跡	多気町相可 字新徳寺	2,400	畑 水田	散布地	縄文・中世	平成6年度第1次調査。縄文時代後期前葉の竪穴住居や土坑を多数確認。同時代の遺物多量に出土。	
7	鴻ノ木遺跡	松阪市射和町字鴻ノ木・水引場・久保田ほか	11,200	水田 宅地	集落跡	縄文 古墳～中世	平成2～6年度調査。縄文時代早期、弥生、古墳、奈良～平安時代の集落跡、墓跡等を確認。	
8	朱中遺跡	松阪市射和町 字朱中	5,200	水田	集落跡	縄文 古墳～中世	平成3年度調査。奈良～平安時代の集落跡確認。	
9	朱中古墳	松阪市射和町 字朱中	400	山林	古墳	古墳	平成2年度試掘調査。後世の開墾等により墳形等不明。須恵器樽型瓶、壺片、円筒埴輪片が出土。	
10	中野前遺跡	松阪市上川町 字中野前・八王子	4,200	水田	散布地	中世	平成6年度試掘調査。遺構は確認できず。遺物は客土からのため本調査にいたらず。	11工区
11	廿チ遺跡	松阪市上川町 字廿チほか	3,700	水田	散布地	中世	平成7年度調査。ピット。溝などを検出。ほ場整備事業時にかなり削平か。	
12	堀町遺跡	松阪市朝田町字堀町・平田・斎宮	9,200	水田	散布地	弥生～中世	平成6年度調査。弥生～室町時代の遺構を多数確認。銅鐸形土製品などの遺物が多量に出土。	12工区
13	御堂山遺跡	松阪市西野々町 字御堂山	8,100	水田	散布地	奈良～中世	平成4年度試掘調査。遺構・遺物ともに確認できず、本調査除外地となる。	
14	山ノ花遺跡	松阪市古井町 字山ノ花	4,100	水田	散布地	中世	平成7年度調査。遺構密度が薄く、遺跡の縁辺部か。	
15	大日山古墳群	多気町荒蒔 字大日山	600	山林	古墳	古墳	平成5年度工事中発見。直径約20m、高さ約2mの円墳。主体部なし。他に丘陵斜面に主体部2基。	9工区

第1表　遺　跡　概　況

総務課主査　　中川カツミ
総務課主事　　伊藤直樹、橋川　功

以上のほか室内整理員として、各種調査記録類の整理や出土遺物の整理、実測などで以下の方々の補助を得た。

谷久保美知代　　白石みよ子　　山分孝子
中里輝子　　中村敬子　　広瀬則代
山路艶子　　廣田洋子　　服部美奈子
脇葉輝美　　北川ゆき

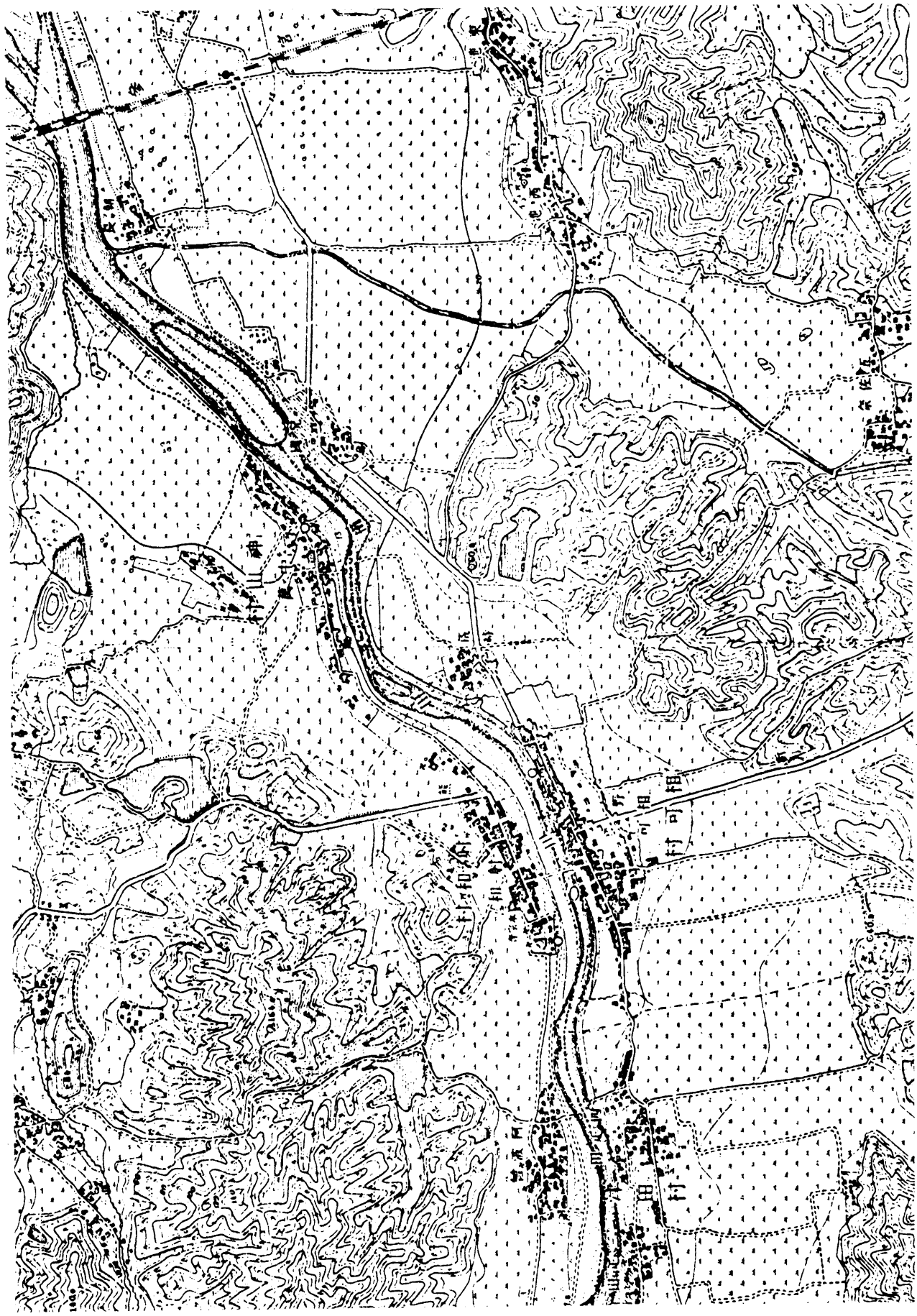
番号		遺跡名	所在地	調査期間	調査面積（m²）	担当者
1	9工区	萌気窯跡群	多気町相可 字明気	平成4（1992）年8月28日～9月30日〈試掘〉 〃 10月18日～平成5（1993）年2月28日 平成5（1993）年4月19日～10月29日 ＊平成4年6月17日～6月25日予備調査（磁気探査）	530 1,500 1,400 計2,430	田村陽一・宇河雅之 田村陽一・宇河雅之 宇河雅之・西村修久
2		萌気古墳群	多気町相可 字明気			多気町教育委員会 西村修久・中里　守
3		甘糟遺跡	多気町荒蒔 字甘糟	平成3（1991）年8月26日～10月11日〈試堀〉	144 計144	田中喜久雄・野原宏司
4		巣護遺跡	多気町荒蒔 字巣護	平成3（1991）年8月26日～10月11日〈試堀〉 平成5（1993）年8月23日～平成6（1994）年1月27日 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【多気郡条里遺構】	908 2,300 計3,208	田中喜久雄・野原宏司 西村修久・東　良樹
5		上ノ垣外遺跡	多気町荒蒔 字上ノ垣外ほか	平成2（1990）年7月23日～9月12日〈試堀〉 平成5（1993）年1月28日～2月1日〈試堀〉 平成5（1993）年8月23日～平成6（1994）年1月27日 平成6（1994）年4月18日～8月31日	68 96 1,950　＊112 3,050　＊64 計5,164　＊176	河瀬信幸 田村陽一・宇河雅之 西村修久 東　良樹・下平康弘
6		新徳寺遺跡	多気町相可 字新徳寺	平成5（1993）年7月9日～7月12日〈試堀〉 平成6（1994）年5月23日～8月24日 ＊平成8年度第2次調査予定	96 1,100　＊333 計1,196　＊333	宇河雅之 小浜　学・西村修久
7		鴻ノ木遺跡	松阪市射和町 字鴻ノ木・水引場・久保田ほか	平成2（1990）年7月23日～9月12日〈試堀〉 平成2（1990）年10月11日～平成3（1991）年3月19日 平成3（1991）年4月23日～5月31日 平成4（1992）年5月11日～8月31日 平成5（1993）年4月19日～8月29日 平成5（1993）年8月23日～平成6（1994）年3月31日 平成6（1994）年8月23日～平成7（1995）年1月25日	272 1,500　＊850 460 3,500＊2,321 3,600　＊400 2,200＊1,800 1,300 計12,832＊5,371	河瀬信幸 河瀬信幸・小林　秀 田中喜久雄・野原宏司 宇河雅之・田村陽一 東　良樹・小浜　学 小浜　学・田村陽一 下平康弘・田村陽一
8		朱中遺跡	松阪市射和町 字朱中	平成2（1990）年7月23日～9月12日〈試堀〉 平成3（1991）年6月1日～8月24日 平成3（1991）年10月14日～平成4（1992）年3月13日 平成6（1994）年9月5日～9月22日	184 2,300 2,500　＊900 400 計5,384　＊900	河瀬信幸 田中喜久雄・野原宏司 田中喜久雄・野原宏司 東　良樹
9		朱中古墳	松阪市射和町 字朱中	平成2（1990）年7月23日～9月12日〈試堀〉 平成5（1993）年6月25日～8月20日	98 1,000 計1,098	河瀬信幸 西村修久
10	11工区	中野前遺跡	松阪市上川町字中野前・八王子	平成6（1994）年9月26日～10月5日〈試堀〉 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【石津遺跡】	176	東　良樹
11		廿チ遺跡	松阪市上川町 字廿チほか	平成6（1994）年10月6日～10月14日〈試堀〉 平成7年度本調査予定 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【東牛込遺跡】	144	東　良樹
12	12工区	堀町遺跡	松阪市朝田町 字堀町・斎宮ほか	平成5（1993）年7月19日～7月23日〈試堀〉 平成6（1994）年8月26日～平成7（1995）年2月20日 平成7年度第2次調査、平成8年度第3次調査予定	356 3,000	宇河雅之 小浜　学
13		御堂山遺跡	松阪市西野々町 字御堂山	平成5（1993）年1月26日～1月27日〈試堀〉	224	宇河雅之
14		山ノ花遺跡	松阪市古井町 字山ノ花	平成6（1994）年10月17日～10月20日〈試堀〉 平成7年度本調査予定	176	東　良樹
15	9	大日山古墳群	多気町荒蒔字 大日山	平成6（1994）年4月7日～6月10日	600	西村修久・小浜　学

第2表　発掘調査遺跡一覧　（調査面積欄の＊印は下層調査面積）

朱中遺跡現地説明会実施風景

工区	No.	遺跡名	調査対象面積（㎡）			調査面積（㎡）									備考
			確認面積	5.4.1協定	7.3.31現在	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
9工区	1	明気窯跡群	2,000	2,900	2,900			範 1,500	1,400	報Ⅰ					
	2	明気古墳群	900	0	0										平成4年度多気町教委調査
	3	甘精遺跡	2,650	0	0		範			報Ⅰ					試掘調査のみ
	4	巣護遺跡	7,500	2,300	2,300		範		2,300	報Ⅰ					旧称　多気郡条理遺構
	5	上ノ垣外遺跡	6,000	5,000	5,000	範		範	1,950 ※ 112	3,050 ※ 64	範 報Ⅱ				
	6	新徳寺遺跡	2,400	(2,400)	1,600				範	1,100 ※ 333	範	500 報Ⅲ			
	7	鴻ノ木遺跡	11,200	13,800	12,560	範1,500 ※ 850	460	3,500 ※2,321	5,800 ※2,200	1,300			報Ⅳ		遺構・遺物多数のため整理に3ヶ年
	8	朱中遺跡	5,200	5,200	5,200	範	4,800 ※900			400	報Ⅴ				
	9	朱中古墳	400	0	0	範					報Ⅴ				試掘調査のみ
	15	大日山古墳群	600	−	600					600 報Ⅰ					平成6年1月工事中新発見
11工区	10	中野前遺跡	4,200	4,200	0					範			報Ⅵ		試堀調査のみ 旧称　石津遺跡
	11	廿子遺跡	3,700	3,700	1,600					範	1,600		報Ⅵ		旧称　東牛込遺跡
12工区	12	堀町遺跡	9,200	9,200	9,700				範	3,000	3,100	3,600	報Ⅶ		
	13	御堂山遺跡	8,100	0	0			範					報Ⅶ		試堀調査のみ
	14	山ノ花遺跡	4,100	4,100	1,300					範	1,300		報Ⅶ		
調査面積合計		範囲確認調査				622	1,052	850	452	496	96	−			
		本調査				1,500 ※ 850	5,260 ※ 900	5,000 ※2,321	11,450 ※2,312	9,450 ※ 397	6,000 −	4,100			
		合計	68,150	52,800	42,760	2,122 ※ 850	6,312 ※ 900	5,850 ※2,321	11,902 ※2,312	9,946 ※ 397	6,096 −	4,100			※は下層㎡数
調査担当職員数		現地調査				2	2	2	4	3	2	2	0		
		整理調査				0	0	0	1	2	3	3	3		
		合計				2	2	2	5	5	5	5	3		

第3表　調査結果および予定（範…範囲確認調査　報…報告書作成　※は下層調査面積）



第２図　明治期の遺跡周辺地形図（１：20,000）

Ⅱ. 位 置 と 環 境

三重県松阪市は南北に細長い伊勢平野の中南部に位置し、人口約11万人を擁する近世城下町を母体とする都市である。近年、中南勢地方の中核都市として目ざましい発展を遂げつつあり、高速道路の開通や工業団地、住宅団地の造成など、各種の開発が盛んに行われている。

古くは都と伊勢神宮を結ぶ伊勢街道と、熊野街道の交差する交通の要所として重要な位置を占め、現在でも三重県南部の東紀州地域や南勢地域への幹線道路の交点に位置することに変わりはない。

松阪市の南を限る櫛田川は、台高山脈の高見山（1,248m）付近に源を発し、流域に２ないし３段の河岸段丘を発達させ、幾多の蛇行を繰り返しながら東微北流し伊勢湾に注いでいる。

櫛田川が最後の大きな蛇行を終えた多気町牧付近から下流部の三疋田・四疋田地区には、比較的まとまった低位段丘面が展開しており、条里制地割りも広く残っている。対岸の庄、阿波曽地区は小規模ながら可耕地が広がるが、射和の集落を過ぎたあたりから、川幅も広くなり下流の様相を呈し始める。

朱中遺跡（１）は射和の集落の東はずれに、北側から櫛田川に注ぎ込む小支流が形成した小扇状地上に立地する遺跡である。標高は24～27mで、北から南に向かって緩やかに傾斜している。

本遺跡も含めたややマクロな位置と歴史的環境については、第１分冊において詳しく記述しているのでそれを参照されたい。ここでは、簡単に周辺の遺跡についてふれておくにとどめる。

旧石器時代の遺跡として明確なものは、今のところ確認されていないが、当遺跡のすぐ東の中位段丘端に立地する上寺遺跡（２）ではナイフ形石器が出土しており、旧石器人の活動した地域であった。

縄文時代の遺跡としては、当遺跡の南に隣接して大川式の古段階の縦穴住居や煙道付き炉穴などが検出された鴻ノ木遺跡（３）をはじめとして、鐘突遺跡（４）、上寺遺跡（２）、射原垣内遺跡（５）、右岸側でも坂倉遺跡（６）や牟山遺跡（７）など、早期押型文土器を出土する遺跡が密集している。各遺跡間の土器型式の消長などから、半径約５kmほどの地域内での集落の変遷が追える好地域である。鴻ノ木遺跡遺跡では、早期のほかに中期、後期の遺物も少量出土している。

この他、当遺跡の対岸の新徳寺遺跡では、中期の土器が少々と後期前葉の遺構・遺物が多数出土している。またこの時期の遺跡としては、約５km下流の右岸に金剛坂遺跡、当遺跡の北東約1.5kmに射原垣内遺跡（５）、佐奈川水系の五佐奈遺跡（８）などがあるほか、後・晩期の遺跡と考えられるのに、当遺跡の西に隣接し、狭小な中位段丘面に立地する下宮前遺跡（９）がある。

弥生時代の遺跡としては、前期・中期の上寺遺跡（２）と鴻ノ木遺跡（３）、約５km上流右岸には中期前半の遺構・遺物が発掘された花ノ木遺跡があるほか、後期の遺跡として相可高校校庭遺跡（11）が知られている。

古墳時代ではまとまった集落は今のところ知られていないが、鴻ノ木遺跡（３）で、前期の溝や中期の竪穴住居が２棟検出されているほか、対岸の上ノ垣外遺跡（11）でも、前方後方型周溝墓や方形周溝墓が検出され、若干の遺物が出土している。

一方、古墳は周辺の低丘陵にいくつかの古墳群が分布しているが、発掘調査が行われたものはなく、時期等不詳のものばかりである。大規模な古墳はなく、また前期古墳も確認されていない。

松阪市側の古墳および古墳群をあげると、当遺跡北東方に集中し、尾だけ古墳群（12）、中万大谷古墳群（13）、弁天窟古墳（14）、岡山古墳（15）などがある。射和より上流には、約3.5kmほどの丘陵斜面に庄古墳１基が確認されているだけである。

多気町側には多数の後期古墳や古墳群が分布している。主なものをあげると、立岡山古墳群（16）、大日山古墳群（17）、明気古墳群（18）、黒田山古墳群（19）、河田古墳群（20）などである。

またそれらの古墳群へ、須恵器を焼成し供給した

ことが知られる明気窯跡群（21）や、同時期の中尾窯跡（22）もある。

歴史時代では、櫛田川分流地点周辺は平安時代に東寺領の荘園（川合・大国荘）となったことが特筆されよう。東裏遺跡（23）やカウジデン遺跡（24）はその時代の代表的遺跡である。カウジデン遺跡では、発掘調査により『中万』と書かれた墨書土器が多数出土している。当遺跡の東１kmには、現在の中万集落があり、関連が考えられる。

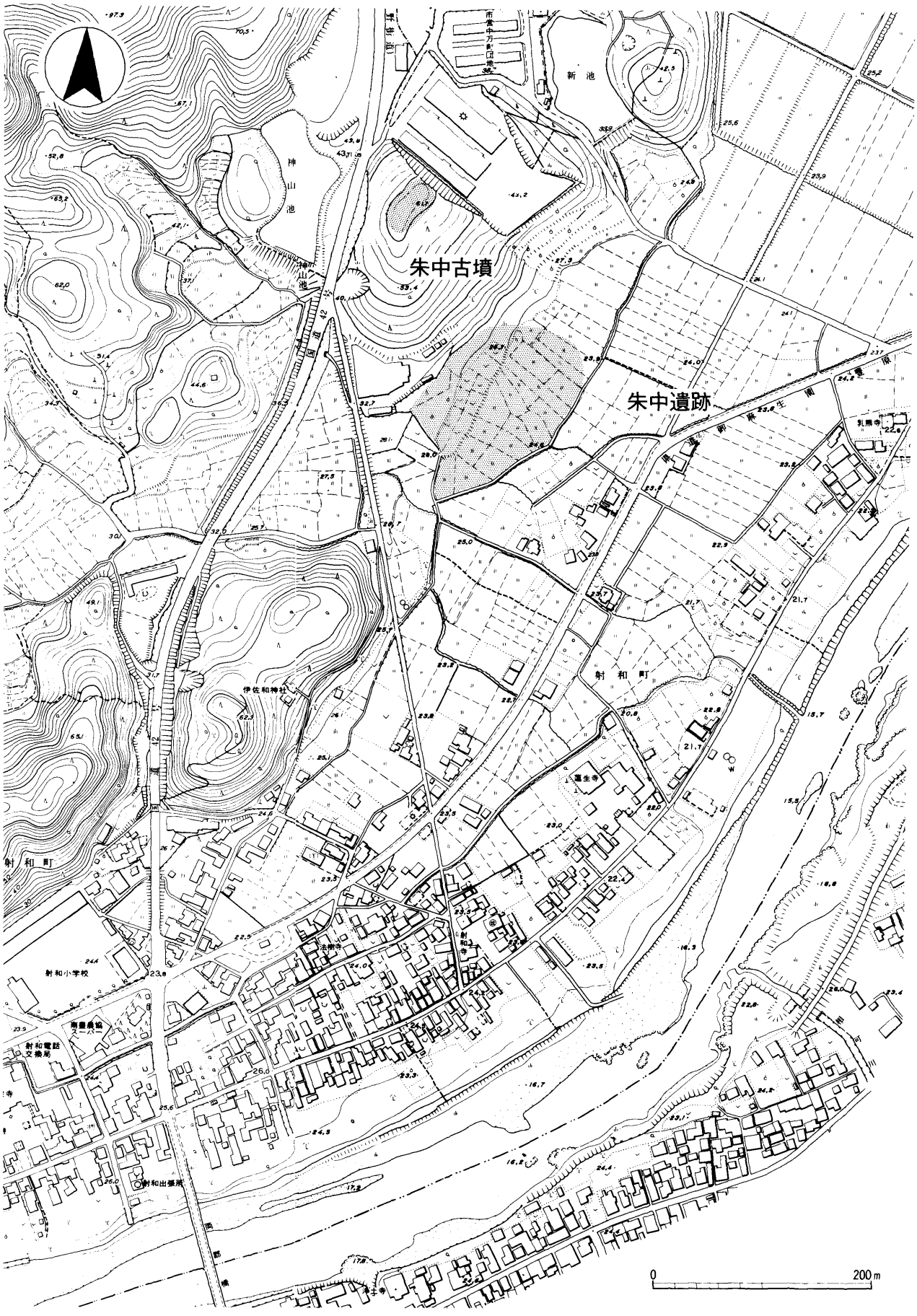
また、上ノ垣外遺跡（３）でも発掘調査が行われ、やはり平安時代の遺構・遺物が出土しているし、巣護遺跡（25）でも石帯や緑釉陶器といった特殊遺物が出土している。これらの事実は、前述の東寺領川合・大国荘の施設などに関連する遺跡の可能性を想起させられるのである。

櫛田川右岸沿いを東西に走るのは旧伊勢本街道、相可の集落でこの街道に直交するのは熊野街道。対向集落として発達した射和の集落は、約６km上流の丹生で産出した水銀を加工する軽粉業を発達させ、近世には江戸にまで店を構えるようになる伊勢商人を輩出させる。

このように中世以降も、この地は歴史的特性を持続させ続けるのである。

（田村　陽一）

第３図　遺跡位置図（１：50,000）　　〔国土地理院　１：25,000地形図　松阪・国束山〕



第4図　遺跡地形図（1：2,500）

Ⅲ. 朱中遺跡

1. 遺　　構

1．はじめに

朱中遺跡は、行政上松阪市射和町字朱中に属している。北約50mのところに朱中古墳があり、南には縄文時代早期の良好な遺構や遺物を検出した鴻ノ木遺跡が広がっている。現地発掘調査は、平成３年度にＡ・Ｂ地区を調査し、平成６年度に残りの部分の調査を行った。平成６年度分については、Ｃ地区とする。

2．基本層序

遺跡全体についていえることは、後世の耕地化や建造物の建築により、地形の改変が考えられ、場所により土質・色調の差異が大きいことである。

Ａ地区は、調査区の南北の比高差が1.1ｍある。基本的には第１層が耕作土、第２層は場所により細分できたり、存在しないところもある包含層、第３層の上面が遺構検出面である。

Ｂ地区は、Ａ地区より崖状に３ｍほど落ち込んだ下部に位置している。基本的には第１層が盛土、第２層は途中で分層できる盛土、第３層は耕作土、第４層は床土、第５層は上層包含層、第６層の上面は上層遺構検出面、第７層は下層包含層、第８層の上面が下層遺構検出面となる。

Ｃ地区ついては、工場の廃棄物焼却場に利用されており、全体的に大きく攪乱されていたことから、元々の土層を確認することが出来なかった。

3．遺構

遺跡全体としては、遺構密度はそれほど高くはない。Ａ地区では、土坑10基、溝12条、集石遺構１基、竪穴住居１棟、掘立柱建物11棟などを検出した。Ｂ地区では、土坑１基、溝４条、集石遺構１基、竪穴住居１棟、石組井戸１基などを検出した。なお、Ｂ地区の調査区東部分については下層調査を行ったが、顕著な遺構を検出することができなかった。Ｃ地区については、Ａ地区から延びるＳＤ５以外は、攪乱が激しく遺構を検出することはできなかった。

（１）弥生時代の遺構

Ａ地区

土坑

ＳＫ15

長軸315cm、短軸83cm、検出面からの深さ26cmの細長い不整形な楕円状の土坑である。長軸方向の北側の一部は段状になっている。遺物は小片が多く、弥生土器壺(1,2)や甕(3)が出土している。これらから、この遺構の時期は、弥生時代中期中葉と思われる。

ＳＫ16

長軸188cm、短軸90cm、検出面からの深さ13cmの浅い不整形な楕円状の土坑である。ＳＫ８から南へ1.8m離れたところに存在している。遺物としては、弥生土器壺(4)や甕(5)などが見られる。これらのことから、この遺構の時期は、弥生時代中期中葉と思われる。

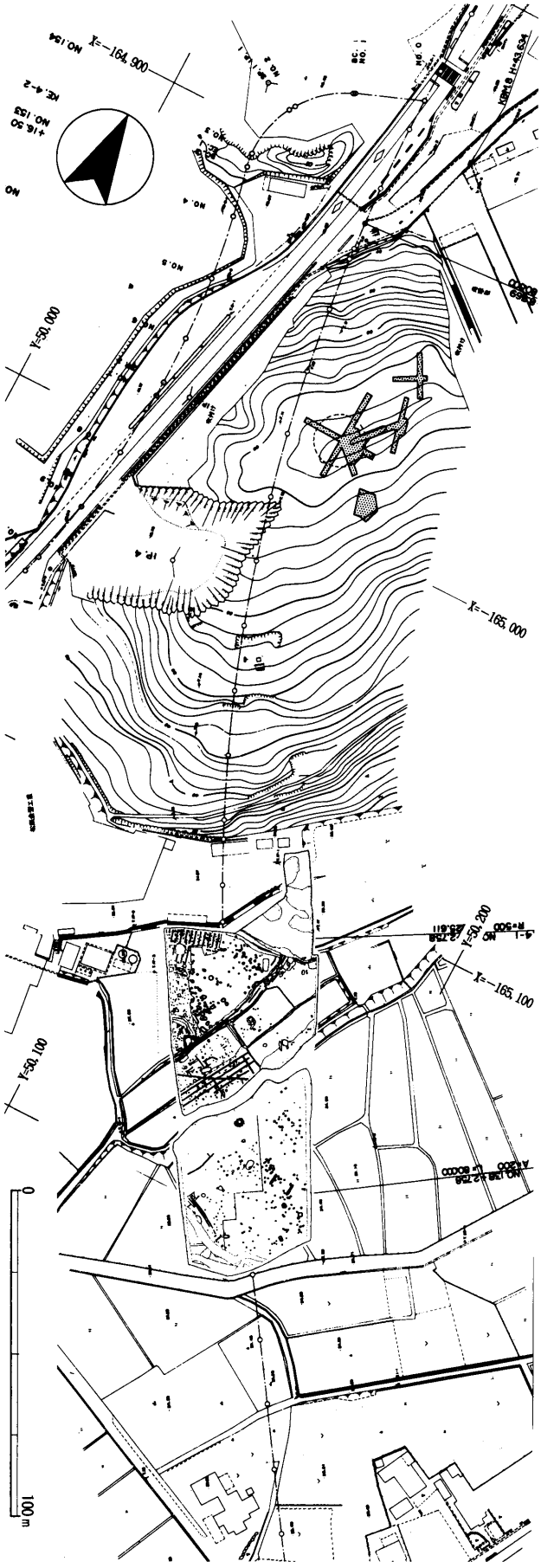
（２）古墳時代

Ａ地区

溝

ＳＤ14

幅185cm～200cm、検出面からの深さ２～40cm、断面形は半円形を呈する。調査区西側端からカーブしながら少しずつ浅くなっていく。平面プランから、円形周溝墓あるいは古墳の周溝かと思われる。遺物としては、混入と考えられる弥生土器片(6～9)や、古式土師器壺(10)・甕(12)などが少量出土しており、この遺構の時期は、古墳時代前期前半といえよう。



第５図　調査区位置図（１：2,000）

（３）奈良時代の遺構

Ａ地区

竪穴住居

ＳＨ４

調査区西側端で検出された、東西301㎝、南北322㎝、検出面から床面までの深さが40㎝の竪穴住居である。平面形は隅丸方形であるが、床面は円形に近い。主柱穴、竈跡は確認できなかった。埋土中から弥生土器壺(13)、土師器甕(14)や須恵器杯蓋(15)が少量出土しており、時期は、奈良時代前期と思われる。

Ｂ地区

竪穴住居

ＳＨ36

調査区中央部で検出された、東西188㎝、南北305㎝、検出面から床面までの深さが50㎝の竪穴住居である。平面形は楕円形である。主柱穴は確認できなかったが、南よりの東側壁に接して焼土塊があり、竈が想定できる。この焼土中から管玉(16)が出土している。また、埋土からは完形に近い形で土師器杯(17～25)・高杯(26～28)・甕(29～36)・甑(37)・鍋(38)や須恵器杯(39～43)が一括して出土している。これらから、この遺構の時期は奈良時代前期と思われる。

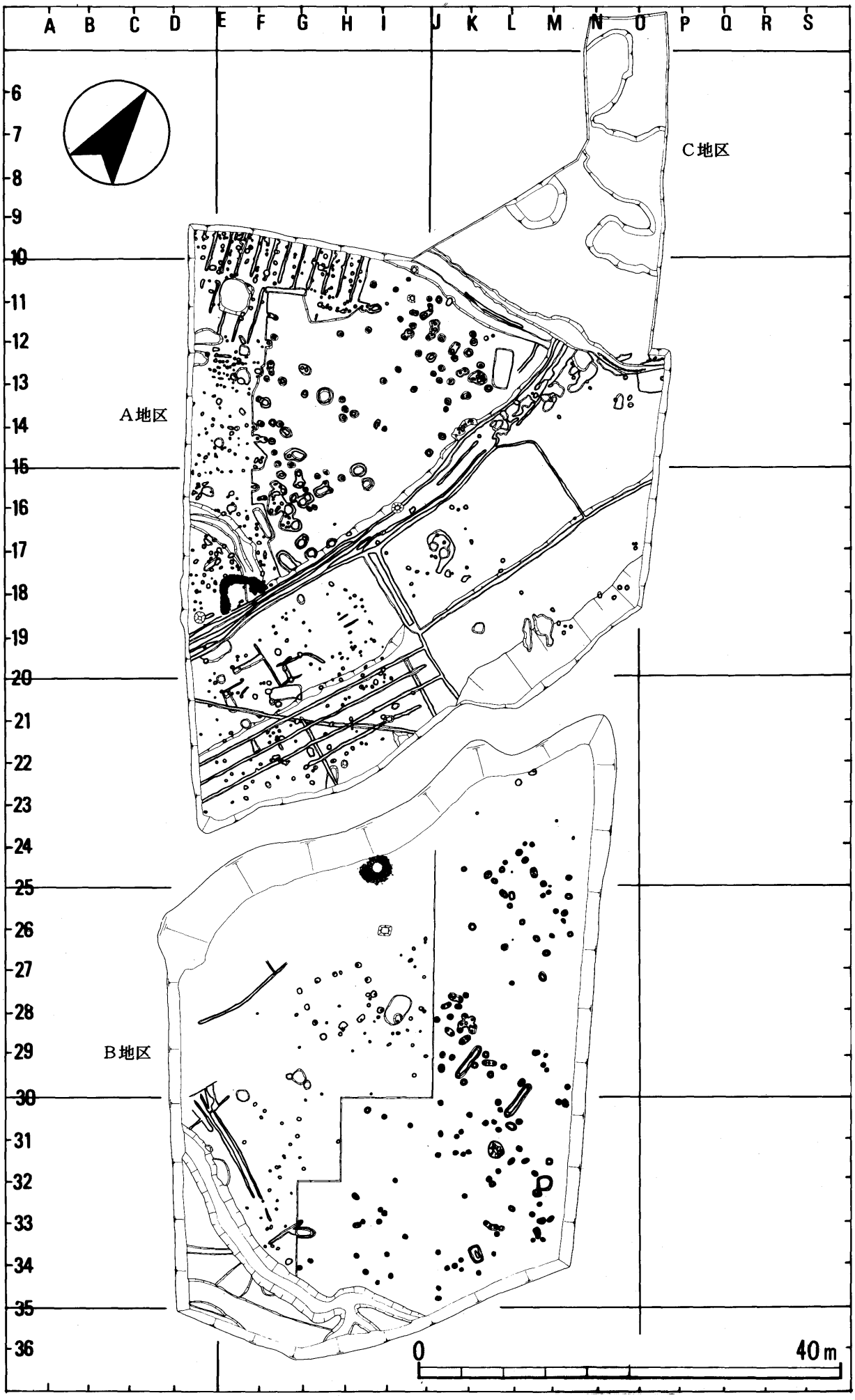
掘立柱建物

ＳＢ35

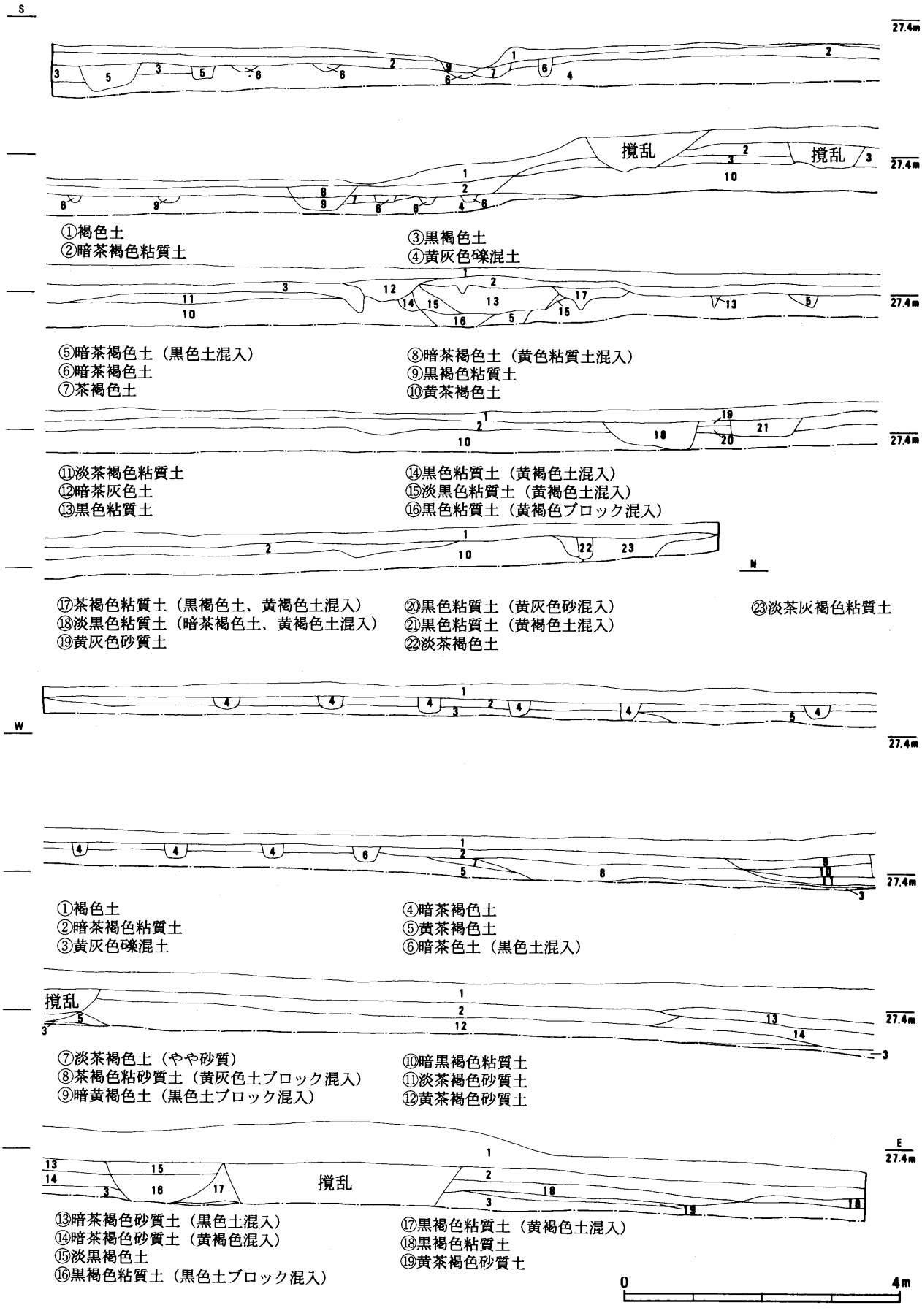
ＳＨ70の西側直近にあり、３間×３間の掘立柱建物である。桁行6.0m、梁行4.9mで、柱間は、桁行2.0m、梁行1.6mである。柱掘形は一辺50㎝前後の方形を呈しており、深さは50～60㎝で、直径15㎝の柱痕跡が確認できた。建物の棟方向は、Ｎ32°Ｅである。柱穴の埋土から少量の土師器片が出土しており図化できる遺物はなかったが、ＳＨ36と同じ奈良時代前期と思われる。

ＳＢ37

３間×２間の掘立柱建物である。桁行5.2m、梁行3.2mで、柱間は、桁行1.7～1.8m、梁行1.4～1.8mで柱間距離が少し違っている。柱穴の直径は30㎝で、深さは30～40㎝あり、柱穴の埋土から土師器細片がわずかに出土している。また、ＳＨ36の東側壁と西側柱列が平行になっており、ＳＨ36との関連が考

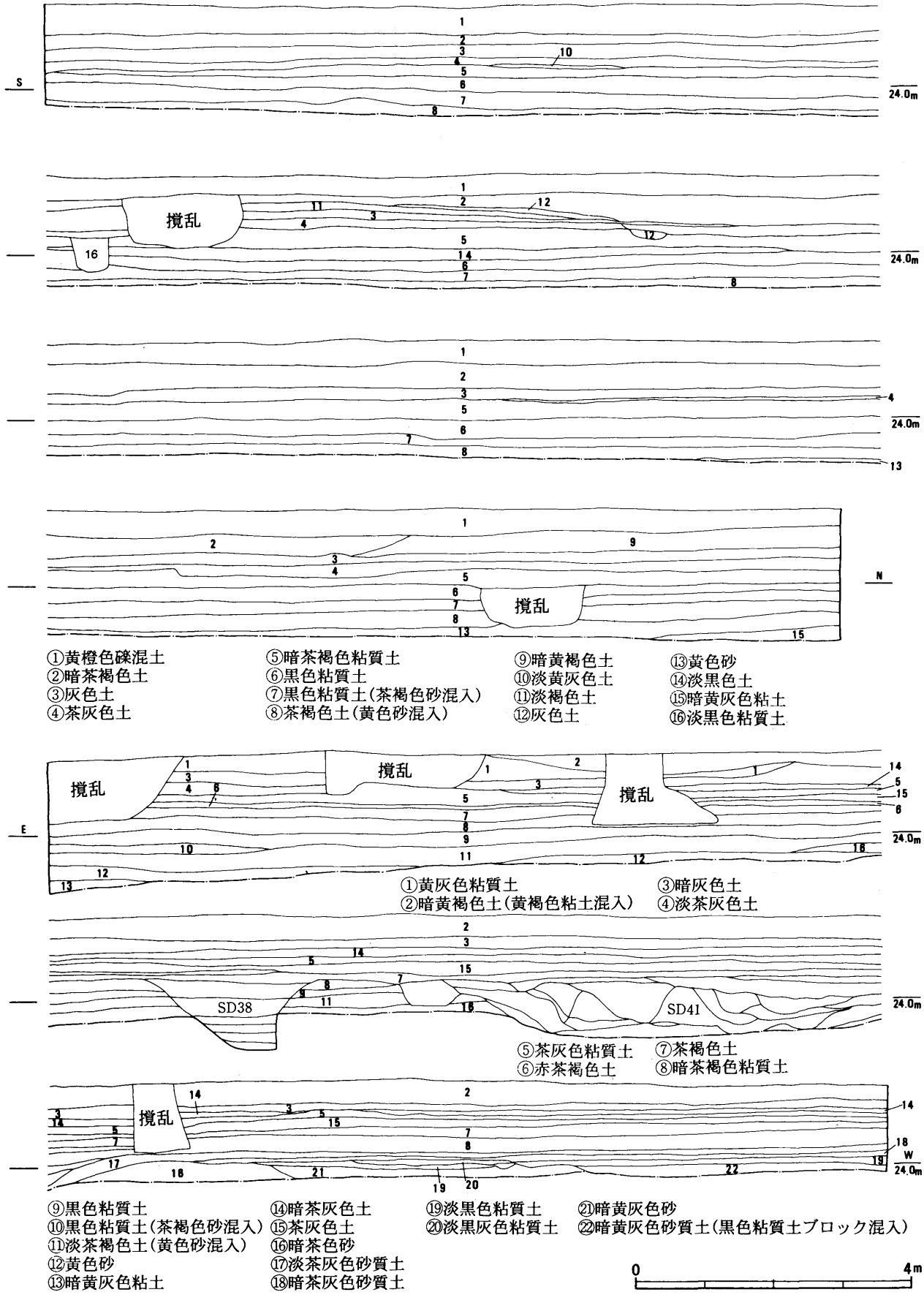


第6図　地区割図（1：500）



第７図　Ａ地区西壁、北壁土層断面図（１：80）

第８図　遺構平面図（１：300）



第９図　Ｂ地区東壁、南壁土層断面図（１：80）

えられ、ＳＨ36と同時期、すなわち奈良時代前期の遺構と考えられる。

（4）平安時代の遺構

Ａ地区

土坑

ＳＫ９

長軸180cm、短軸180cm、深さ20cmの浅い土坑である。土師器や須恵器の細片が若干出土している。

ＳＫ10

長軸360cm、短軸125cm、深さ14cmの不整形な土坑である。遺物の出土は少量であるが、ＳＫ９との切り合いから判断した。

ＳＫ28

長軸325cm、短軸55cm、検出面からの深さが30cmの細長い土坑である。遺物は、少量の土師器細片が出土した。

ＳＫ29

長軸305cm、短軸110cm、検出面からの深さが15cmの不整形な土坑である。西側の北隅で焼土を検出している。

ＳＫ30

長軸130cm、短軸80cm、検出面からの深さが15～40cmの長楕円形の土坑である。遺物は少量の土師器細片が出土した。

溝

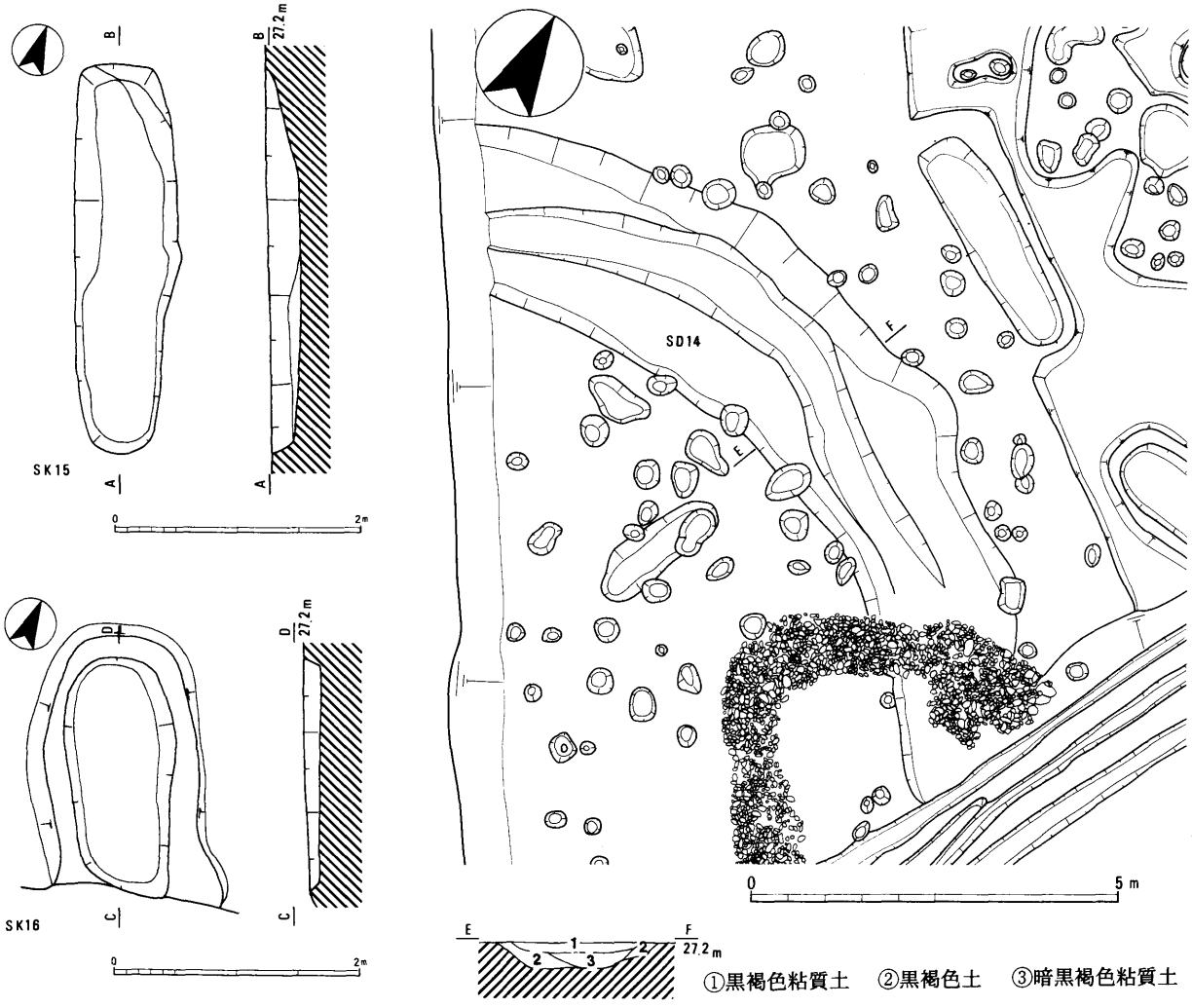
ＳＤ31

幅30～40cm、検出面からの深さ９～30cmの溝である。調査区南端部を横切っており、調査区外の両側に延びる。埋土から土師器片、須恵器片が出土したことと、ＳＫ30との切り合いから判断した。

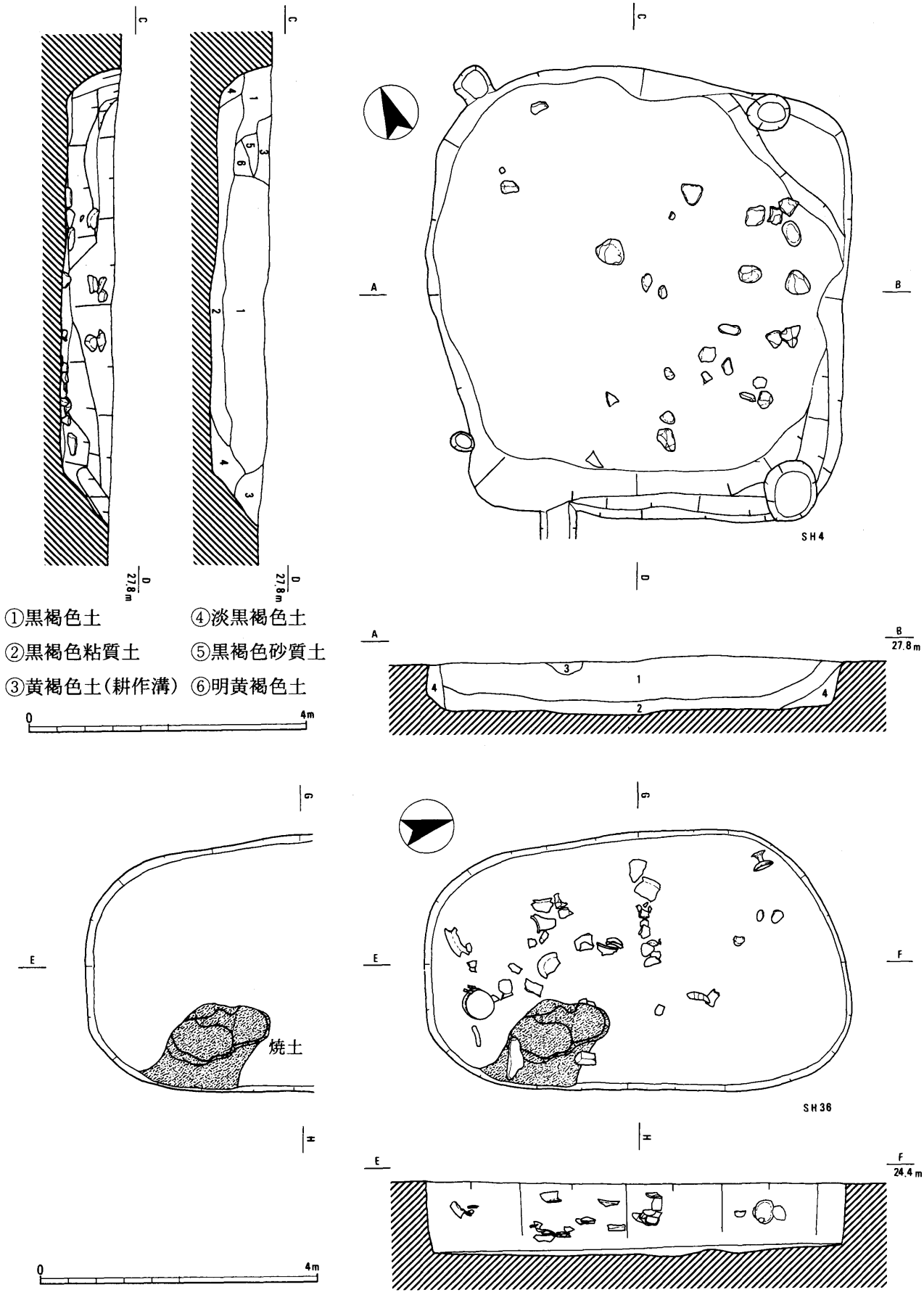
Ｂ地区

溝

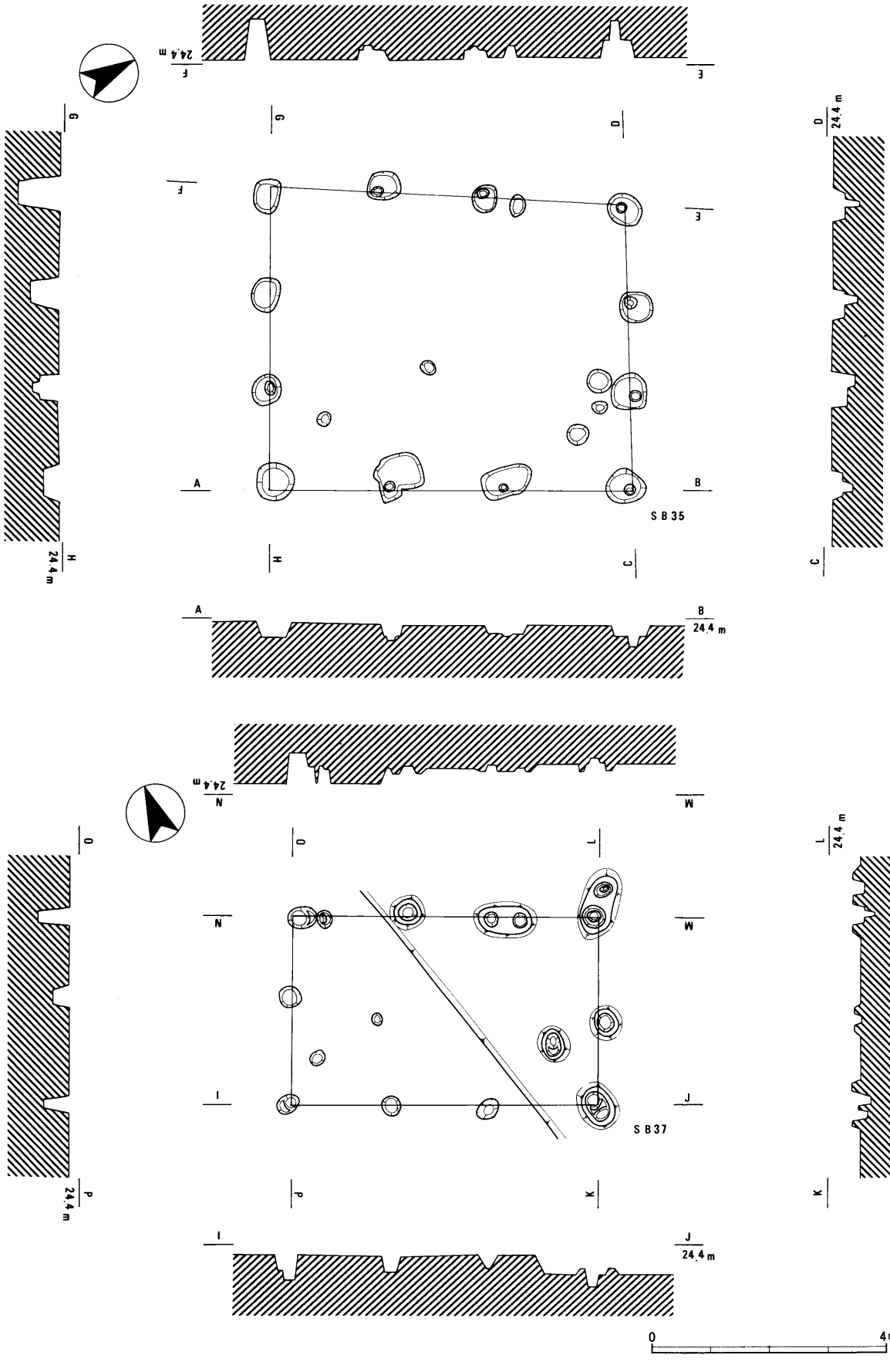
ＳＤ38



第10図　SD14（１：100）,SK15・SK16実測図（１：60）



第11図　SH 4 ,SH36実測図（1 ： 40）



第12図　SB35・SB37実測図（1：100）

調査区南西部には、蛇行しながら調査区外に続く溝がある。幅250cm、深さ80cm～150cmで、断面形はU字形を呈している。底の部分には、溝が崩れるのを防ぐためと考えられる矢板と杭が一部残存していた。遺物は、弥生時代から平安時代までの幅広い時代のもの(49～65)が出土している。時期については、出土遺物から平安時代と思われる。この溝は、調査区南端で3つに分流しており、平成2年度調査の鴻ノ木遺跡（第1次調査）で確認された北旧流水路につながる。

ＳＤ39

幅65cm、深さ4～10cmの細長く浅い溝である。ＳＤ38と交わる部分より、南西方向に調査区外に向かって延びるが、ＳＤ38を越えては延びない。

ＳＤ40

幅260cm、深さ10～21cmの浅い溝である。ＳＤ38と直交しており、交わっている部分より北へは延びていかない。また、南側では、少し延びたところで、ＳＤ41とぶつかる。

（5）鎌倉時代以降の遺構

Ａ地区

溝

ＳＤ5

調査区を東西にほぼ横切る、幅80～220cm、深さ20cmの溝である。一部に石列が見られる。土師器の小片が出土している。時期は鎌倉時代か。

ＳＤ6

幅120cm、深さ20cmの溝である。土師器皿や鍋の破片、須恵器片が出土している。時期は鎌倉時代か。

ＳＤ19

幅30cm、深さ10cmの溝である。土師器の羽釜の破片が出土している。ＳＤ21に切られる。時期は、鎌倉時代か。

ＳＤ22

幅32～45cm、深さ3～8cmの溝である。土師器鍋の小片などが出土している。時期は鎌倉時代か。

土坑

ＳＫ23

長軸3m、短軸1m、深さ15～20cmの不整形な土坑である。北側部分は、ＳＤ22に切られている。時期は鎌倉時代か。

Ｂ地区

溝

ＳＤ41

調査区南隅部分にある溝で、調査区南壁からの幅が360cmある。溝の肩から少しずつ落ち始め、肩から190cmのところで、調査区南隅部分に向けて急に90cm落ち込む。墨書山茶椀(66)、土師器細片や土錘(67,68)等の遺物が少量出土した。時期は鎌倉時代と思われる。

Ａ地区

性格不明遺構

ＳＺ17

調査区西側端で、拳大の河原石が「コ」の字状に巡る、一辺3.5m、幅1mの遺構である。ＳＤ14と重複し、ＳＤ19に切られている。集石はおそらく方形状に巡るものと考えられる。集石を取り除くと、深さ40cm、断面形が台形状の溝であった。断面を見ると、遺構上面で石が密集しており、底部の方にいくにしたがい石は少しずつ疎らになっていく。集石内に土砂が多く含まれることから、石はこの溝に投げ入れられたものと考えられる。また、集石内からは、加工円盤(69～74)が出土している。室町時代の土師器鍋や陶器甕などの破片が出土していることから、この遺構の時期は室町時代と考えられる。なお、この遺構の性格については不明である①。

土坑

ＳＫ8

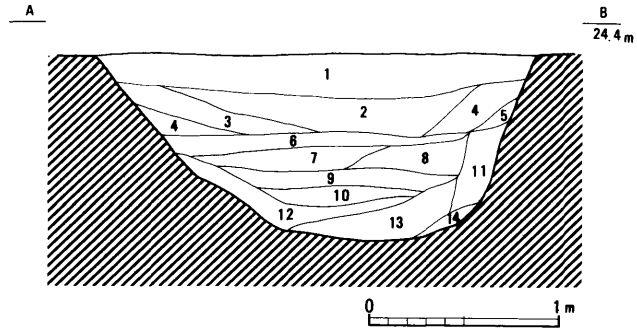
直径112cm、深さ30cmの円形の土坑である。検出面で、陶器大甕片が集中して存在する部分があり、それらを取り除くと甕(75)は底部まで残存していた。また、甕のまわりを6～11cm幅の粘土が取り巻いており、甕を据えて固定するためのものであろう。江戸時代の遺構かと思われる。

Ｂ地区

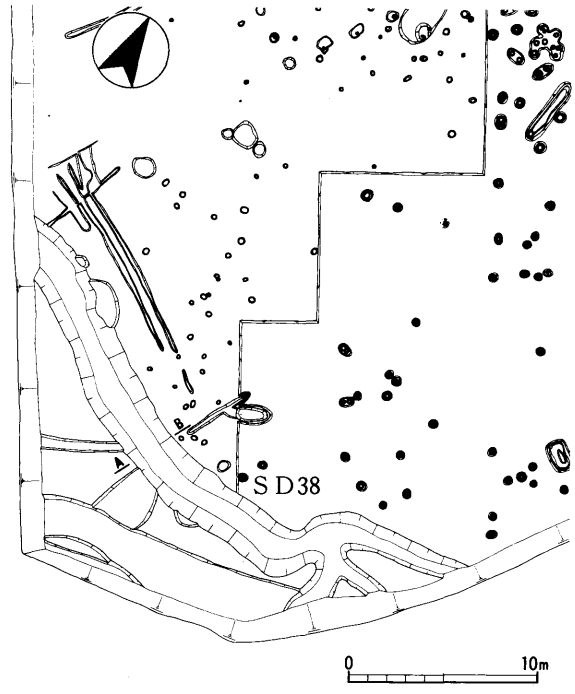
井戸

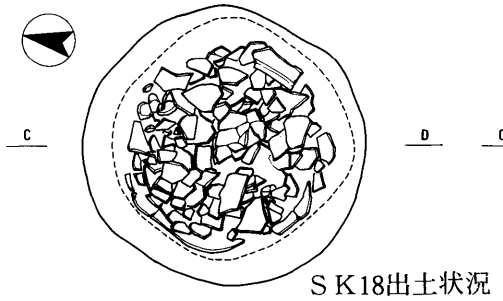
ＳＥ34

直径310cmの円形の石組み井戸である。石組みには、河原石が使われている。出土遺物からみて、近代以降のものと思われる。

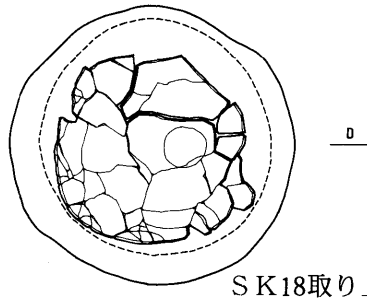


①暗褐色土
②黒褐色土
③暗黒褐色土
④黒色土
⑤黒色砂混土
⑥明黒色粘質土
⑦黒灰色砂混土
⑧淡黒灰色粘質土
⑨暗黒灰色粘質土
⑩黒灰色土
⑪暗黄色砂混土
⑫暗黄灰色砂
⑬青灰色粘土
⑭黄灰色砂

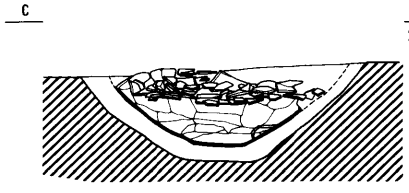


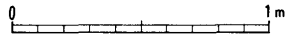


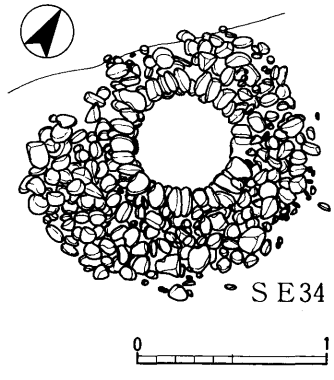
SK18出土状況

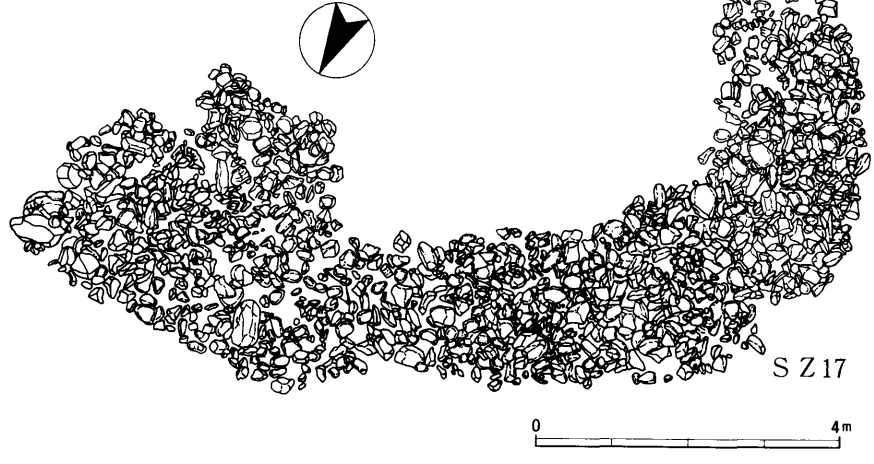


SK18取り上げ後









第13図　SZ17（1：100）,SK18（1：30）SE34（1：80）SD38実測図（1：400）土層断面図（1：40）

（6）時期不明の遺構

A地区

掘立柱建物

SB1

桁行3間以上×梁行3間以上の建物で、建物の棟方向はN11°Eである。遺物は、土師器片が少量出土している。

SB2

桁行3間以上×梁行2間以上の総柱建物で、建物の棟方向はN37°Eである。遺物は、土師器片が少量出土している。

SB3

桁行3間以上×梁行2間以上の総柱建物で、建物の棟方向はN37°Eである。遺物は、近世陶器片が少量出土している。

SB7

桁行2間×梁行1間の建物で、建物の棟方向は、N20°Eである。柱穴からの出土遺物はなかった。

SB8

桁行2間×梁行2間の総柱建物で、建物の棟方向はN52°Wである。柱穴からの遺物の出土はなかった。

SB12

桁行4間×梁行2間の総柱建物で、建物の棟方向はN42°Wである。柱穴からの遺物の出土はなかった。

SB13

桁行3間×梁行1間以上の総柱建物で、建物の棟方向は、N42°Wである。柱穴からの遺物の出土はなかった。

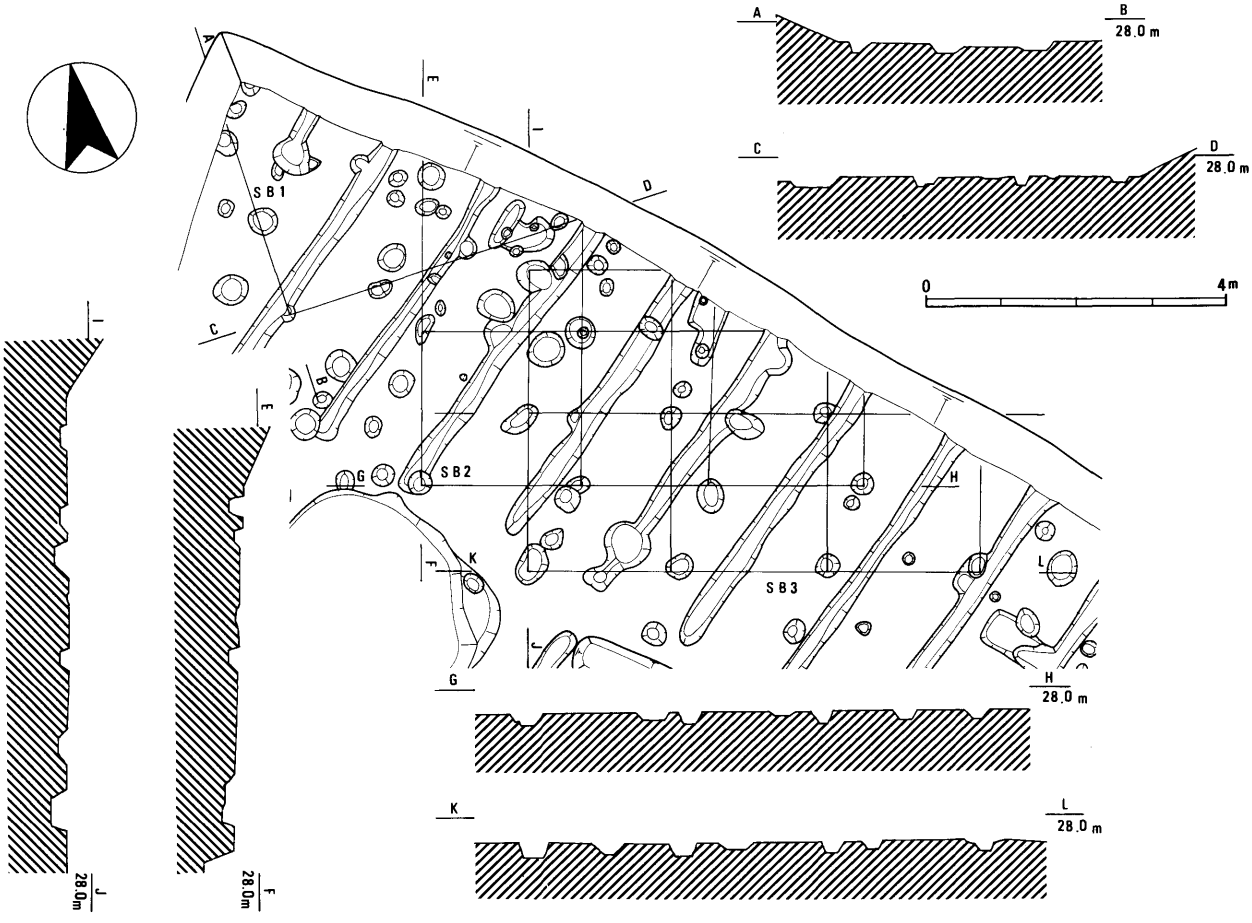
SB24

桁行3間×梁行2間の建物で、建物の棟方向は、N12°Eである。遺物は、土師器片が少量出土している。

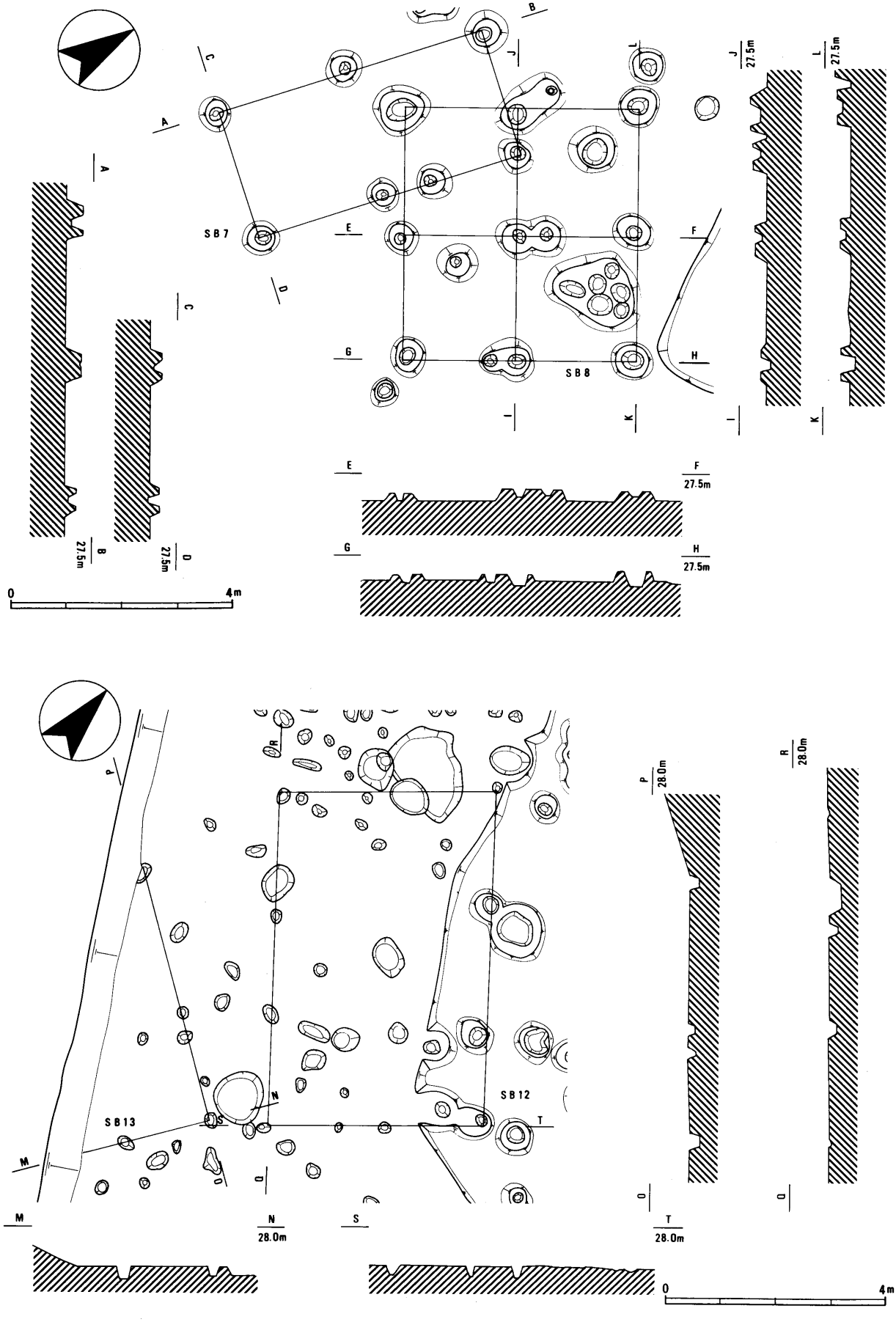
SB25

桁行3間×梁行2間の建物で、建物の棟方向は、N15°Eである。柱穴からの遺物の出土はなかった。

SB26



第14図　SB1,SB2,SB3　実測図（1：100）



第15図　SB7,SB8,SB12,SB13　実測図（1：100）

桁行２間×梁行２間の総柱建物で、建物の棟方向はＮ52°Ｅである。柱穴からの遺物の出土はなかった。

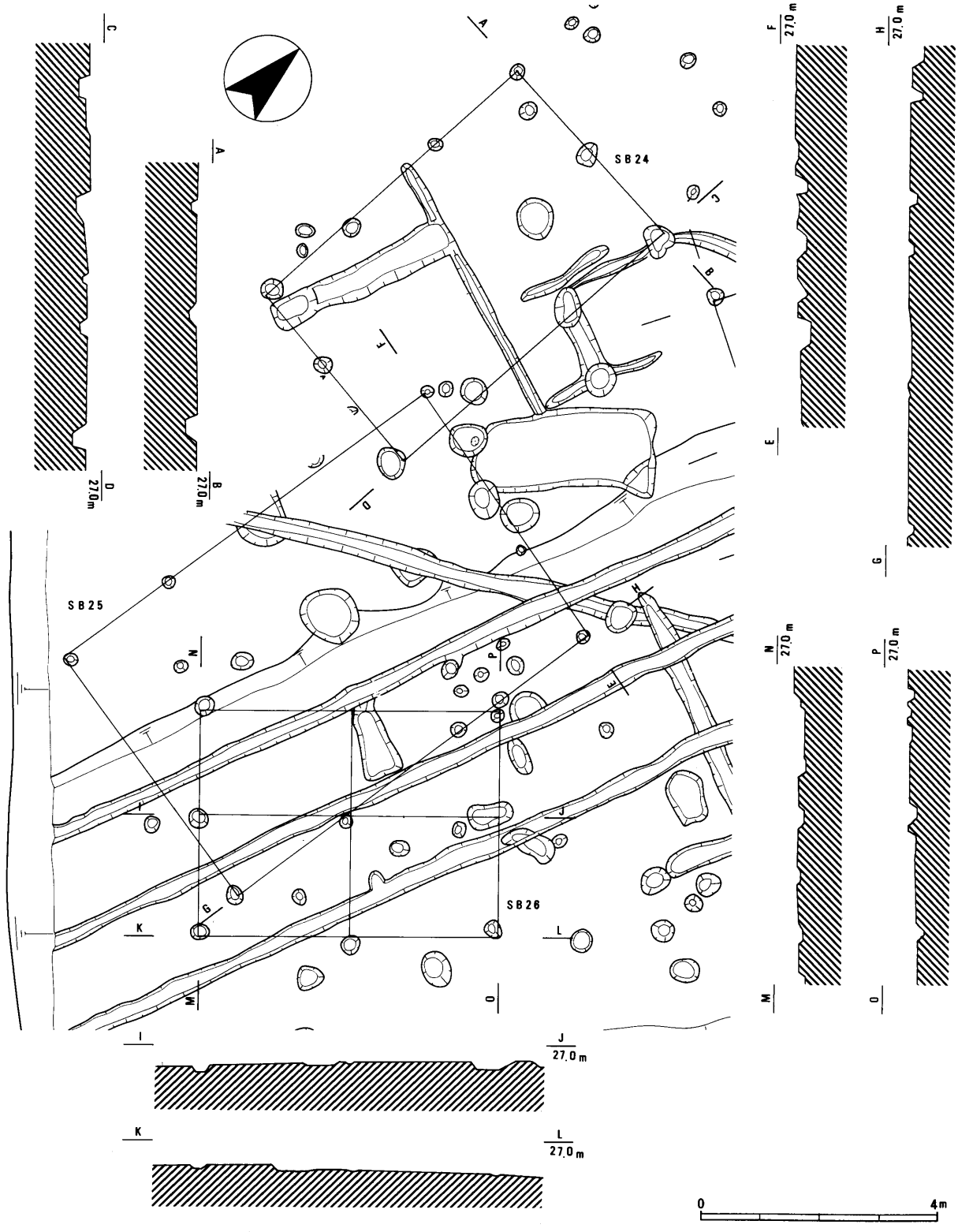
ＳＢ27

桁行３間×梁行２間の総柱建物で、建物の棟方向はＮ35°Ｅである。柱穴からの遺物の出土はなかった。

溝

ＳＤ20

幅30～45㎝、深さ10㎝の溝である。ＳＤ21に切



第16図　SB24,SB25,SB26　実測図（１：100）

られている。遺物は出土していない。

ＳＤ21

調査区を東西にほぼ横切っている。幅15～50cm、深さ６cmの溝である。調査区東側北隅でＳＤ５とぶつかる。

ＳＤ32

幅30～40cm、深さ15cmの南北に走っている溝である。ＳＤ22に調査区中央でぶつかる。

ＳＤ33

ＳＤ22と平行に走っている溝で、幅30～60cm、深さ８～10cmである。

ＳＺ42

東西150cm、南北110cmの円形の配石遺構である。石は10～50cm程度の河原石を用い、疎らに配置している。石の下部に土坑が存在したかどうかは、記録がなく不明である。石の間からの出土遺物はなく、時期は不明である。

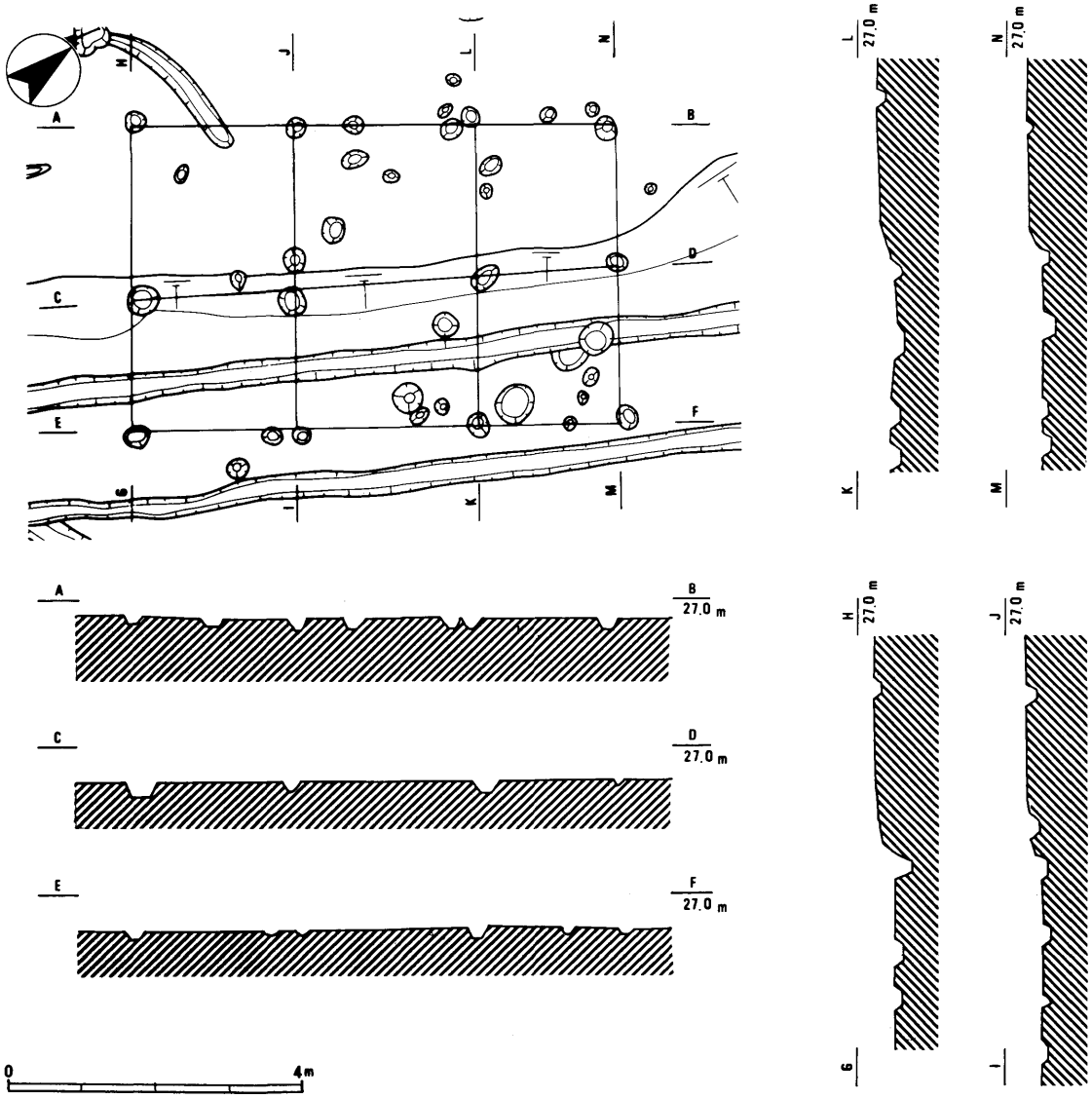
当遺跡の南に隣接する鴻ノ木遺跡[2]で、第５次調査時に同様の遺構が１基検出されているが、この遺構も出土遺物がなく、時期の決め手を欠くものであった。しかし、あえて時期を推定するならば、縄文時代後期前半にこの種の遺構が多く発見されていることや、鴻ノ木遺跡でも後期の遺物が微量出土していることから、後期に属する可能性が考えられており、当遺跡の本例も縄文時代後期前半期に推定したい。

Ｂ地区

土坑

ＳＫ43

調査区の東側南端にあり、長軸140cm、短軸80cmの大きさであるが、出土遺物はない。　（小浜　学）



第17図　SB27　実測図（１：100）

2. 遺　　物

遺跡全体をみると遺物の出土量はあまり多いとはいえない。A・B地区は、縄文時代早期から近代までの幅広い時期の遺物が出土している。C地区については、加工円盤や土師器片などの出土を少量確認した。なお、詳細な遺物の観察等については遺物観察表にゆずるものとする。以下、遺構ごとに報告する。

1．SK15出土遺物

弥生土器壺

(1)は、広口壺口縁部の小片である。口縁端部に二個一対の棒状工具による押圧が施されている。(2)は、頸部から肩部にかけての小片である。二枚貝条痕が体部外面に施されている。

弥生土器甕

(3)は、口縁部の小片である。口縁端部に棒状工具によるきざみが施されている。

なお、(1)から(3)の時期については、弥生時代中期中葉であると思われる。

2．SK16出土遺物

弥生土器壺（4）

広口壺底部片である。腹部がそろばん玉状に張ることが想定できる。

弥生土器甕（5）

口縁端部には、棒状工具による二個一対の押圧が3ヶ所確認でき、おそらく4ヶ所の押圧があったものと考えられる。体部外面には、二枚貝条痕が全面に施されている。

なお、(4),(5)の時期については、弥生時代中期中葉であると思われる。

3．SD14出土遺物

弥生土器壺

(6)は、広口壺口縁部片である。いわゆる亜流遠賀川式土器で、口縁端部に、横線が1本と軽いおさえが施されており、口縁部内面にも端部のものより太い横線が3本施されている。また、口縁端部から数えて3本目の横線と重複するような形で補修孔と考えられる穿孔がみられる。時期は、弥生時代前期と思われる。(7)は、細片であるため、器種の特定はできないものの、2本の太い横線がみられる。弥生時代前期のものであろうか。(8)は、壺と思われる。土器表面の磨耗が顕著であるため文様が不鮮明であるが、二枚貝条痕と思われるものがみられる。弥生時代中期のものであろうか。(9)は、底部の小片であり、胎土に砂粒が多く含まれる。弥生時代中期のものであろうか。なお、(6)～(9)については、混入品と考えられる。

古式土師器二重口縁壺（10）

口縁部片である。口縁屈曲部に櫛状工具による刺突がみられる。

古式土師器甕

(11)については、S字甕の口縁部片である。口縁部にナデ、肩部にはハケメがみられる。(12)は、台付甕の脚部片か。(11),(12)の時期については、古墳時代前期後半と思われる。

3．SH4出土遺物

弥生土器広口壺（13）

口縁端部には、棒状工具による刻目が施されている。時期は、弥生時代中期前葉と思われる。なお、この遺物については、混入品であると考える。

土師器甕（14）

口縁部が大きく外反しており、口縁部ヨコナデ、内外面ともハケメが施され、内面の口縁部の一部に煤の付着がみられる。

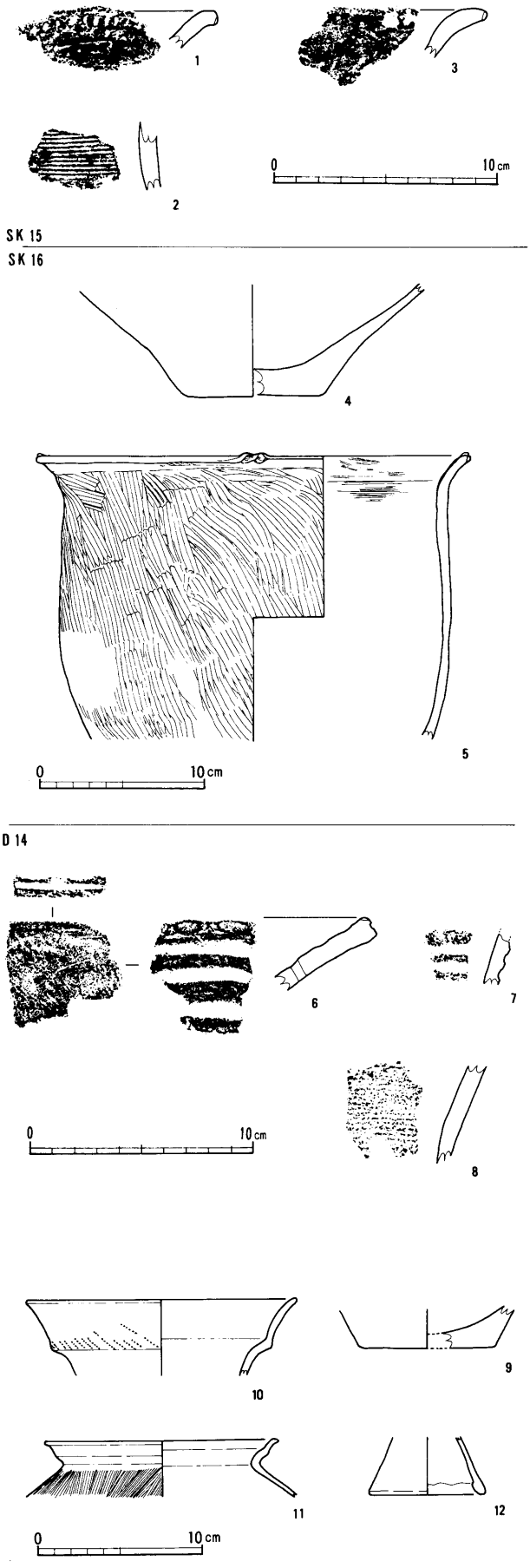
須恵器杯蓋（15）

天井部に偏平なつまみがついたもので、口縁部は欠損している。焼成が悪く赤みを帯びている。なお、(14),(15)の時期については、奈良時代前期と思われる。

4．SH36出土遺物

管玉（16）

SH36の竈跡の焼土中より出土した。緑色凝灰岩



第18図　SD14（1:3,1:4）SK15（1:3）SK16（1:4）出土遺物実測図

から作られたもので、長さ1.2cm、厚さ0.9cmの大きさがあり、完形品ではない。時期としては、古墳時代のものであろう。この遺物は、混入品と考えられる。

土師器杯

(17)～(21)は粗製の杯である。(17)の底部外面には三本の線刻がみられる。(22,23)は、厚みがあり深めの杯である。内面には、底部に螺旋暗文、口縁部に放射状の暗文が施され、底部外面にはケズリで調整されている。(24)については、口径が15cm、器高2.9cmで、口縁部ナデ、底部ユビオサエを施す。(25)は、口径が18.6cm、器高5.8cmで、口縁部ナデ、底部外面ユビオサエである。(17)から(25)についての時期は、奈良時代前期であると思われる。

土師器高杯

(26)は、杯部の小片で、底部にハケメが施されている。(27)は、杯部のみほぼ完存で、底部には、ハケによる調整が施されている。(28)の、裾部の内面にW字状の線刻がみられる。これらの時期は、奈良時代前期に属するものと思われる。

土師器甕

(29)は、口縁部は、ヨコナデで調整され、体部外面はハケメが施されている。内面には一部に煤の付着がみられた。(30)についても、口縁部はヨコナデで調整され、体部外面はハケメ、内面にも若干のハケメがみられる。(31)については、口縁部にはヨコナデが施され、体部外面にはハケメが施されており、内面はハケメとナデがみられる。(32)(33)は長胴甕で、口縁端部を若干つまみ上げる。また、口縁部にはヨコナデ、体部内外面ともハケメが施されている。(34)も長胴甕で、口縁端部をつまみ上げる。体部内外面にはハケメが施され、内面もハケメが施され、内面底部付近に近いところではヘラケズリである。(35)は、短い口縁部をもつもので、体部内外面にハケメが施されている。(36)は、口縁端部が、少しつまみだされようにうすくなっており、体部外面にはハケメが施されている。これらの時期は、奈良時代前期に属するものであると考えられる。

土師器甑（37）

口縁端部が少し内側に屈曲している。また、体部外面には、ハケメ調整が施されている。時期は、奈

良時代のものといえよう。

土師器鍋(38)

把手付の鍋である。口縁端部が少しつまみ出されたように薄くなっている。口縁部はナデ、体部外面にはハケメが施されるが底部までは及んでいない。体部内面は、ハケメ、底部近くでケズリが施されている。時期は、奈良時代前期のものと思われる。

須恵器杯

(39)については、少し厚手の杯である。口縁端部が若干肥厚し丸みを帯びている。(40,41)は、底部から屈曲して直線的に立ち上がる口縁部をもつ。(42,43)は、台付の杯である。深さの浅深はあるものの、口縁部から底部までは直線的で、台の裾の部分がつまみ出されたように広がっているという同じ形状をしている。これらの時期は、奈良時代前期のものと思われる。

5．ＳＤ38出土遺物

弥生土器壺(44)

底部片である。底部から開くように立ち上がっており、体部が張り出す形が推測できる。

弥生土器甕

(45)は、底部小片である。胎土には砂粒が多く含まれている。(46)は、小片ではあるが台付甕の脚部であろうか。これらの時期は小片のため判断が難しいが、弥生時代前期のものであろうか。

ミニチュア土器(47)

口縁部を欠損し、残存部で径５cm、深さ2.6cmを測る。小型の壺形土器か甕形土器と考えられる。時期は、古墳時代と思われる。

なお、(44)から(47)については、混入品である。

土師器杯

(48)は、口径22.4cm、深さ2.4cmの杯である。口縁部から底部にかけての内面には放射状の暗文、底部内面には螺旋暗文が施されている。また、底部外面には３本の線刻が平行に施されている。時期は、奈良時代前期と思われる。(49)は、口径15cm、深さ3.5cmのもので、内弯する口縁部をもつ。(50)は、口径16.8cm、深さ３cmの杯である。(51)は、内弯する口縁部で端部は外反し、底部にはケズリが施されている。また、底部外面に全体はわからないが２本の線刻がみられる。(52)は、口径22.4cm、深さ2.4cmの浅い杯である。(53)は、口径23cm、深さ２cmあり、底部内面には全体はわからないものの２本の線刻がある。これらの時期は、奈良時代後半と思われる。(54)は、口縁部が外反し、底部の調整は、雑なナデである。底部外面には、「要中」と読める二文字の墨書がある。(55)は、口径17.7cmでつまみが付く杯蓋である。(56)は、底部のみ残存する台付の杯であろう。これらの時期は、平安時代前期と思われる。(57)は、杯の小片で、口縁部が外反しているのがわかる。(58)は、若干薄手の杯で、口縁部が外反している。これらの時期については、平安時代後期と思われる。

土師器甕

(59)は、口縁部が大きく外反し、体部外面には細いハケメが施されている。(60)，(61)は、口縁部が「く」字状に屈曲し、体部内外面にハケメが施されている長胴甕である。これらの時期は、奈良時代のもと思われる。(62)は、体部外面に幅の広いハケメが施されている小片である。(63)については、口縁部が若干立ち上がり気味で、体部内外面にハケメが施されている。時期は平安時代のものであろうか。

須恵器杯(64)

口縁部が少し外反しており、口縁部はヨコナデ、底部にはロクロケズリを施す。時期は、奈良時代前期のものと思われる。

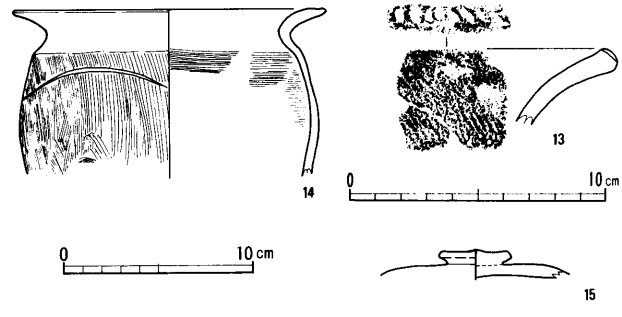
須恵器壺(65)

口縁端部から口縁部内面にかけて少し段差がみられる。奈良時代のものであろうか。

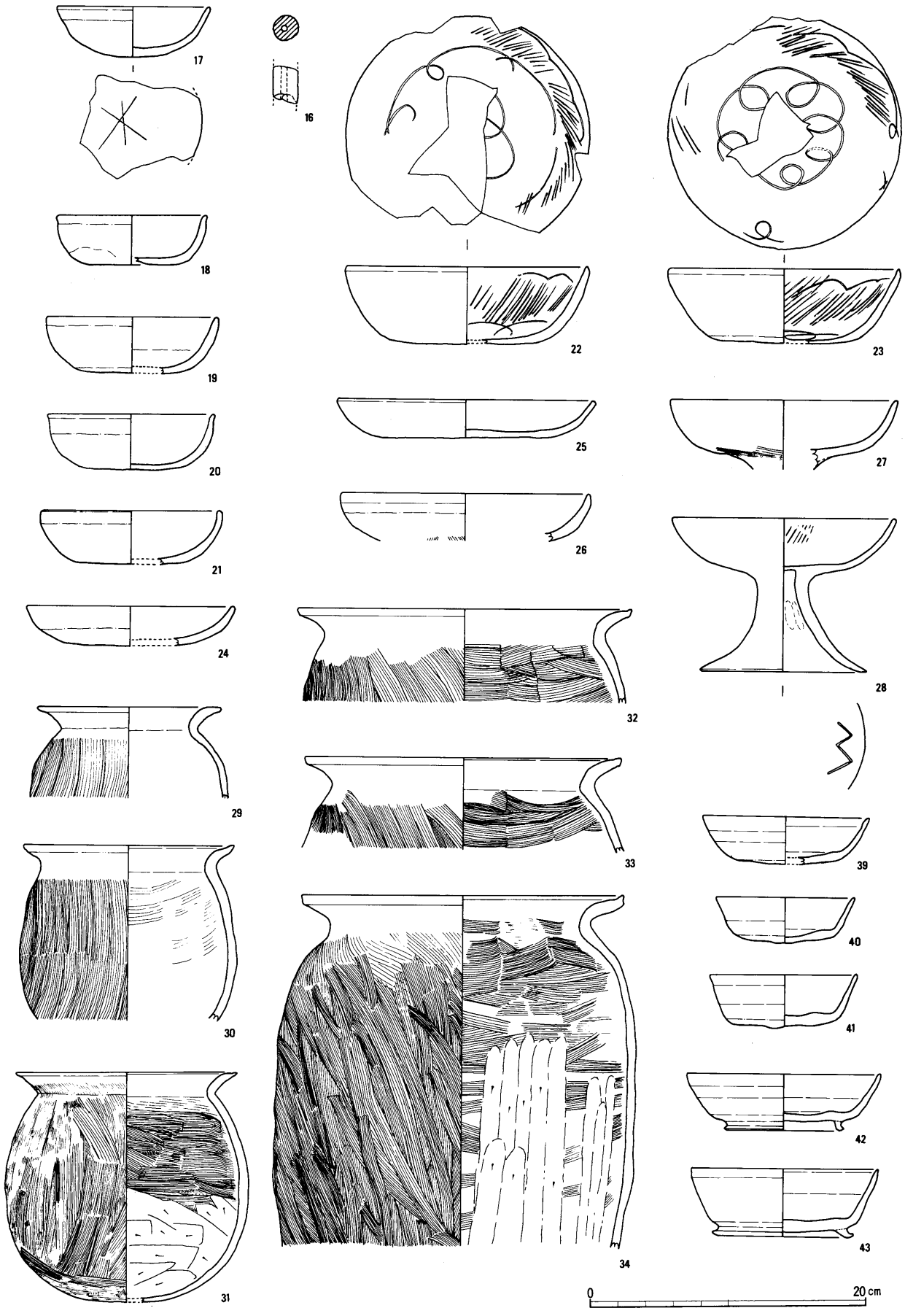
6．ＳＤ41出土遺物

山茶椀(66)

底部外面に「よね」と墨書された小片である。女



第19図　SH4　出土遺物実測図（1:4、但し13は1:3）



第20図　SH36出土遺物実測図（１：４、但し16は１：１）

性の名前ともとれるが、「米」を意味していると考えられ、現代でいう計量カップのような使い方をされていたのだろうか。時期は、鎌倉時代前期のものではないだろうか。度会郡玉城町蚊山遺跡においても山茶椀底部に「よね」と墨書のあるものが１点出土している。

土錘

完形品ではないものが２点出土している。(67)は長さ3.5cm、厚さ1.4cm、(68)は長さ3.8cm、厚さ1.1 cmである。

７．ＳＺ17出土遺物

加工円盤

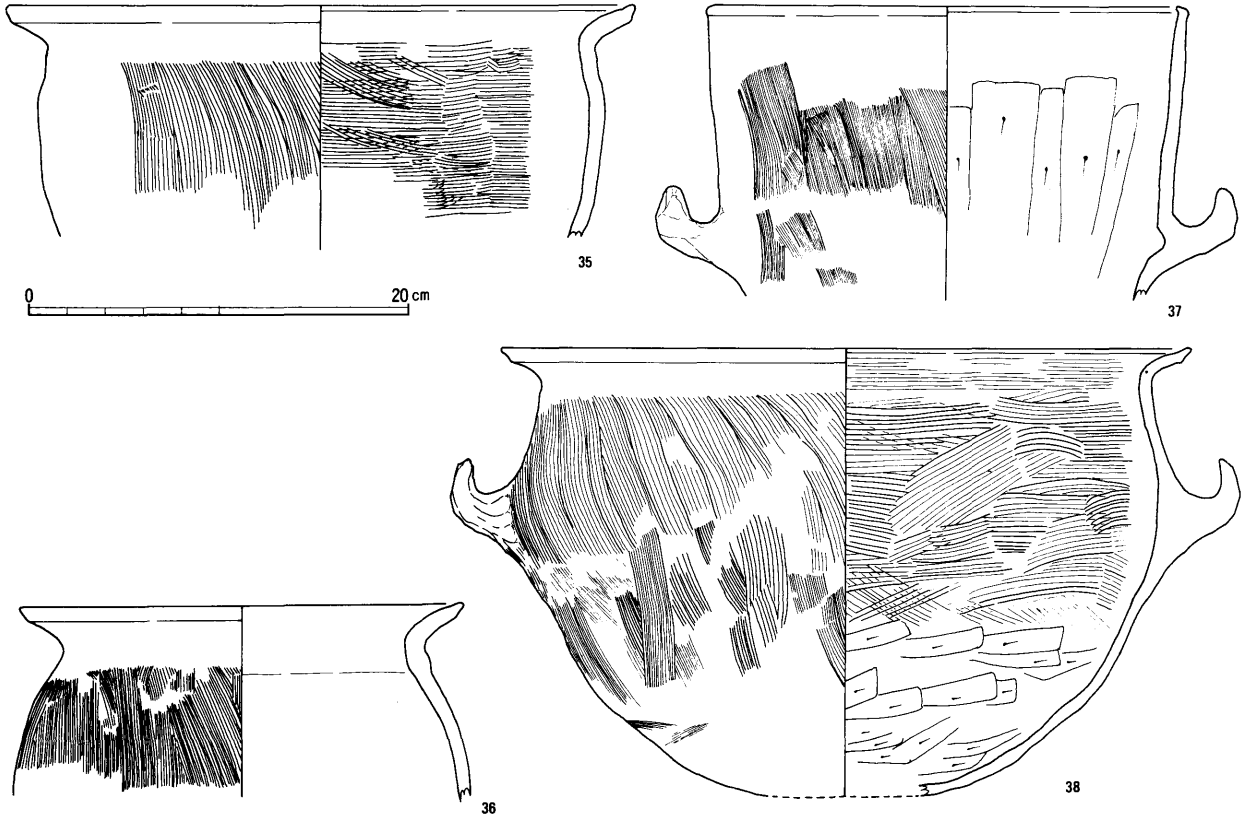
これまでに、円形加工陶磁製品・円板状土製品や小型円板などとよばれているが、ここでは加工円盤と呼ぶことにする。埋土中より７点出土している。ここでは、６点を図化した。(69)は、径５cm、厚さ1.1cmの陶器体部片を転用したものである。(70)は、径5.9cm、一番厚いところで1.6cm、(71)は、径が６cm、一番厚いところで1.4cm、(72)は、径4.5cm、一番厚いところで1.3cm、(73)は、径5.3cm、一番厚いところで1.2cm、(74)は、径６cm、一番厚いところで1.4cmの大きさがそれぞれあり、土師器の高台部分を転用したものである。なお、(73)、(74)については、穿孔が施されている。遺跡全体で100点の出土をみているが、明確な遺構から出土しているのは、ＳＺ17からの７点、ＳＤ５からの４点とＳＫ９からの１点である。これらについては、具体的な機能や用途は明らかになっておらず、冥銭説、玩具・遊戯具説や呪術・信仰に関係するものなど様々な説がある。

８．ＳＫ８出土遺物

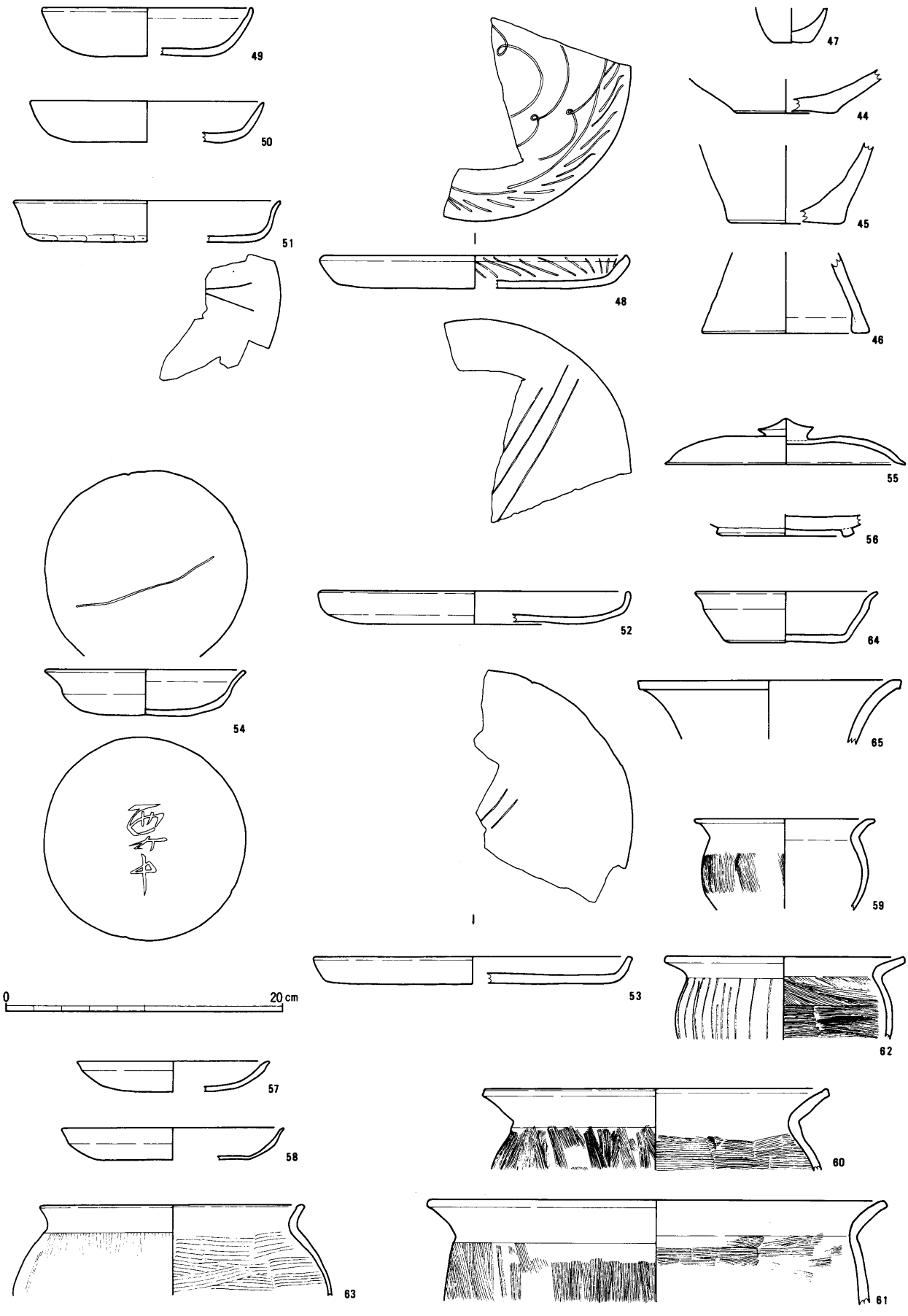
陶器大甕(75)

口縁部が二股に分かれていて、内側の部分が意識的に打ち欠いてある。口径88cm、器高が90cmの大きさで、常滑産の甕か。時期については、江戸時代のものと思われる。

９．包含層・柱穴の出土遺物



第21図　SH36出土遺物実測図（１：４）



第22図　ＳＤ38出土遺物実測図（１：４）

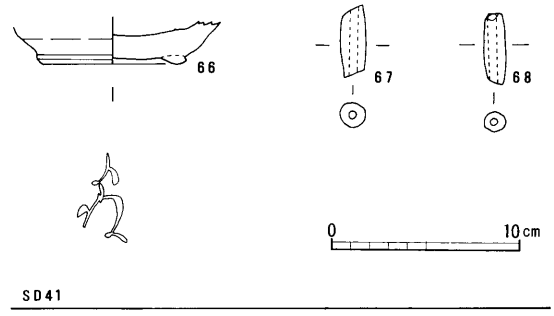
縄文土器

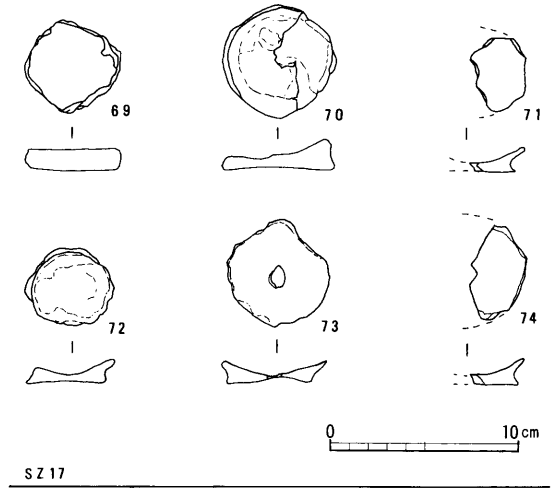
上層の遺物包含層からは、中期の土器が微量出土したにすぎない。南に隣接する鴻ノ木遺跡でのあり方と共通している。

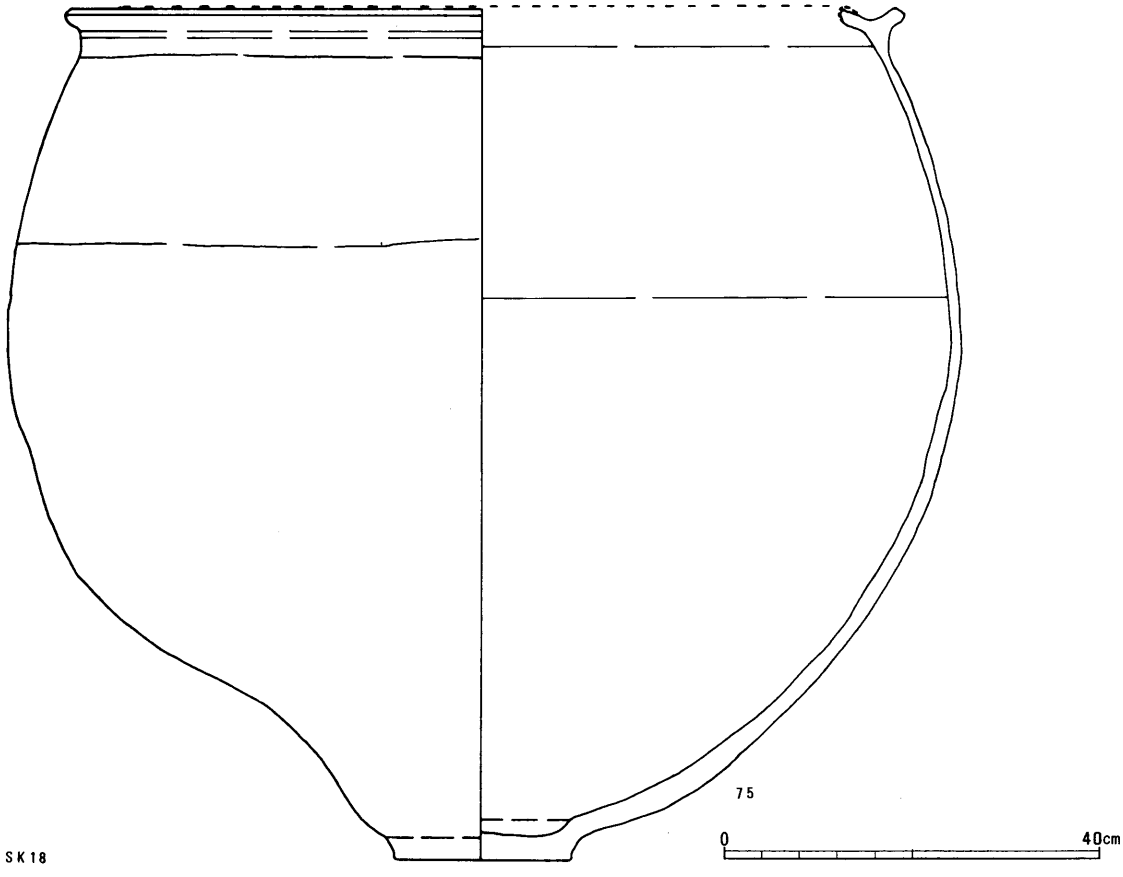
(117)は波頂部下に2個1対の突起を付け、その下部に縄文と半截竹管による並行沈線を施したもの。(118)は波状口縁の波頂部で、縄文地に半截竹管の腹で引いた並行沈線が施され、口縁単部にはC字状爪形文が見られる。(119)は隆帯上にC字状爪形文が施されるもの。(122)も同様のものと思われる。(120)・(121)・(123)などは半截竹管による並行沈線が認められるが、C字状爪形文は見られず、三角形の沈刻が見られるものである。

このほか、中期末葉に比定できる(124)がある。また、(125) は時期不詳であるが、口縁部外面に縄文が認められる。

一方、下層の遺物包含層は早期の押型文土器単純の包含層である。出土した押型文土器には、型式幅が認められる。







第23図　SK18（1：8），SZ17（1：4），ＳＤ41（1：4）出土遺物実測図

(76)・(81)は大鼻式の小破片。(76)は口縁端部に縄文が施されるもの、(81)はおそらく頸部の破片であろう、縄文が認められる。

(77)～(80)、(82)～(92)は大川式の破片。(77)・(78)は口縁部外面に市松文が、端部には刻みが施される。(79)・(80)は口縁部外面に刺突文が施されるもの。この刺突は大川式では普通頸部に施されるものである。(79)では右斜め下方からの刺突が上下2段に認められる。(80)では、上段の刺突が右斜め下方から、下段の刺突は左斜め下方から施され、その下には体部文様となる市松文が見られる。施文は深く、器壁内面にまで達しようとするものもあり、器面に凹凸が見られる。

(82)は頸部の刺突文、(83)～(92)は市松文の施された体部片である。

(93)～(98)はネガティブ楕円文の施されるもの、(99)～(107)は格子目文の施されるもの。格子目にはバリエーションがある。また、(108)～(115)は山形文の施されるものである。(111)のように、横位の帯状施文例や、(114)のような縦位の施文例もある。(116)は細かい縄文が施文されるものである。

弥生土器壺

(126)は、口縁端部に棒状工具によるキザミが施されている。(127)は、頸部の小片である。工具により波状文が施されている。(128)は、広口壺口縁部片で、かなり粗い砂混じりの胎土である。口縁端部にはキザミを施し、口縁部内面には瘤状突起がみられる。(129)は、口縁部から頸部にかけて二枚貝条痕が施されている。これらの時期は、弥生時代中期と思われる。

弥生土器鉢（130）

口縁部から胴上部までハケメが施され、口辺部には穿孔がみられる。弥生時代中期のものか。

弥生土器甕（131）

金雲母や砂粒を多く含んだ胎土の底部片である。

加工円盤

(132)～(139)については、土師質で(132)～(137)は椀の底部を、(138)(139)は鍋あるいは甕の体部片を加工している。なお、(136)(137)については、穿孔がみられる。(140)～(145)は、陶器片を転用しており、(145)は椀底部の高台部分で、他は体部片を加工している。

古式土師器甕（146）

口縁部がS字状に屈曲するいわゆるS字甕である。口縁部はヨコナデ、胴上部にはハケメを施す。

古式土師器壺（147）

口縁上部が外反し、内外面ともヨコナデの調整が施されている。時期は、古墳時代前期前半と思われる。

土師器杯

(148)・(149)は、粗製の杯で、口縁部にヨコナデ、底部にナデを施す。胎土の色は淡黄褐色である。(150)は、磨耗で表面の調整等がわかりずらい。胎土が赤褐色をしている少し浅い杯である。(151)は、底部から屈曲して直線状に立ち上がる口縁部をもつ。磨耗のため調整についてはわかりずらいが、口縁部はヨコナデか。これらの時期は、奈良時代と思われる。

土師器甕

(152)は、受け口状の口縁部をもち、体部内面に若干のハケメが施されている。(153)(154)は、体部内外面にハケメが施されている。(155)については、口縁部が外反し、体部外面にハケメが施され、内面にナデを施す。(152)から(155)の時期については、奈良時代後半と思われる。また、(156)は口縁部と頸部の屈曲がゆるく、体部内外面に若干のハケメが認められる。(157)の口縁端部は内傾する。これらの時期については、平安時代のものと思われる。

須恵器杯

(158)は、口径が13cm、深さ3.1cmで1/2を欠損する。(159)は、I 20地区柱穴からの出土で口縁部が一部欠失している。内外面とも調整はロクロナデである。底部が高台よりも張り出していて安定感がない。時期は、奈良時代前半と思われる。

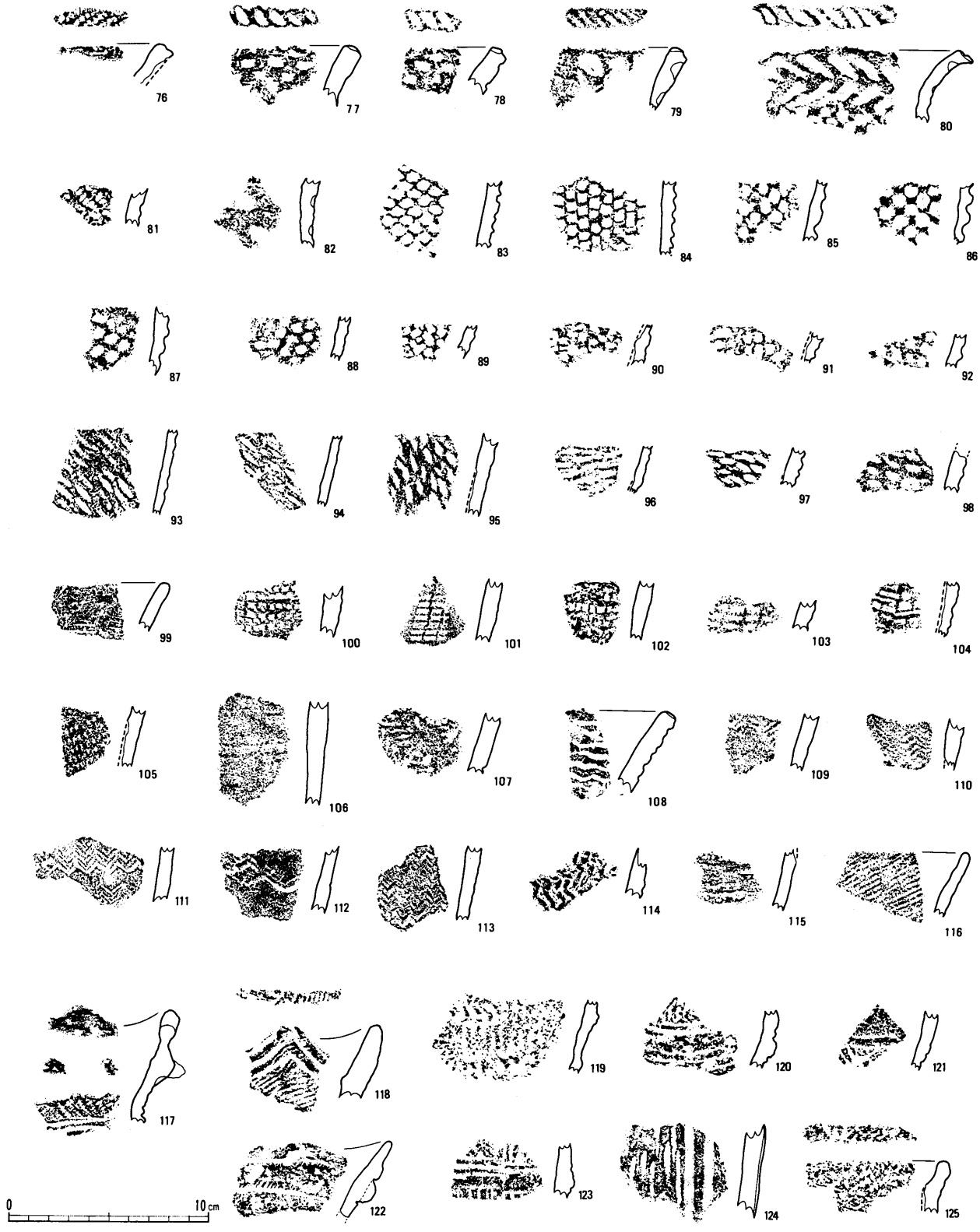
土馬（160）

頭部から頸部にかけて残存している。目、鼻、口が棒状工具による刺突・線刻により表現されており、耳、たてがみも粘土はりつけや、つまみ出しなどで表現されている。また、線刻により轡、頬革なども表現されておりいわゆる飾馬とよばれるものである。この地方では、このタイプの土馬が多く出土している。現在、三重県下において37遺跡で出土が確認さ

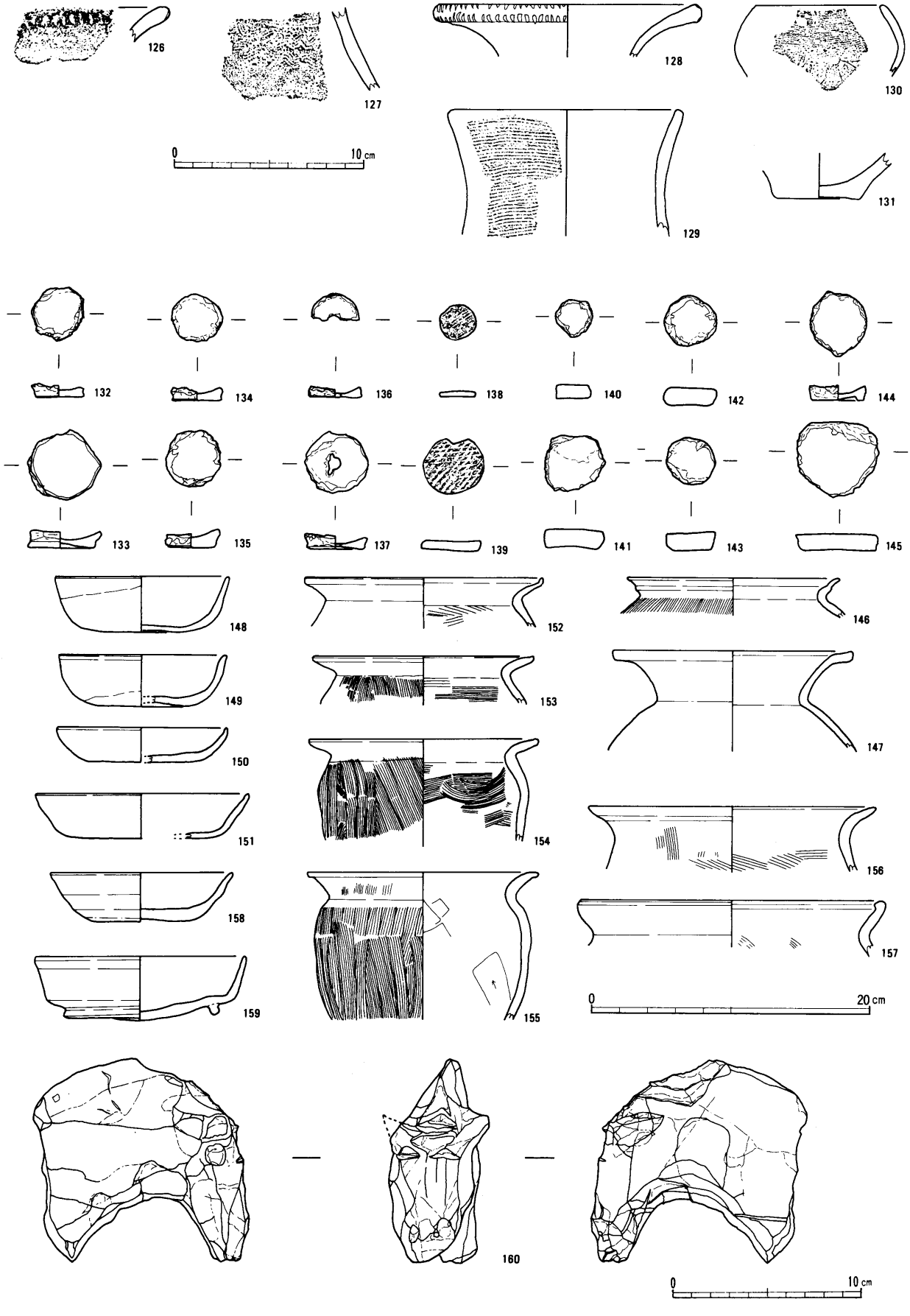
れている。以前『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』で報告された表面の赤色顔料の有無については、分析の結果、赤色顔料でないことが判明した[3]。（小　浜）

石製品

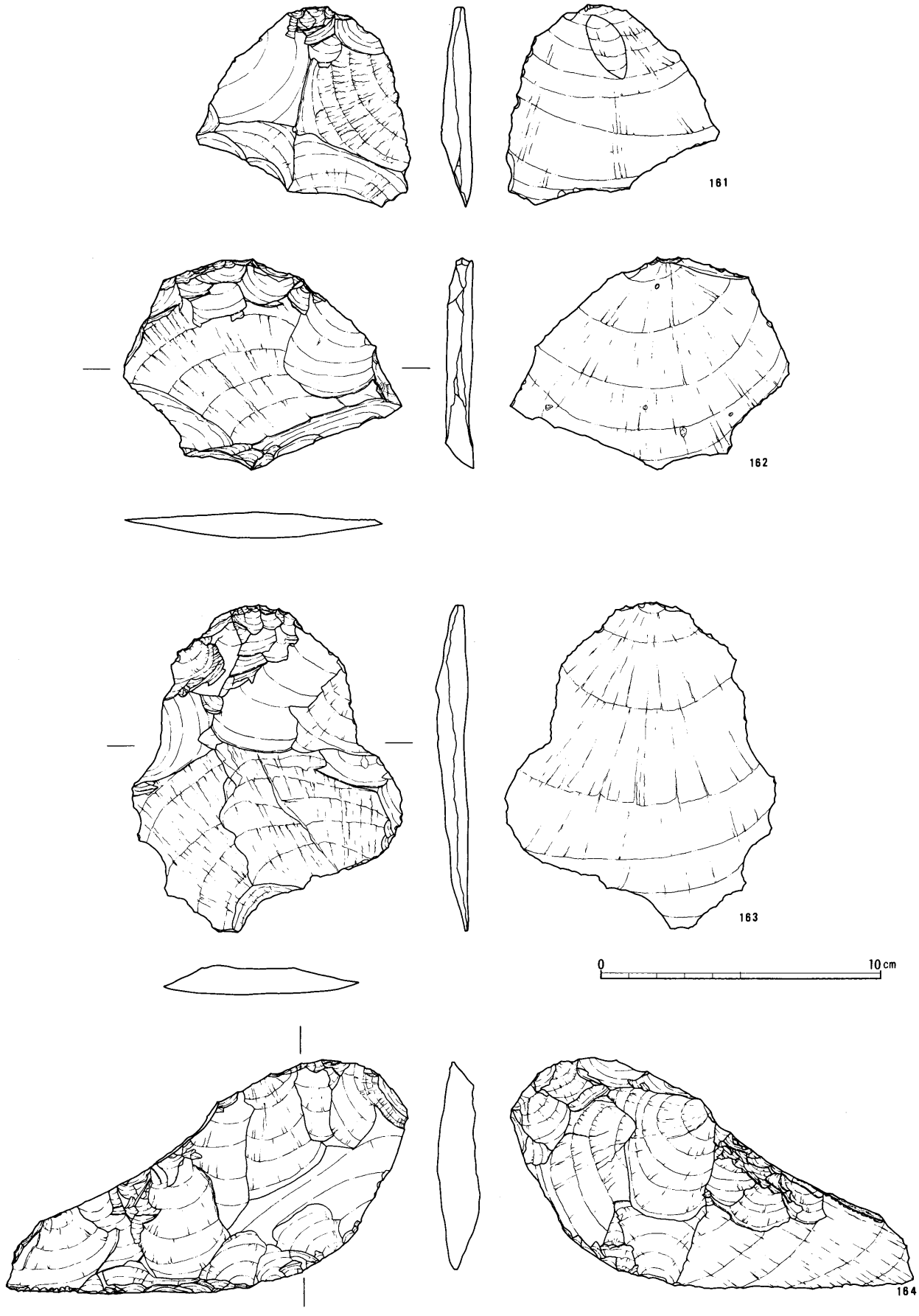
(161)～(166)のようなサヌカイト製の有使用痕剥片や二次調整のある剥片が出土している。出土状況が不明なのが惜しまれるが、一括しての出土らしい。いずれも大型の剥片を素材としており、デポ（一括埋納）の可能性も考えられる。



第24図　包含層出土遺物実測図（１：３）



第25図　包含層出土遺物実測図（1：4、但し126・127・160は1：3）



第26図　包含層出土遺物実測図（１：２）

(161)および(162)は背面からみて右側縁に刃こぼれが、(163)は左側面に刃こぼれが認められる。(164)は石核を転用したとも考えられる大型の削器である。刃部は緩い弧状を呈し、連続的でない粗雑な二次調整が施されている。

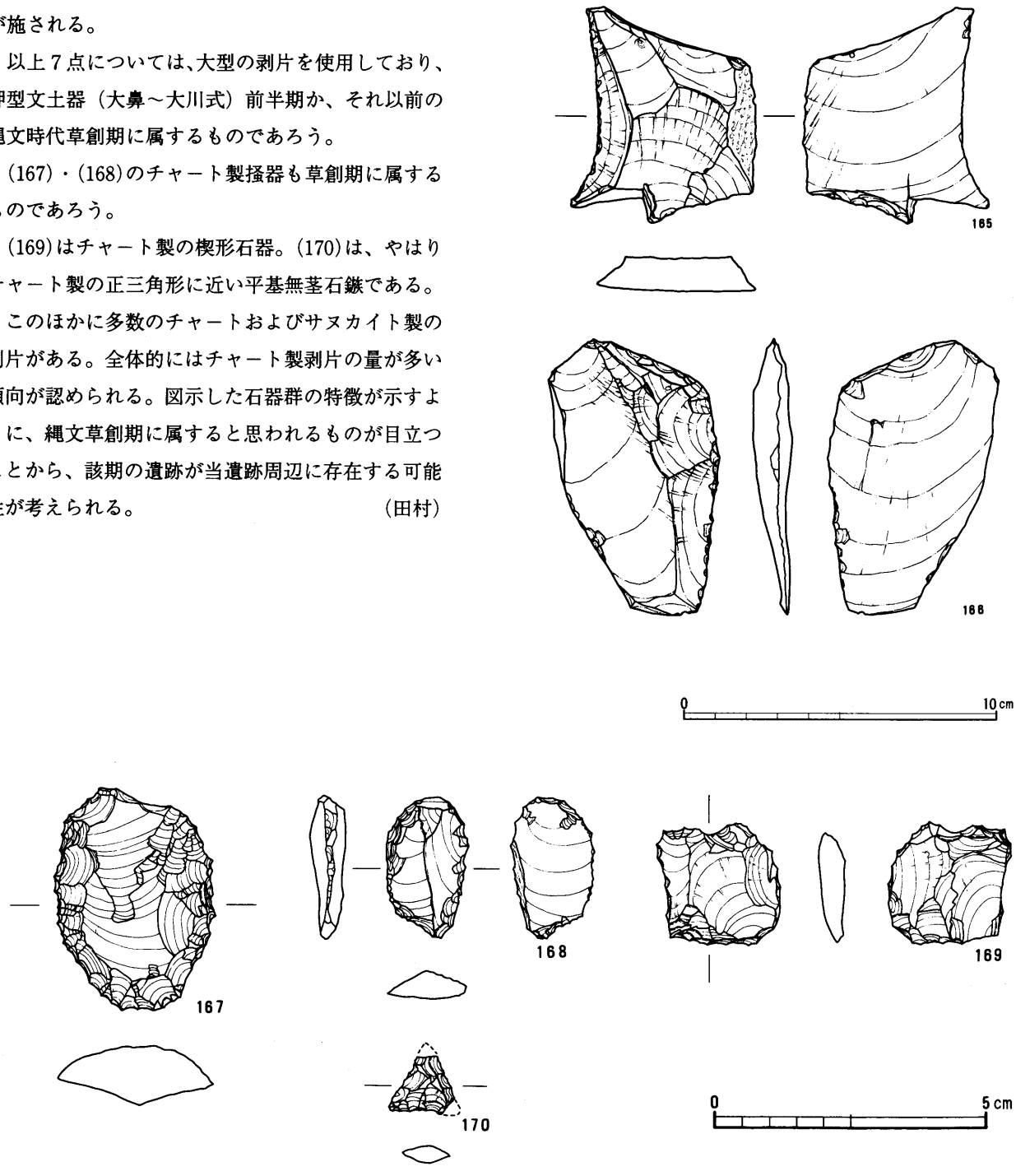
(165)は左側縁に刃こぼれ的な二次調整が施されるものである。(166) も右側縁の下半部に二次調整が施される。

以上７点については、大型の剥片を使用しており、押型文土器（大鼻～大川式）前半期か、それ以前の縄文時代草創期に属するものであろう。

(167)・(168)のチャート製掻器も草創期に属するものであろう。

(169)はチャート製の楔形石器。(170)は、やはりチャート製の正三角形に近い平基無茎石鏃である。

このほかに多数のチャートおよびサヌカイト製の剥片がある。全体的にはチャート製剥片の量が多い傾向が認められる。図示した石器群の特徴が示すように、縄文草創期に属すると思われるものが目立つことから、該期の遺跡が当遺跡周辺に存在する可能性が考えられる。（田村）



第27図　包含層出土遺物実測図（１：２,但し167～170は１：１）

3. 結　　語

最後に、朱中Ａ・Ｂ地区ならびにＣ地区の発掘調査を終えて、遺構と遺物について明らかになった点や留意すべき点を列記して結語にかえたい。

①縄文時代

当遺跡周辺には、鐘突遺跡・射原垣内遺跡・鴻ノ木遺跡などの縄文遺跡が周辺に存在している。しかし、縄文時代の遺構については、Ｂ地区の一部の下層調査を行ったものの、顕著な遺構は検出できなかった。だが、遺物については、縄文時代早期から中期にかけてのものが出土しており、中心は早期の押型文土器である。これは、鴻ノ木遺跡の発掘調査からわかった縄文時代早期遺構の広がりの北限を示しているとともに、早期から中期にかけて、当遺跡を含む周辺地域で人が活動していたことを窺わせる。

②弥生・古墳時代

弥生時代の土坑２基、古墳時代の溝１条というように遺構数が少ないものの、縄文時代から引き続き人の営みがあったことを示しているのではないだろうか。また、溝については、古墳の周溝とも考えられ、遺跡の北側にある朱中古墳との関連があるのではないだろうか。

③奈良時代・平安時代

飛鳥時代は、遺構がなく人の生活の場が周辺地域に移ったのだろうか。奈良時代の遺構については、Ａ地区にはＳＨ４が、Ｂ地区にはＳＨ36、ＳＢ35・37が散在している。この他には、遺構は見当たらないことからも、集落の縁辺部であることが想定できる。また、平安時代の遺構については、土坑５基・溝６条を検出しているが住居跡など集落が形成された形跡がなく、集落の中心が移動したのではないかと思われる。

④土馬

一般に土馬と呼ばれているものは、20㎝程の土製小型馬のことで、祭祀に関わる遺物であるといわれており、三重県においては37遺跡からの出土が確認されている。この土馬の研究については、大場磐雄氏と前田豊邦氏らによって代表される。大場氏は、土馬には馬具を表現した飾馬とそうでない裸馬の２種類があり、土馬の製作目的は、出土した遺跡と文献にみる馬との関連から水霊祭祀、祈雨祭祀、峠神祭祀、墓前祭祀などが考えられるという[4]。前田氏は、馬具の表現を考慮しＡ～Ｄ類に分類し、製作目的はについても、葬制、神社祭祀、井戸祭祀、河川祭祀の４つの側面から検討している[5]。また、小笠原好彦氏は、畿内とその周辺の出土例を対象に、２段階10形式の分類を行い、製作目的については、祈雨祭祀を重視している[6]。朱中遺跡で出土した土馬については、小笠原編年の第Ⅰ段階Ｂ形式に比定される。なお、この土馬についての製作目的やどのように使われたのかは、包含層の出土ということもあり、推測でしかないが遺跡内あるいは遺跡周辺で、祈雨祭祀や河川祭祀などの水に関わる祭祀が行われていたのではないだろうか。

⑤鎌倉時代以降

掘立柱建物は時期不明ではあるが、規模や柱間などから鎌倉時代の遺構である可能性があるのではないか。そうだとすると、鎌倉時代が当遺跡の最盛期ということになるだろう。鎌倉時代以降、遺構や遺物の数は少なく、集落の中心ではないものの、近代まで綿々と人の営みが続いていたことが推測できよう。

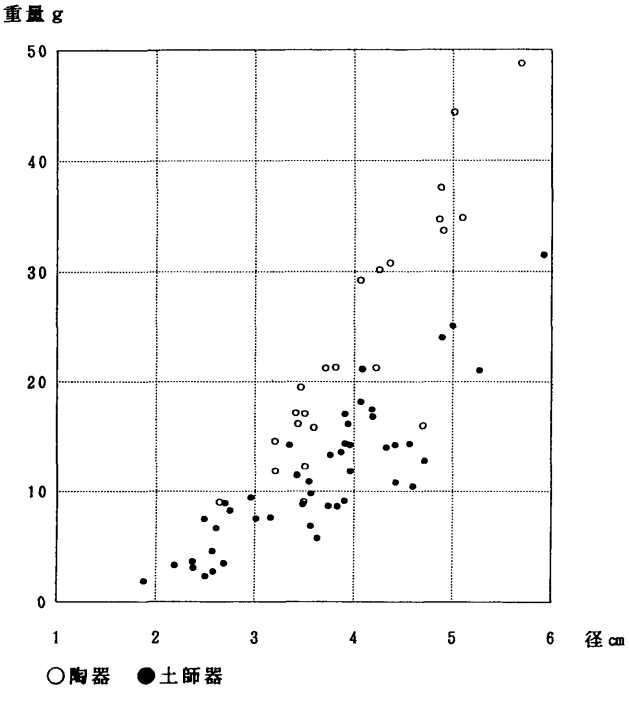
⑥加工円盤

土師器片や陶磁器片に加工痕のあるもので、小型円板[7]、円板状土製品[8]あるいは、円形加工陶磁製品[9]などと呼ばれていたものである。朱中遺跡において、100点の出土をみた。そのうちわけは、土師質のものが70点、陶器のものが30点である。土師質のものが多いというのは、加工しやすいということと使用した土器が土師質のものが多かったということか。また、遺構からの出土が12点、包含層からの出土が88点である。朱中遺跡では、鎌倉時代と室町時代の遺構から出土しており、加工円盤は鎌倉時代以降の遺物であることが推測できる。但し、磁器や山茶椀については使われていなかったようである。

ここでは、土器や陶器の加工されている部位により形態分類を行いたい。土師器高台付底部、土師器

底部、土師器体部片、不明、陶器高台付底部、陶器底部、陶器体部片と穿孔の存在により分類することにする（第４表参照）。器種については、土師器高台付底部と土師器底部は椀が多く、土師器体部片は甕あるいは鍋と考えられるが特定しずらい。陶器高台付底部は椀が多く、陶器底部については出土しておらず、陶器体部片についてはすり鉢および甕である。加工された部位については、底部が多く使用されており、全体の62％を占めている。なお、穿孔が施されているものは13点あり、すべて土師器高台付底部と土師器底部である。土師器全体で考えると18.6％の割合である。陶器のものについては穿孔を施されているものはない。また、加工円盤の径および質量の分布（第28図参照）から、土師質のものは例外はあるものの径５cm以下・質量20g以下の範囲に分布が集中しており、陶器のものは径４cm以上・質量30ｇ以上のもとそれ以下のものに分けられることがいえよう。陶器の径４cm以下・質量30ｇ以下のもののなかに底部を加工したもののほとんどが含まれている。

加工円盤の用途については、冥銭説、子どもの遊戯等に関連する説⑩、呪術・信仰に関連する説⑪などがある。当遺跡については100点の出土があったものの、遺構からの出土が12点と少なく、使用状況が明らかな状態で出土した例がなく、用途を明らかにするのは困難といえよう。冥銭説については墓などの遺構がないため無理があり、子どもの遊戯等関連する説についても、確かになかにはおはじきのようなものがみられるが６点しかなくこれも難しいだろう。呪術・信仰に関係していたという説についても、ＳＺ17から出土したものがそのような性格を持つ可能性も考えられるが、あくまでも推測の域をでない。また、これら以外の用途である可能性も考えられ、今後の、遺構からの資料の増加と研究の蓄積を待ちたいと思う。（小浜）



第28図　加工円盤分布図

	部　位	個体数	比率％
土師器	高台付底部	1　(1)	1　(1)
	底　　部	52 (12)	52 (12)
	体 部 片	5	5
	不　　明	12	12
	小　　計	70 (13)	70 (13)
陶器	高台付底部	9	9
	底　　部	0	0
	体 部 片	21	21
	小　　計	30	30
合　　計		100 (13)	———

第４表　加工円盤分類・比率表
※（　）内は穿孔あり

〔註〕

①御村精治『三重県度会郡度会町上ノ垣外遺跡発掘調査概報』　度会町遺跡調査会　1991

②田村陽一・小浜　学「鴻ノ木遺跡（第５次）」『一般国道松阪・多気バイパス発掘調査概報Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター　1994

③（株）パリノ・サーヴェイの分析による。

④大場磐雄「上代馬形遺物について」『考古学雑誌』第27巻４号　1937、「上代馬形遺物再考」『国学院雑誌』第67巻１号　1966

⑤前田豊邦「土製馬に関する試論」『古代学研究』53号　1970

⑥小笠原好彦「土馬考」『物質文化25』1975

⑦「元興寺極楽坊・位牌・物忌札・冥銭・石塔類」『日本仏教民俗基礎資料集成』第４巻　1977

⑧小田原昭嗣「草戸千軒町出土の円板状土製品」『草戸千軒』No.142　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1985

⑨山崎恒哉「付・円形加工陶磁製品について」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ』三重県教育委員会，三重県埋蔵文化財センター　1990

⑩ ⑦に同じ

⑪ ⑧に同じ

〔参考文献〕

金子裕之　「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告第７集』（本編）1985
『律令期祭祀遺物集成・日本古代の律令制神祇祭祀の成立過程と構造の研究　研究成果報告書Ⅱ』　1988

伊藤久嗣　「祭祀遺跡地名表・24三重県」『国立歴史民俗博物館研究報告第７集』（別冊）1985

河瀬信幸　「Ⅳ．杉垣内遺跡」『昭和61年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』（本文編）1989

遺構番号	概　　報	調　査　時	備　　考
ＳＢ　1	（Ａ地区）掘立柱建物５	――――	
ＳＢ　2	（Ａ地区）掘立柱建物４	――――	
ＳＢ　3	（Ａ地区）掘立柱建物３	――――	
ＳＨ　4	（Ａ地区）竪穴住居	（Ａ地区）ＳＫ１	
ＳＤ　5	――――	（Ａ地区）ＳＤ27	
ＳＤ　6	――――	（Ａ地区）ＳＤ12・13	
ＳＢ　7	（Ａ地区）掘立柱建物２	――――	
ＳＢ　8	（Ａ地区）掘立柱建物１	――――	
ＳＫ　9	（Ａ地区）土坑	（Ａ地区）ＳＫ10	
ＳＫ　10	（Ａ地区）土坑	（Ａ地区）ＳＫ11	
ＳＫ　11	（Ａ地区）土坑	（Ａ地区）ＳＫ13	
ＳＢ　12	（Ａ地区）掘立柱建物６	――――	
ＳＢ　13	（Ａ地区）掘立柱建物７	――――	
ＳＤ　14	（Ａ地区）円形周溝状遺構	（Ａ地区）ＳＸ１	
ＳＫ　15	――――	（Ａ地区）ＳＫ６	
ＳＫ　16	――――	（Ａ地区）Ｆ17 Pit	
ＳＺ　17	（Ａ地区）集石遺構	（Ａ地区）ＳＸ２	
ＳＫ　18	――――	（Ａ地区）ＳＫ15	
ＳＤ　19	――――	（Ａ地区）ＳＤ15	
ＳＤ　20	――――	（Ａ地区）ＳＤ16	
ＳＤ　21	――――	（Ａ地区）ＳＤ17	
ＳＤ　22	――――	（Ａ地区）ＳＤ18	
ＳＫ　23	――――	（Ａ地区）ＳＤ19	
ＳＢ　24	（Ａ地区）掘立柱建物10	――――	
ＳＢ　25	（Ａ地区）掘立柱建物11	――――	
ＳＢ　26	（Ａ地区）掘立柱建物12	――――	
ＳＢ　27	（Ａ地区）掘立柱建物９	――――	
ＳＫ　28	――――	（Ａ地区）ＳＫ７	
ＳＫ　29	――――	（Ａ地区）ＳＫ９	
ＳＫ　30	――――	（Ａ地区）ＳＫ８	
ＳＤ　31	――――	（Ａ地区）ＳＤ36	
ＳＤ　32	――――	（Ａ地区）ＳＤ31	
ＳＤ　33	――――	（Ａ地区）ＳＤ29	
ＳＥ　34	（Ｂ地区）井戸	（Ｂ地区）ＳＥ	
ＳＢ　35	（Ｂ地区）掘立柱建物１	（Ｂ地区）掘立１号	
ＳＨ　36	（Ｂ地区）竪穴住居	（Ｂ地区）ＳＢ１	
ＳＢ　37	（Ｂ地区）掘立柱建物２	（Ｂ地区）掘立２号	
ＳＤ　38	（Ｂ地区）大溝	（Ｂ地区）大溝１・２	
ＳＤ　39	――――	（Ｂ地区）ＳＤ３	
ＳＤ　40	――――	（Ｂ地区）ＳＤ２	
ＳＤ　41	――――	（Ｂ地区）ＳＤ１	
ＳＺ　42	――――	（Ｂ地区）Ｋ31集石	
ＳＫ　43	――――	（Ｂ地区）ＳＫ１	

第５表　遺構対照表

遺物観察表

No.1

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
1	弥生土器 広口壺	SK15		○口縁端部キザミ、口端部ナデ	やや粗	やや良	淡黄 (2.5Y8/3)	口縁部のみ 6.3×2.6cm片		018-01
2	弥生土器 広口壺	SK15		○体部外面に二枚貝条痕、内面ナデ。	やや粗	やや良	にぶい橙 (7.5YR7/4)	体部のみ 4.6×3.2cm片		018-03
3	弥生土器 甕	SK15		○口縁端部に棒状工具によるキザミ、口縁部ナデ。	やや粗	やや良	浅黄橙 (10YR8/4)	口縁部のみ 5.2×3.3cm片		018-02
4	弥生土器 壺	SK16	底径: (7.9)	○底部ナデ。	粗	不良	外:淡橙 (5YR8/4) 内:灰白 (10YR8/2)	底部のみ 3/4存	○全体的に磨滅。 ○底部にスス付着。	002-02
5	弥生土器 甕	SK16	口径: (25.5)	○口縁部ヨコナデ、頸部~体部外面に二枚貝条痕、内面ナデ。 ○口縁端部に、棒状工具による二個一対の押圧を現状では3ヶ所もつ。	粗	やや不良	外:暗褐 (10YR3/4) 内:浅黄 (2.5Y7/3)	口縁~体部ほぼ完形	○内・外面とも部分的にスス付着。	001-01
6	弥生土器 壺	SD14		○全体的にヨコナデ。 ○口縁端部上面に細い横線1条・軽いオサエ ○口縁部内面に幅広な横線3本。 ○口縁下部に、補修孔と思われる穿孔が1ヶ所。	密	良	外:にぶい橙 (7.5YR6/4) 内:にぶい黄褐 (10YR4/3)	口縁部のみ 5.5×5.2cm片		013-05
7	弥生土器	SD14		○外面に横線、内面ナデ。	やや粗	やや良	外:黒褐 (10YR3/2) 内:褐 (7.5YR4/6)	体部のみ 2.3×2.5cm片	○細片のため器種は特定できず。	013-07
8	弥生土器 壺	SD14		○外面は波状をなす、二枚貝条痕か。 ○内面はナデ。	やや粗	やや良	明赤褐 (5YR5/6)	体部のみ 3.4×4.8cm片	○全体的に磨滅激しい。	013-06
9	弥生土器 壺	SD14	底径: (8.2)	○底部外面ナデ、内面ナデ、指オサエ。	粗	やや良	橙 (7.5YR7/6)	底部のみ 1/3存		019-05
10	弥生土器 壺	SD14	口径: (16.2)	○口縁部~屈曲部外面ナデ、屈曲部外面に櫛状工具による刺突文、屈曲部以下の外面オサエ。 ○内面は全体的にナデ。	やや密	やや良	浅黄橙 (10YR8/4)	口縁部のみ 2/3存		002-05
11	古式土師器 甕	SD14	口径: (13.8)	○口縁端部ヨコナデ、頸部外面ハケメ後ヨコナデ、肩部外面ハケメ。 ○内面ナデ。	やや密	やや良	淡黄 (2.5Y8/3)	口縁~肩部 1/6存		019-01
12	土師器 台付甕	SD14	脚径: (6.8)	○脚部は内、外面ともナデ。 ○脚部端部は折り返し、指オサエ。	やや密	やや不良	外:浅黄橙 (7.5YR8/4) 内:浅黄 (2.5Y8/3)	脚部のみ 1/4存	○特に外面の磨滅激しい。	019-04
13	弥生土器 広口壺	SH4		○口縁外部に棒状工具によるキザミ。 ○口縁部外面ハケメ後ヨコナデ、内面ナデ。	やや密	やや良	橙 (5YR6/6)	口縁部のみ 5.0×4.7cm片		013-01
14	土師器 甕	SH4	口径: (16.2)	○口縁部ヨコナデ、体部ハケメ。 ○体部外面にヘラ描文か。	やや密	やや良	外:にぶい橙 (5YR7/4) 内:にぶい黄橙 (10YR7/2)	口縁~体部 1/3存	○内面にスス付着。	002-03
15	須恵器 杯蓋	SH4	つまみ径: (3.8)	○つまみ部ナデ。 ○天井部外面ロクロナデ、内面ナデ。	粗	やや不良	外:灰赤 (2.5YR5/2) 内:にぶい褐 (7.5YR6/3)	天井部のみほぼ完形		002-06
16	管玉	SH36					明緑灰 (10GY8/1)	両端欠損 1.2×0.9cm片	○緑色凝灰岩製か。	030-04
17	土師器 杯	SH36	口径: (10.9) 高: (3.7)	○口縁部ヨコナデ。体部~底部外面指オサエ・ナデ、内面ナデ	やや粗	やや良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1/4存 但、底部完形	○底部外面に三条の線刻。	025-04
18	土師器 杯	SH36	口径: (10.6) 高: (3.6)	○口縁部ヨコナデ、体部~底部指オサエ後ナデ	やや密	やや良	橙 (5YR7/6)	1/3存	○体部外面に粘土接合痕あり。	028-01
19	土師器 杯	SH36	口径: (12.0) 高: (3.6)	○口縁~体部内面ヨコナデ、体部外面指オサエ後ナデ、底部ナデ	やや密	やや良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	3/4存		031-02
20	土師器 杯	SH36	口径: (11.8) 高: (4.1)	○口縁~体部内面ヨコナデ、体部外面指オサエ後ナデ、底部ナデ	やや密	やや良	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1/2存		025-03
21	土師器 杯	SH36	口径: (12.6) 高: (3.9)	○口縁~体部内面ヨコナデ、体部外面指オサエ後ナデ、底部ナデ	やや密	やや良	にぶい橙 (5YR6/4)	2/5存		031-01
22	土師器 杯	SH36	口径: (16.5) 高: (5.5)	○口縁~体部外面ケズリ後ミガキ、内面放射状の暗文。 ○底部外面ヘラケズリ、内面螺旋状暗文。	密	良	橙 (5YR6/8)	3/4存		027-02
23	土師器 杯	SH36	口径: (17.2) 高: (5.7)	○口縁~体部外面ケズリ後ミガキ、内面放射状の暗文。 ○底部外面ヘラケズリ、内面螺旋状暗文。	密	良	橙 (5YR6/8)	ほぼ完形		027-01
24	土師器 杯	SH36	口径: (15.0) 高: (2.9)	○口縁端部~口縁部内面ヨコナデ、外面ナデ。 ○体部以下外面指オサエ後ナデ、内面ナデ。	やや密	やや良	橙 (7.5YR7/6)	2/5存		030-02
25	土師器 杯	SH36	口径: (18.6) 高: (5.8)	○口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ。	やや密	やや良	浅黄橙 (10YR8/3)	1/2存	○体部外面の一部黒片。	024-03
26	土師器 高杯	SH36	口径: (17.6)	○口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部外面ハケメ。	やや密	やや良	にぶい橙 (5YR6/4)	杯部のみ 1/5存		030-03
27	土師器 高杯	SH36	口径: (16.2)	○口縁端部ヨコナデ、体部ナデ、底部外面ハケメ、内面ナデ	やや密	やや不良	浅黄橙 (7.5YR8/3)	杯部のみ 1/3存		031-03
28	土師器 高杯	SH36	口径: (16.0) 裾径: (11.7) 高: (11.2)	○杯部:口縁端部ヨコナデ、体部~底部外面指オサエ。内面は全体的にミガキ。 ○脚部:全体的にナデ。内面奥部は指オサエ。	密	良	外:浅黄橙 (7.5YR8/4) 内:橙 (5YR6/6)	ほぼ完形 但し、裾部端部はほとんど欠	○裾部内面にヘラ状工具で線刻。	024-01

遺物観察表

No.2

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
29	土師器 甕	SH36	口径:(13.0)	○口縁部ヨコナデ、頸部外面ハケメ後ヨコナデ。体部外面ハケメ、内面ナデ。	やや密	良	灰白(10YR8/2)	口縁～体部1/2存	○内面の一部にスス付着。	041-02
30	土師器 甕	SH36	口径:(15.0)	○口縁部ヨコナデ、頸部外面ハケメ後ヨコナデ。内面指オサエか。○体部外面ハケメ。内面ハケメ後ナデか。	密	良	にぶい橙(7.5YR7/3)	口縁～体部1/3存		041-03
31	土師器 甕	SH36	口径:(15.8) 高:(16.7)	○口縁端部ヨコナデ、口端部外面ハケメ・内面ハケメ後ヨコナデ。○肩部ハケメ。胴部外面ハケメ、内面ケズリ。	密	やや良	黄橙(10YR8/6) 黒褐(10YR3/1)	約1/2存	○外面の一部にスス付着	024-02
32	土師器 甕	SH36	口径:(23.8)	○口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ。	密	やや良	灰白(10YR8/1)	口縁～肩部1/6存	○外面の一部にスス付着	041-01
33	土師器 甕	SH36	口径:(22.5)	○口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ。	やや密	やや良	浅黄橙(7.5YR8/3)	口縁～肩部1/2存		030-01
34	土師器 甕	SH36	口径:(23.0)	○口縁部ヨコナデ、頸部外面指オサエ後ナデ。○肩部ハケメ。胴部外面ハケメ・内面ハケメ後ヘラケズリ。	やや密	やや不良	外:灰白(7.5YR8/2) 内:灰白(2.5Y8/2)	口縁～体部3/4存	○外面に部分的にスス付着	032-01
35	土師器 甕	SH36	口径:(32.8)	○口縁端部はヨコナデにより、つまみ上げられる格好。○肩部ハケメ胴部外面ハケメ・内面ハケメ後ヘラケズリ。	密	やや良	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁～体部1/3存		026-02
36	土師器 甕	SH36	口径:(22.9)	○口縁端部はヨコナデにより、つまみ出された格好で外反。口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ、内面ナデ。	密	やや良	外:にぶい橙(7.5YR7/4) 内:灰白(10YR8/2)	口縁～肩部完形	○外面は部分的に黒変する。	026-01
37	土師器 甑	SH36	口径:(24.3)	○口縁端部はヨコナデにより、内側へ屈曲。○体部外面ハケメ、内面ケズリ。○把手部貼り付け後ナデ。	密	やや不良	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁～体部1/6存	○体部外面の一部にスス付着。	025-01
38	土師器 鍋	SH36	口径:(36.0) 高:(23.6)	○口縁端部はヨコナデにより、一旦屈曲した後外反。○頸部ハケメ、把手部ナデ、底部外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	やや密	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	2/5存	○体部外面の一部にスス付着。	044-01
39	須恵器 杯	SH36	口径:(11.8) 高:(3.4)	○口縁～体部ロクロナデ。○底部外面ヘラ切り未調整、内面一方向ナデ。	密	良	灰(N4/0)	1/2存	○底部外面に粘土塊付着。	028-03
40	須恵器 杯	SH36	口径:(9.9) 高:(3.4)	○口縁～体部ロクロナデ。○底部外面ヘラ切り未調整、内面乱ナデ。	密	良	灰(N6/0)	約1/2存		028-04
41	須恵器 杯	SH36	口径:(10.6) 高:(3.9)	○口縁～体部ロクロナデ。○底部外面ヘラ切り未調整、内面一方向ナデ。	密	良	灰(N4/0)	ほぼ完形	○底部外面に粘土塊付着。	028-02
42	須恵器 杯	SH36	口径:(13.9) 高台径:(8.0) 高:(4.1)	○ロクロナデ。底部外面ヘラケズリ後、高台貼り付け後ナデ。	密	良	灰(N4/0)	1/2存		031-05
43	須恵器 杯	SH36	口径:(13.3) 高台径:(9.1) 高:(4.9)	○ロクロナデ。底部外面ヘラケズリ後、高台貼り付け後ナデ。	密	良	灰(N6/0)	1/2存 但し、底部は完形		028-05
44	弥生土器 壺	SD38	底径:(7.0)	○底部ナデ。	やや粗	やや不良	浅黄(2.5Y7/3)	底部のみ2/5存	○全体的に磨滅激しい。	033-01
45	弥生土器 甕	SD38	底径:(7.6)	○底部ナデ。	粗	やや良	にぶい橙(5YR7/4)	底部のみ1/4存	○全体的に磨滅激しい。	033-02
46	弥生土器 台付甕か	SD38	脚径:(11.8)	○底部ナデ。	粗	やや良	浅黄(10YR8/3)	底部のみ1/6存	○全体的に磨滅激しい。	033-03
47	ミニチュア土器	SD38	底径:(2.4)	○底部ナデ。	やや密	やや良	浅黄(2.5YR8/3)	底部のみ2/3存		033-04
48	土師器 杯	SD38	口径:(22.4) 高:(2.4)	○口縁～体部ヨコナデ。底部外面ケズリ後ナデ、内面ナデ。○口縁～体部内面に放射状の暗文、底部内面螺旋暗文。底部外面に平行直線状の線刻。	密	良	橙(5YR7/6)	約1/4存		036-01
49	土師器 杯	SD38	口径:(15.0) 高:(3.5)	○口縁端部は内弯。○口縁～底部内面ヨコナデ、底部外面ナデ。	密	良	浅黄橙(10YR8/4)	約1/2存	○口縁部・底部外面に粘土接合痕あり。	033-07
50	土師器 杯	SD38	口径:(16.8) 高:(3.0)	○口縁～体部ヨコナデ、底部外面ケズリ・内面ナデ。	密	良	橙(5YR7/6)	1/6存		035-04
51	土師器 杯	SD38	口径:(19.0) 高:(3.0)	○口縁端部はヨコナデにより、外反。○体部ヨコナデ、底部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面に、2条の線刻。	密	良	橙(5YR7/6)	1/3存		034-01
52	土師器 杯	SD38	口径:(22.4) 高:(2.4)	○口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	密	良	橙(5YR7/6)	1/3存		035-02
53	土師器 杯	SD38	口径:(23.0) 高:(2.0)	○口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。○底部内面に、2条の線刻。	やや密	やや良	浅黄橙(7.5YR8/6)	1/3存		034-04
54	土師器 杯	SD38	口径:(14.0) 高:(3.3)	○体部～口縁部にかけては、強い指オサエ・ヨコナデにより、大きく外反。○底部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面には、「要中」の2文字の墨書・内面には1条の線刻	やや密	やや良	外:黄橙(7.5YR8/8) 内:黄橙(7.5YR7/8)	完形 但し、底部に1cm大の円形の欠損部(?)あり		035-01
55	土師器 杯蓋	SD38	口径:(17.7) つまみ径(4.0) 高:(3.3)	○つまみ部ナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面ナデ、口縁端部ヨコナデ。	やや密	やや不良	外:灰(5Y6/1) 〔但し、口縁部は橙(7.5YR7/6)〕 内:橙(7.5YR7/6)	1/6存		035-03
56	土師器 杯身	SD38	高台径:(9.0)	○底部外面ヘラケズリ後、高台貼り付け後ナデ、内面ナデか。	やや密	やや不良	橙(7.5YR7/6) ～淡黄(2.5Y8/3)	4/5存	○全体的に磨滅激しく、調整不明瞭。	034-02

遺物観察表

No.3

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
57	土師器 杯	SD38	口径: (13.6) 高: (2.2)	○口縁部ヨコナデ、体部～底部外面指オサエ後ナデ、内面ナデ。 ○口縁部は、強いヨコナデにより少しくぼむ。	やや密	やや不良	浅黄橙 (10YR8/3)	1/6存	○全体的に磨滅激しく、調整不明瞭。	037-03
58	土師器 杯	SD38	口径: (16.0) 高: (2.4)	○口縁部ヨコナデ、体部～底部外面指オサエ後ナデ、内面ナデ。 ○口縁部は、強いヨコナデにより少しくぼむ。	やや密	やや良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1/8存		036-03
59	土師器 甕	SD38	口径: (13.0)	○口縁部ヨコナデ、頸部外面ハケメ後ヨコナデ。肩部外面ハケメ、内面ナデ。 ○胴部外面ヘラケズリか。	密	良	浅黄 (2.5YR8/3)	口縁～肩部 1/2存	○内・外面とも部分的にスス付着。	033-05
60	土師器 長胴甕	SD38	口径: (26.0)	○体部～口縁部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部はつまみ上げられた格好。 ○口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ。	密	やや良	浅黄橙 (10YR8/3)	口縁～肩部 1/6存		033-06
61	土師器 長胴甕	SD38	口径: (32.0)	○体部～口縁部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部はつまみ上げられた格好。 ○口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ後ナデか。	やや密	やや良	浅黄 (2.5Y8/3)	口縁～肩部 1/6		038-01
62	土師器 甕	SD38	口径: (17.0)	○体部～口縁部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部はつまみ上げられた格好。 ○口縁部ヨコナデ、肩部外面は幅広の縦位のハケメ、内面は横位の細かいハケメ。	やや密	良	灰白 (10YR8/2)	口縁～肩部 1/6	○頸部内面の一部にスス付着。	037-06
63	土師器 甕	SD38	口径: (18.6)	○口縁部は若干立ち上がり気味。 ○口縁端部はわずかに折り返す格好。 ○口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ後ヨコナデ、肩部ハケメ。	密	やや不良	浅黄 (2.5Y8/3)	口縁～肩部 1/6	○特に外面の磨滅激しく、調整不明瞭。	037-05
64	須恵器 杯	SD38	口径: (13.0) 高: (3.7)	○口縁部は、一旦屈曲した後外反。 ○口縁～体部ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面1方向ナデ。	やや密	良	灰 (N6/0)	1/2存		033-08
65	須恵器 壺	SD38	口径: (18.8)	○口縁端部内面に段をもつ。 ○口縁部ロクロナデ。	やや粗	やや良	灰白 (N7/0)	口縁部 1/6存		037-07
66	山茶椀	SD41	高台径: (7.0)	○ロクロナデ、底部外面ナデ後、高台貼り付け後ナデ。高台接合部に工具ナデか。 ○底部外面に、「よね」の2文字の墨書き。	やや密	やや良	灰白 (N8/0)	底部 2/3存		042-06
67	土錘	SD41	長径: (3.5) 厚: (1.4)	○外面ナデ。	やや密	良	灰白 (2.5Y8/2)	2/3存		042-01
68	土錘	SD41	長径: (3.8) 厚: (1.4)	○外面ナデ。	密	良	灰白 (2.5Y8/2) ～オリーブ黒 (5Y2/2)	4/5存	○外面の1/2の範囲は黒変	042-03
69	加工円盤	SZ17	径: (5.0) 厚: (1.1)	○陶器体部片を打ち欠いて、円形に成形。	やや密	良	上：灰褐 (5YR4/2) 下：にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	完形		021-02
70	加工円盤	SZ17	径: (5.9) 厚: (1.7)	○土師椀底部の高台外周を打ち欠いて、円形に成形。	密	やや良	上：浅黄橙 (7.5YR8/4) 下：にぶい黄橙 (10YR7/4)	上面 1/2欠のみ		021-04
71	加工円盤	SZ17	径: (6.0) 厚: (1.4)	○土師椀底部の高台外周を打ち欠いて、円形に成形。	密	良	淡黄 (2.5Y8/3)	1/4存		021-06
72	加工円盤	SZ17	径: (4.5) 厚: (1.3)	○土師椀底部の高台外周を打ち欠いて、円形に成形。	密	やや不良	灰白 (2.5Y7/1)	ほぼ完形		021-03
73	加工円盤	SZ17	径: (5.3) 厚: (1.2)	○土師椀底部の高台外周を打ち欠いて、円形に成形。	密	良	上：浅黄橙 (10YR8/3) 下：にぶい黄橙 (10YR7/3)	下面 3/4欠	○中央部に穿孔。	021-05
74	加工円盤	SZ17	径: (6.0) 厚: (1.4)	○土師椀底部の高台外周を打ち欠いて、円形に成形。	密	良	浅黄 (2.5Y8/3)	1/3存	○中央部に穿孔。	021-07
75	陶器 大甕	SK18	口径: (88.0) 底径: (23.0) 高: (90.0)	○ロクロナデ。口縁部貼り付けナデ、底部外面ヘラ切り未調整。	密	良	外：灰褐 (5YR5/2) 内：褐灰 (7.5YR5/1)	2/3存	○内・外面とも部分的に自然釉付着。 ○口縁立ち上がり部内面に、意図的な打ち欠き痕。 ○体部両面に粘土接合痕。	023-01
76	縄文土器	包含層下層		○口縁端部に縄文。	やや密	やや良	灰褐 (7.5YR4/2)	口縁部のみ 3.5×2.7cm片	○口縁部外面は剥離。	045-02
77	縄文土器	包含層下層		○口縁端部にキザミ。口縁部外面に押型文。	やや粗	やや良	にぶい橙 (7.5YR7/3)	口縁部のみ 4.5×3.5cm片		045-08
78	縄文土器	包含層下層		○口縁端部にキザミ。口縁部外面に市松文	やや粗	やや不良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	口縁部のみ 3.0×2.5cm片	○外面はやや磨滅気味。	045-04
79	縄文土器	包含層下層		○口縁端部にキザミ。口縁部外面に押型文。	やや粗	やや不良	外：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内：灰褐 (7.5YR4/2)	口縁部のみ 4.7×3.8cm片		045-06
80	縄文土器	包含層下層		○口縁端部にキザミ。頸部外面刺突文・肩部外面市松文。	やや粗	やや良	灰黄褐 (10YR6/2)	口縁部のみ 7.0×4.7cm片		045-07
81	縄文土器	包含層下層		○外面押型文。	やや密	やや良	にぶい褐 (7.5YR5/3)	頸部のみ 2.6×2.1cm片		045-01
82	縄文土器	包含層下層		○外面刺突文。	やや粗	やや不良	浅黄橙 (7.5YR8/3)	頸部のみ 3.3×3.8cm片	○全体的に磨滅進む	045-03
83	縄文土器	包含層下層		○外面市松文。	やや粗	やや良	浅黄橙 (10YR8/3)	体部のみ 4.0×5.0cm片		048-03

遺物観察表

No.4

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
84	縄文土器	包含層下層		○外面市松文。	やや密	やや良	灰黄褐（10YR6／2）	体部のみ 5.0×4.1cm片		045-09
85	縄文土器	包含層下層		○外面市松文。	やや粗	やや良	橙（7.5YR6／8）	体部のみ 3.2×3.8cm片		046-09
86	縄文土器	包含層下層		○外面市松文。	密	良	灰褐（7.5YR5／2）	体部のみ 3.4×3.4cm片		047-03
87	縄文土器	包含層下層		○外面市松文。	やや密	良	にぶい褐（7.5YR5／3）	体部のみ 3.2×3.4cm片		046-10
88	縄文土器	包含層下層		○外面市松文。	やや粗	やや良	にぶい褐（7.5YR5／3）	体部のみ 3.6×2.7cm片		047-02
89	縄文土器	包含層下層		○外面市松文。	やや密	良	にぶい黄橙（10YR7／3）	体部のみ 2.5×1.4cm片		045-14
90	縄文土器	包含層下層		○外面格子目文。	やや密	やや不良	浅黄橙（7.5YR8／4）	体部のみ 3.6×2.5cm片	○内面に剥離痕か。	046-11
91	縄文土器	包含層下層		○外面市松文。	やや密	やや良	灰褐（7.5YR5／2）	体部のみ 4.4×2.1cm片	○内面に剥離痕か。	047-04
92	縄文土器	包含層下層		○外面市松文。	やや密	やや良	にぶい褐（7.5YR5／4）	体部のみ 3.8×2.1cm片		048-01
93	縄文土器	包含層下層		○外面ネガティブ楕円文。	やや粗	良	にぶい黄橙（10YR7／4）	体部のみ 4.3×4.7cm片		047-07
94	縄文土器	包含層下層		○外面ネガティブ楕円文。	やや粗	良	にぶい黄橙（10YR6／4）	体部のみ 3.2×4.2cm片		048-02
95	縄文土器	包含層下層		○外面ネガティブ楕円文。	やや粗	やや不良	にぶい黄橙（10YR6／3）	体部のみ 4.0×4.5cm片	○内面に剥離痕。	046-01
96	縄文土器	包含層下層		○外面ネガティブ楕円文。	やや粗	良	にぶい黄橙（10YR6／3）	体部のみ 3.5×3.0cm片	○内面に剥離痕。	046-02
97	縄文土器	包含層下層		○外面ネガティブ楕円文。	やや粗	やや良	浅黄橙（10YR8／3）	体部のみ 3.3×2.2cm片	○内面に剥離痕。	047-08
98	縄文土器	包含層下層		○外面ネガティブ楕円文。	やや粗	やや良	褐灰（5YR5／1）	体部のみ 4.0×3.0cm片		046-05
99	縄文土器	包含層下層		○外面格子目文。	粗	やや不良	褐灰（10YR6／1）	口縁部のみ 3.8×3.0cm片		047-06
100	縄文土器	包含層下層		○外面格子目文。	粗	やや不良	灰褐（7.5YR6／2）	体部のみ 3.5×3.5cm片		045-11
101	縄文土器	包含層下層		○外面格子目文。	やや粗	やや良	にぶい黄橙（10YR6／3）	体部のみ 3.3×4.0cm片		046-03
102	縄文土器	包含層下層		○外面格子目文。	やや粗	やや良	外：灰褐（7.5YR4／2） 内：にぶい橙（7.5YR7／4）	体部のみ 3.0×3.5cm片		047-01
103	縄文土器	包含層下層		○外面格子目文。	粗	やや良	にぶい黄橙（10YR7／3）	体部のみ 4.1×2.5cm片		048-04
104	縄文土器	包含層下層		○外面格子目文。	やや粗	やや良	にぶい黄橙（10YR7／2）	体部のみ 2.5×3.0cm片	○内面は全面剥離。	045-15
105	縄文土器	包含層下層		○外面格子目文。	やや粗	やや不良	にぶい黄橙（10YR7／4）	体部のみ 2.7×3.7cm片	○全体的に磨滅、内面はほとんど剥離。	047-05
106	縄文土器	包含層下層		○外面格子目文。	粗	良	にぶい橙（7.5YR6／4）	体部のみ 4.7×6.0cm片		045-10
107	縄文土器	包含層下層		○外面格子目文。	粗	やや良	褐灰（10YR5／1）	体部のみ 4.2×3.8cm片		047-09
108	縄文土器	包含層下層		○口縁端部にキザミ、口縁部外面に山形文。	やや粗	やや良	浅黄橙（7.5YR8／3）	口縁部のみ 2.2×4.8cm片		047-05
109	縄文土器	包含層下層		○外面山形文。	やや密	やや良	褐灰（10YR5／1）	体部のみ 4.7×6.0cm片		046-08
110	縄文土器	包含層下層		○外面山形文。	粗	やや良	にぶい橙（7.5YR6／4）	体部のみ 3.5×3.0cm片		046-04

遺物観察表

No.5

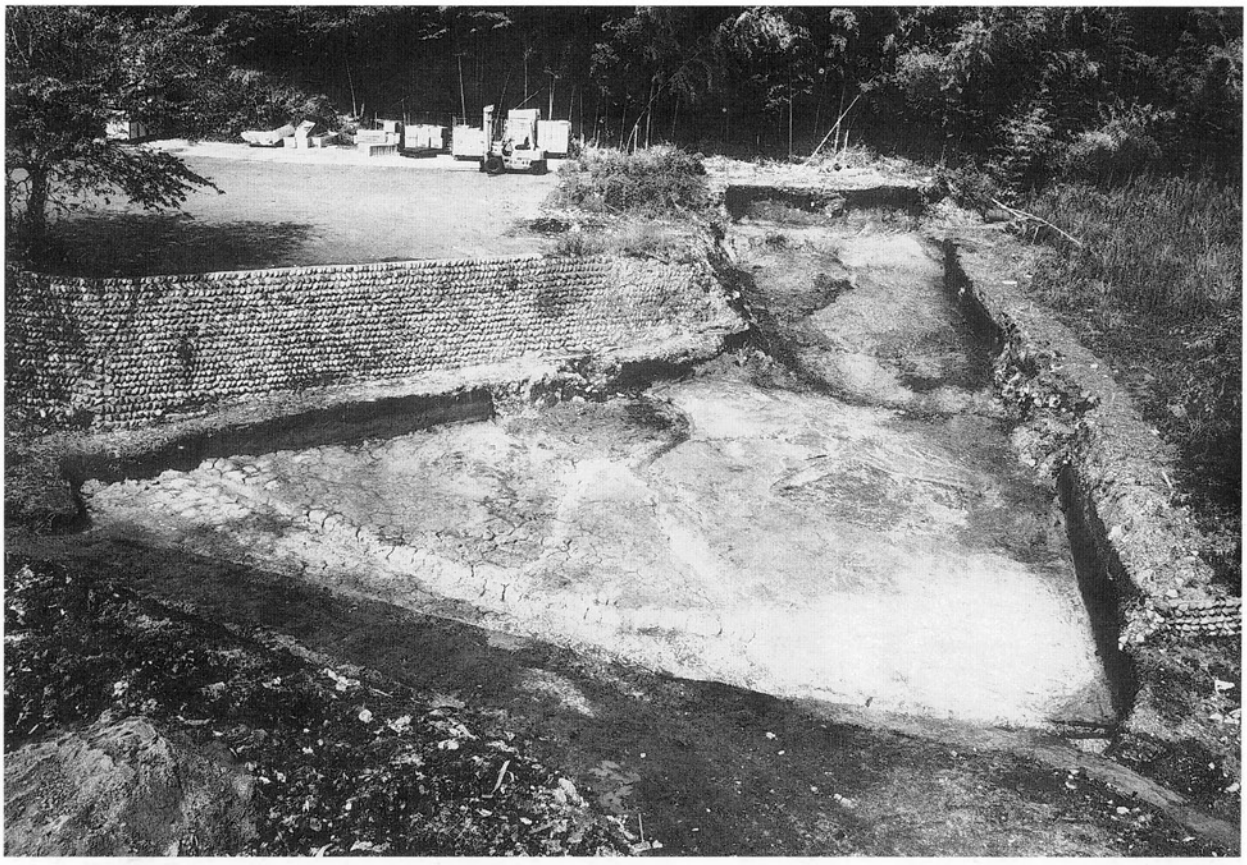
番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
112	縄文土器	包含層下層		○外面山形文。	やや密	やや良	外：褐灰（10YR5／1） 内：にぶい黄橙（10YR7／3）	体部のみ 4.3×4.0cm片		047-11
113	縄文土器	包含層下層		○外面山形文。	密	良	外：褐灰（10YR5／1） 内：にぶい橙（7.5YR6／4）	体部のみ 3.7×4.8cm片		046-07
114	縄文土器	包含層下層		○外面山形文（横位の帯状施文）。	やや密	良	外：灰褐（7.5YR5／2） 内：にぶい橙（7.5YR7／4）	体部のみ 4.5×3.2cm片		045-12
115	縄文土器	包含層下層		○外面山形文。	やや密	良	褐灰（10YR5／1）	体部のみ 5.0×3.5cm片	○内面にスス付着。 ○外面に剥離痕。	047-10
116	縄文土器	包含層下層		○外面に縄文。	やや粗	やや良	褐灰（7.5YR5／1）	口縁部のみ 4.5×3.9cm片		046-06
117	縄文土器	包含層上層		○外面： 口縁波頂部に2個1対の突起、さらにその下部に縄文と、半裁竹管による並行沈線。	やや密	やや良	灰褐（7.5YR4／2）	口縁部のみ 4.2×6.0cm片		049-02
118	縄文土器	包含層上層		○外面：口縁波頂部に縄文地に半裁竹管による並行沈線。 ○口縁端部上面にC字状爪形文。	やや粗	良	にぶい赤褐（6YR5／4）	口縁部のみ 4.0×4.5cm片		048-08
119	縄文土器	包含層上層		○外面は、押引C字爪形文をもつ隆帯間に縄文。	やや粗	不良	外：黒褐（7.5YR3／1） 内：褐（7.5YR4／4）	体部のみ 6.7×4.9cm片		048-05
120	縄文土器	包含層上層		○外面は、隆帯の両端に各2条の並行沈線、その上部にキザミ。	やや粗	やや不良	褐灰（7.5YR4／1）	体部のみ 4.6×3.9cm片		049-01
121	縄文土器	包含層上層		○外面は、並行沈線の上部に縄文、下部に逆三角形を描く沈刻。	粗	やや良	にぶい橙（7.5YR6／4）	体部のみ 3.4×3.4cm片		049-03
122	縄文土器	包含層上層		○口縁部外面は、隆帯貼付後、隆帯上面にC字状爪形文、下面にキザミ。その後、隆帯両端に平行沈線。 口縁波頂部外面に楔形の刺突文。	やや粗	やや良	にぶい橙（2.5YR6／4）	口縁部のみ 5.5×4.8cm片		013-09
123	縄文土器	包含層上層		○外面は、横位の並行沈線の上、下部に縦位のキザミ。	やや粗	やや不良	外：褐灰（7.5YR4／1） 内：明褐（7.5YR5／6）	体部のみ 4.8×3.2cm片		048-09
124	縄文土器	包含層上層		○外面は、垂下する短沈線。	やや粗	やや不良	灰白（10YR8／2）	体部のみ 5.5×5.9cm片		048-07
125	縄文土器	包含層上層		○外面格子目文。 ○内面に段あり。	粗	やや不良	橙（7.5YR6／6）	口縁部のみ 5.5×3.0cm片	○内面は部分的に剥離あり。	048-06
126	弥生土器 壺	包含層		○口縁端部に棒状工具によるキザミ。 ○口縁部ヨコナデ。	やや粗	良	にぶい黄橙（10YR7／3）	口縁部のみ 5.5×2.8cm片		013-04
127	弥生土器 壺	包含層		○頸部外面に条痕、その下部に波状文、内面オサエ。	やや粗	やや良	外：にぶい黄橙（10YR7／4） 内：黄灰（2.5Y5／1）	頸部のみ 5.5×5.4cm片		007-07
128	弥生土器 壺	包含層	口径： (18.2)	○口縁端部にキザミが2段。 ○口縁部ナデ、内面上部に瘤状突起が2個1対か。	粗	不良	灰黄（2.5Y6／2）	口縁部のみ 1／5存		013-03
129	弥生土器 壺	包含層	口径： (16.0)	○口縁～頸部外面2枚貝条痕、内面ナデ。	やや密	やや良	外：褐灰（10YR4／1） 内：にぶい黄橙（10YR6／3）	口縁～頸部 1／10存	○口縁端部は両面とも剥離。	008-05
130	弥生土器 鉢	包含層	口径： (9.0)	○口縁～胴部外面にクシメ、胴部以下外面ナデ。 内面は全体的にナデ。	やや粗	やや良	灰白（10YR8／1）	口縁～胴部 1／8存	○口縁部に穿孔が1ヶ所あり。 ○外面は部分的に黒変する。	008-06
131	弥生土器 甕	包含層	底径： (5.9)	○底部内・外面ともナデ。	粗	やや良	浅黄橙（7.5YR8／3）	底部のみ 完形		007-05
132	加工円盤	包含層	径：(3.8) 厚：(1.0)	○土師椀底部の高台外周を打ち欠く。	密	良	にぶい橙（7.5YR7／3）	ほぼ完形		014-05
133	加工円盤	包含層	径：(5.3) 厚：(1.3)	○土師椀底部の高台外周を打ち欠く。	密	良	灰白（10YR8／2）	ほぼ完形	○上面にスス付着か。	014-04
134	加工円盤	包含層	径：(3.7) 厚：(1.0)	○土師椀底部の高台外周を打ち欠く。	密	良	褐灰（10YR4／1）	ほぼ完形		014-06
135	加工円盤	包含層	径：(3.4) 厚：(1.3)	○土師椀底部の高台外周を打ち欠く。	密	良	上：褐灰（10YR4／1） 下：にぶい黄橙（10YR7／3）	ほぼ完形	○上面にスス付着か。	014-03
136	加工円盤	包含層	径：(3.4) 厚：(8.0)	○土師椀底部の高台外周を打ち欠く。	密	良	上：褐灰（10YR5／1） 下：にぶい黄橙（10YR7／3）	1／2存		015-01
137	加工円盤	包含層	径：(4.5) 厚：(1.1)	○土師椀底部の高台外周を打ち欠く。	密	良	にぶい黄橙（10YR7／3）	ほぼ完形	○中央に穿孔。	014-09
138	加工円盤	包含層	径：(2.5) 厚：(0.4)	○土師鍋又は甕の体部片を、打ち欠いて円形に成形。	密	良	上：浅黄橙（7.5YR8／3） 下：橙（2.5YR7／6）	ほぼ完形	○中央に穿孔。	015-04

遺物観察表

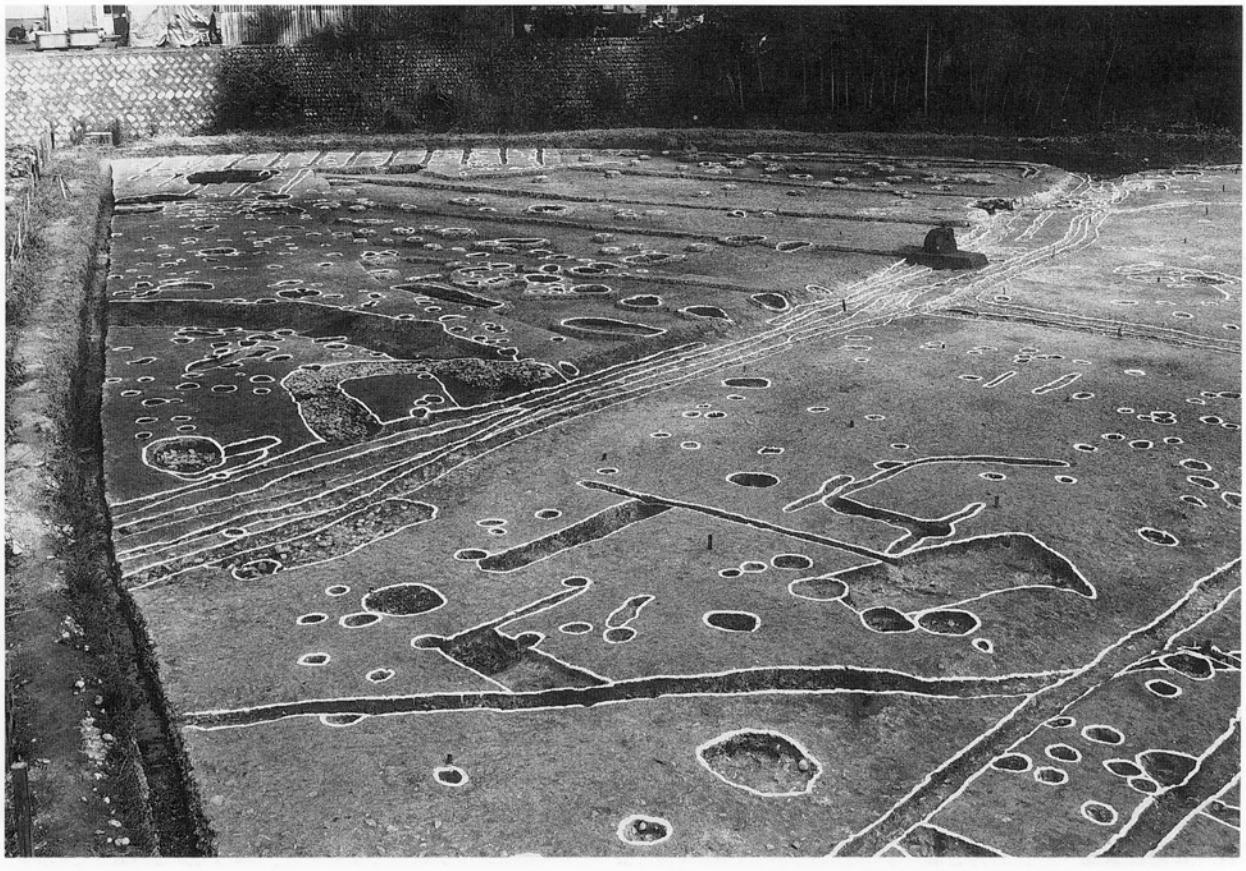
No.6

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
139	加工円盤	包含層	径: (4.2) 厚: (0.7)	○土師鍋又は甕の体部片を、打ち欠いて円形に成形。	密	良	上：明黄褐（10R6／6） 下：灰白（10YR8／2）	ほぼ完形	○中央に穿孔。	014-10
140	加工円盤	包含層	径: (2.5) 厚: (1.0)	○陶器体部片を打ち欠いて、円形に成形。	密	良	上：暗赤褐（10R3／3） 下：にぶい赤褐（5YR5／4）	ほぼ完形		013-12
141	加工円盤	包含層	径: (4.2) 厚: (1.2)	○陶器体部片を打ち欠いて、円形に成形。	やや粗	良	暗赤褐（5YR3／3）	ほぼ完形	○上面1/2部分は剥離。	014-01
142	加工円盤	包含層	径: (3.7) 厚: (1.3)	○陶器体部片を打ち欠いて、円形に成形後、円周部分をけずる。	やや密	良	上：橙（2.5YR6／6） 下：にぶい赤褐（7.5YR4／3）	ほぼ完形		014-08
143	加工円盤	包含層	径: (3.5) 厚: (1.3)	○陶器体部片を打ち欠いて、円形に成形後、円周部分をけずる。	やや密	良	上：灰黄褐（10YR6／2） 下：浅黄橙（7.5YR8／3）	ほぼ完形		014-07
144	加工円盤	包含層	径: (4.0) 厚: (1.1)	○陶器椀底部の高台外周を打ち欠いて円形に成形。	やや密	良	上：黒褐（7.5YR2／2） 下：灰白（2.5YR8／2）	ほぼ完形		014-02
145	加工円盤	包含層	径: (5.8) 厚: (1.1)	○陶器甕などの体部片を打ち欠いて円形に成形。	密	良	にぶい赤褐（5YR4／3）	ほぼ完形		013-11
146	古式土師器 甕	包含層	口径: (15.1)	○口縁部がS字状をなす。 ○口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ナデ。	密	やや不良	淡黄（2.5Y8／4）	口縁～胴部1／10存	○口縁部外面スス付着。	011-03
147	古式土師器 甕	包含層	口径: (17.0)	○口縁部は一旦ほぼ水平に開いた後端部がつまみ上げられる格好。 ○口縁部ヨコナデ、体部内面指オサエ。	やや密	やや不良	浅黄橙（10YR8／4）	口縁～胴部1／4存	○全体的に磨滅進む。	002-04
148	土師器 杯	包含層	口径: (12.2) 高: (4.0)	○口縁部ヨコナデ、底部外面指オサエ後ナデ、内面ナデ。	やや密	やや良	浅黄橙（10YR8／4）	1／2存	○体部外面に粘土接合痕・黒変部分。	003-06
149	土師器 杯	包含層	口径: (11.9) 高: (3.7)	○口縁部ヨコナデ、底部外面指オサエ後ナデ、内面ナデ。	やや密	やや良	灰白（2.5Y8／2）	1／4存	○体部外面に粘土接合痕。 ○底部外面焼成不良。	007-01
150	土師器 杯	包含層	口径: (12.0) 高: (2.5)	○口縁部ヨコナデ、底部外面指オサエ後ナデ、内面ナデ。	やや密	不良	橙（5YR7／8）	1／8存	○全体的に磨滅激しく、調整不明瞭。	012-02
151	土師器 杯	包含層	口径: (15.0) 高: (3.2)	○口縁部ヨコナデ、底部までナデか。	やや粗	不良	橙（5YR7／8）	1／8存	○全体的に磨滅激しく、調整不明瞭。	012-01
152	土師器 甕	包含層	口径: (16.7)	○体部～口縁部は「く」の字状に屈曲して開く。口縁端部は垂直に立ち上がる。 ○口縁部ヨコナデ、頸部外面ハケメ後ナデ、体部ハケメ	やや密	良	外：灰白（2.5Y8／2） 内：淡黄（2.5Y8／3）	口縁～体部1／5存		006-02
153	土師器 甕	包含層	口径: (15.5)	○体部～口縁部は「く」の字状に屈曲して開く。 ○口縁部ヨコナデ、体部ハケメ。	密	良	にぶい黄橙（10YR7／3）	口縁～体部1／5存	○内面に部分的にスス付着。	007-06
154	土師器 甕	包含層	口径: (16.0)	○体部～口縁部は「く」の字状に屈曲して開く。 ○口縁部ヨコナデ、体部ハケメ。	密	良	にぶい黄橙（10YR7／3）	口縁～体部1／5存	○外面に広くスス付着。	007-02
155	土師器 甕	包含層	口径: (16.3)	○体部～口縁部は「く」の字状に屈曲して開く。 ○口縁部ハケメ後ナデ、体部外面ハケメ、内面ナデ。	やや密	やや良	外：淡橙（5YR8／4） 内：浅黄橙（10YR8／3）	口縁～体部1／5存	○肩部外面にスス付着。	006-04
156	土師器 甕	包含層	口径: (20.3)	○体部～口縁部は、ゆるやかに屈曲。 ○口縁端部ヨコナデ、頸部外面ハケメ後ヨコナデ、体部ハケメ。	密	やや良	灰白（10YR8／2）	口縁～体部1／8存	○口縁部外面に粘土接合痕あり。	012-03
157	土師器 甕	包含層	口径: (21.6)	○口縁端部は内側へ屈曲。 ○口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケメか。	やや密	やや良	外：灰黄褐（10YR4／2） 内：浅黄橙（10YR8／3）	口縁～体部1／8存	○外面に広くスス付着。	006-01
158	須恵器 杯	包含層	口径: (13.0) 高: (3.1)	○口縁部ロクロナデ。 ○底部内面乱ナデ、外面ヘラ切り後ケズリか。	やや粗	良	暗青灰（5B4／1）	1／2存 但し、口縁部は1／4存		004-02
159	須恵器 杯	I 20区 pit 1内	口径: (14.8) 高台径: (10.2) 高: (4.7)	○口縁部ロクロナデ。 ○底部内面乱ナデ、外面ヘラ切り後ケズリ、高台貼付後ナデ。	密	良	外：灰（10Y6／1） 内：灰白（7.5Y7／1）	3／4存	○底部が高台より下垂しているため不安定。	002-01
160	土馬	包含層	径: (7.0) 厚: (3.3)	○目・鼻・口・轡・頬革は、棒状工具による刺突・線刻。耳・たてがみは粘土はりつけ・つまみだし。	密	良	にぶい橙（7.5YR7／4） ～橙（2.5YR6／6）	頭部から頸部ほぼ完形		017-01

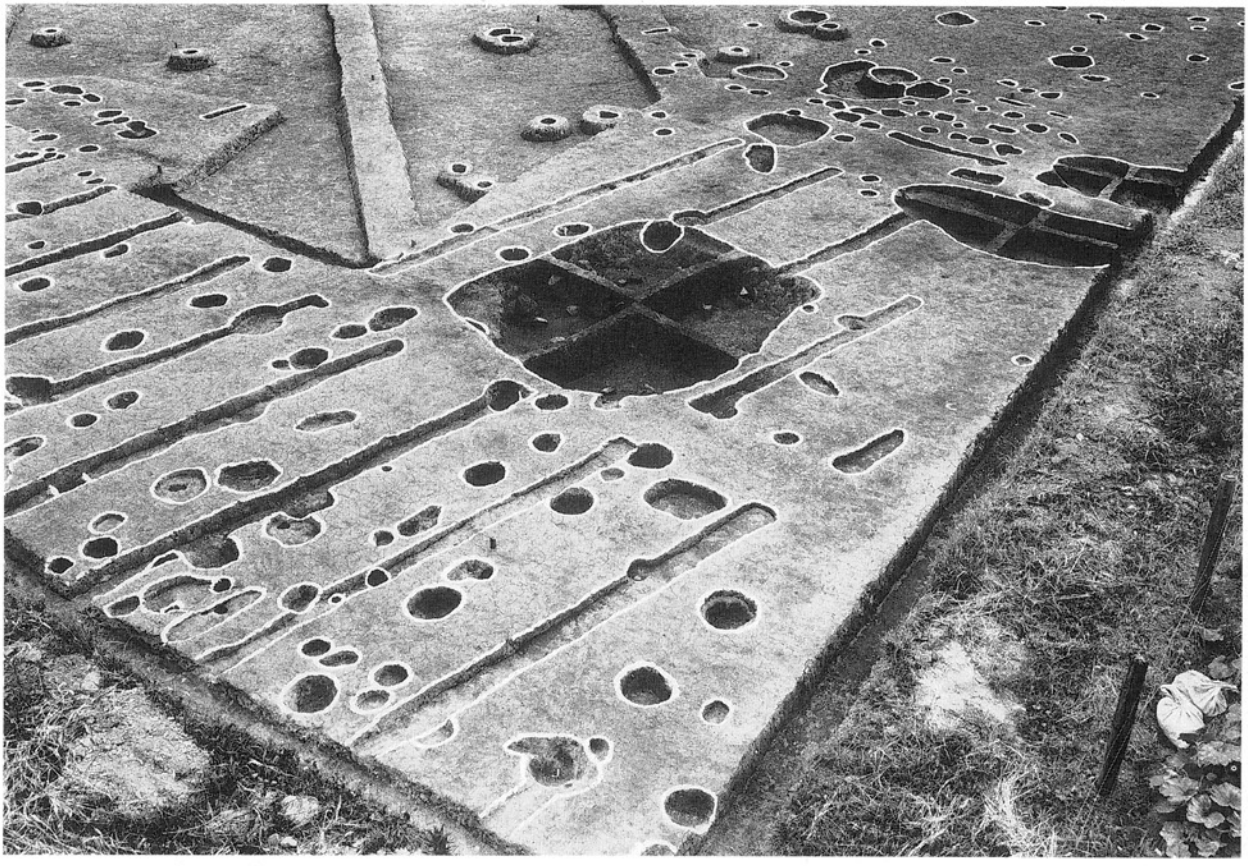
A・B地区全景



Ｃ地区全景

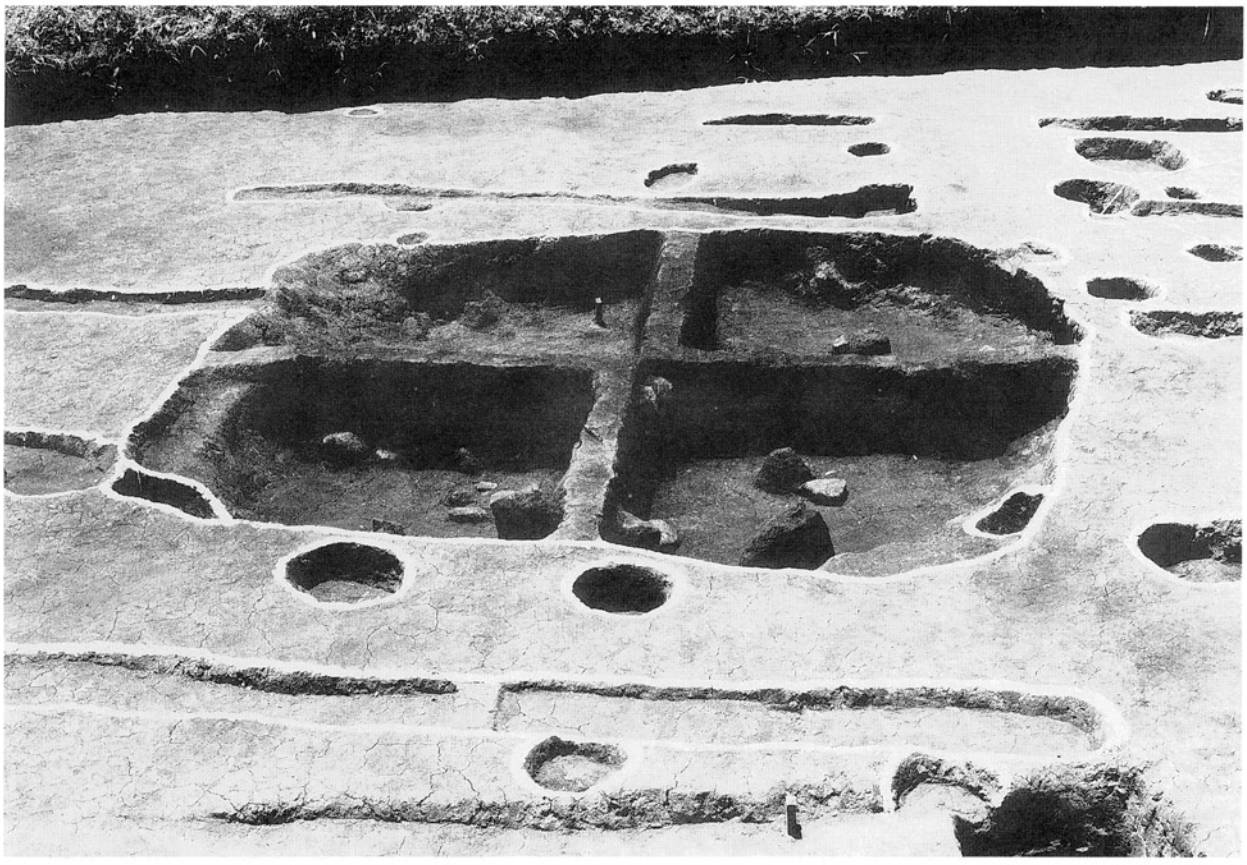


Ａ地区（南から）



SB1、SH4（西から）

SD6・SB7・SB8（北東から）



SH4（東から）

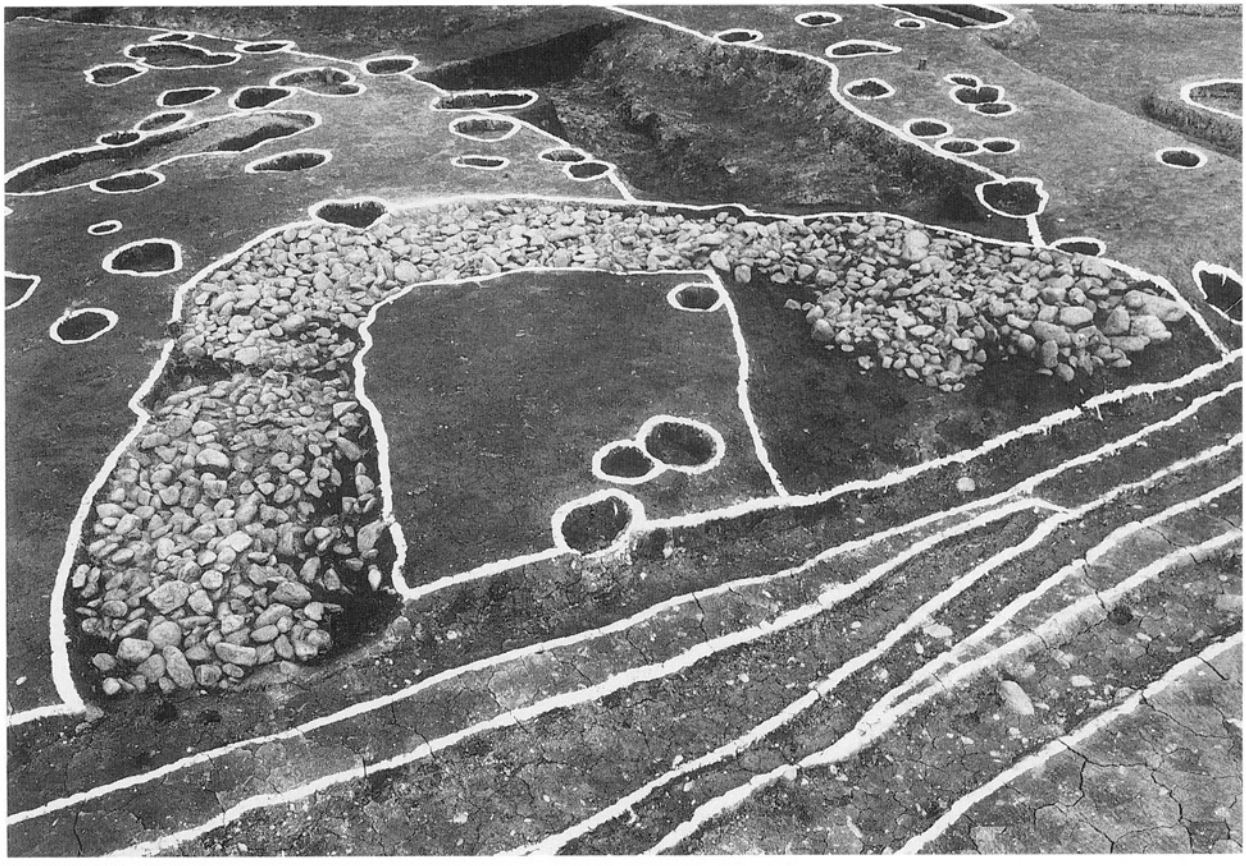
SB8（南西から）

SK11（西から）

SB12・SB13（北東から）

ＳＤ14（北西から）

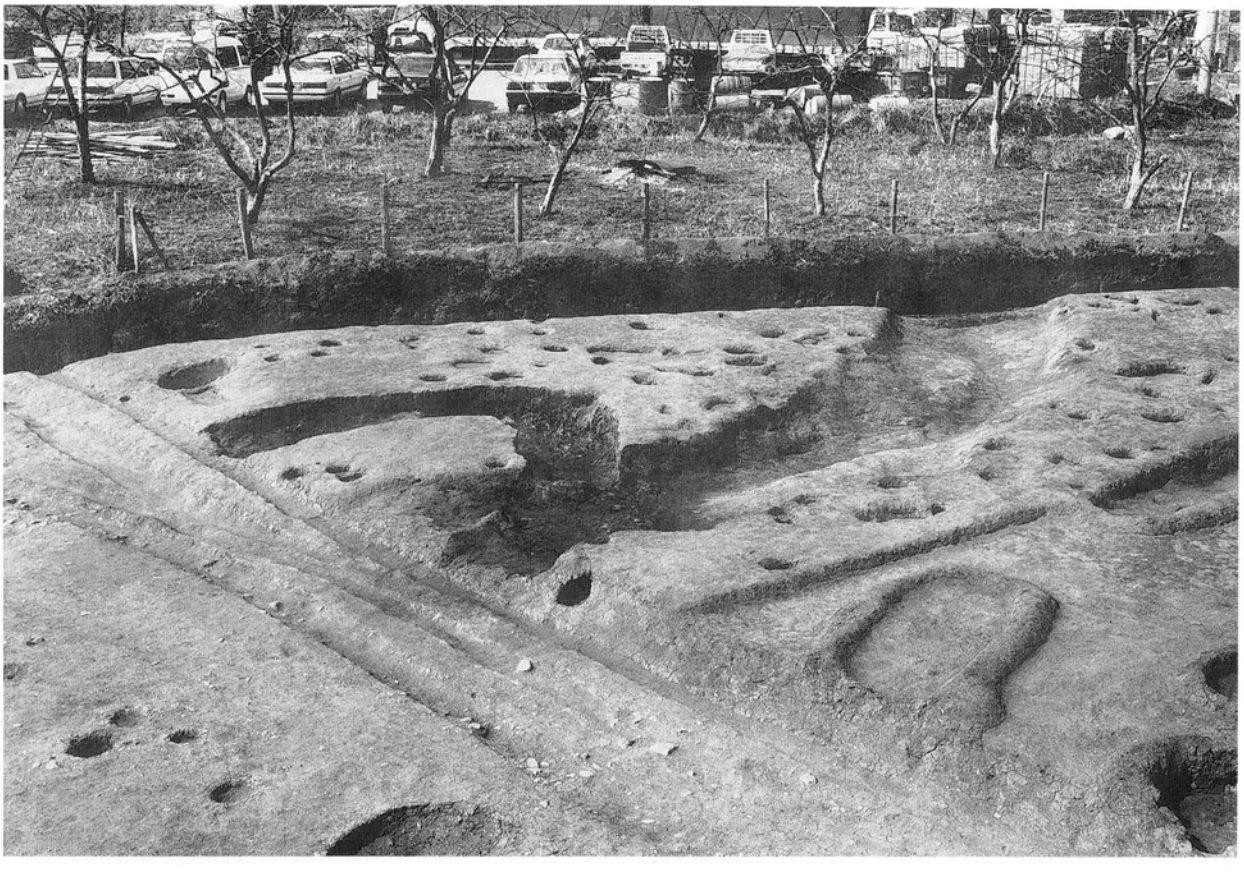
ＳＫ15（北西から）



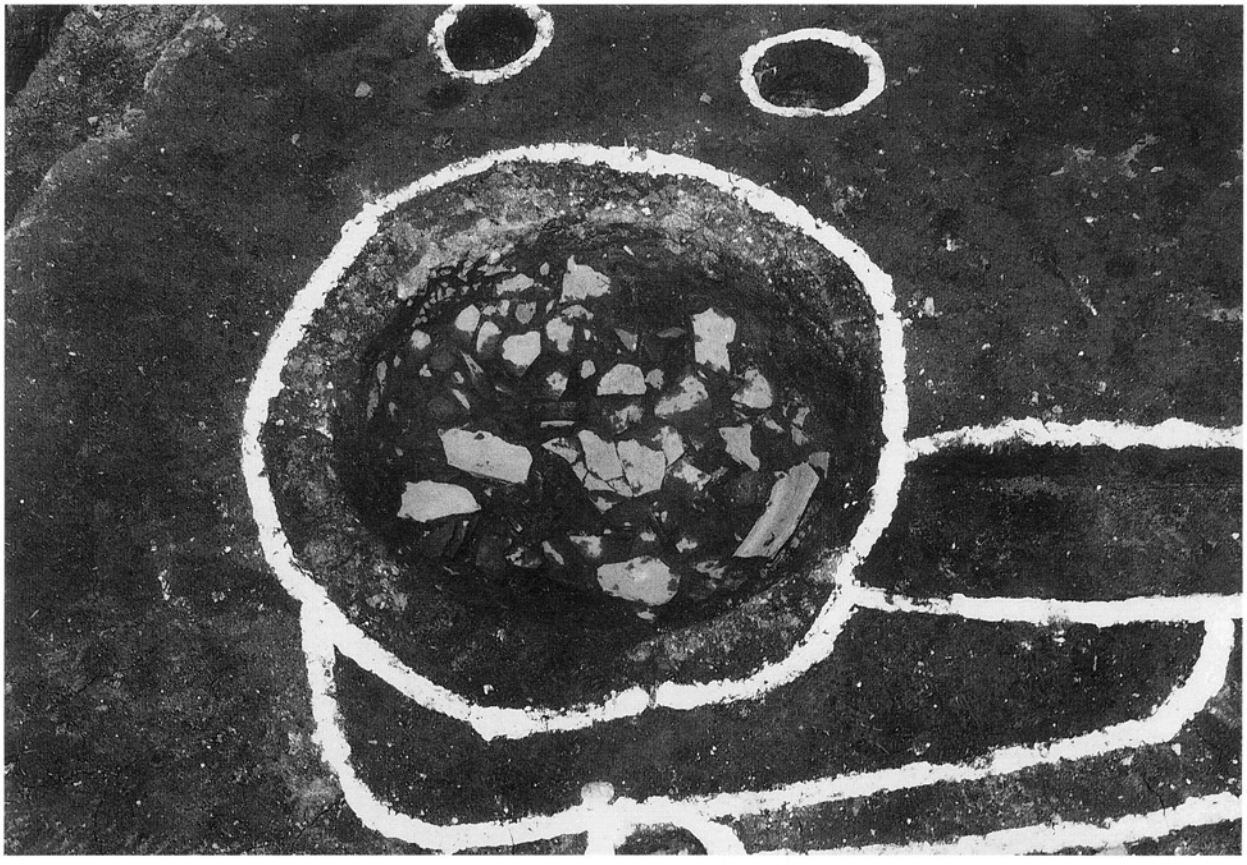
SZ17（南東から）

SZ17（東から）

ＳＺ17（東から）

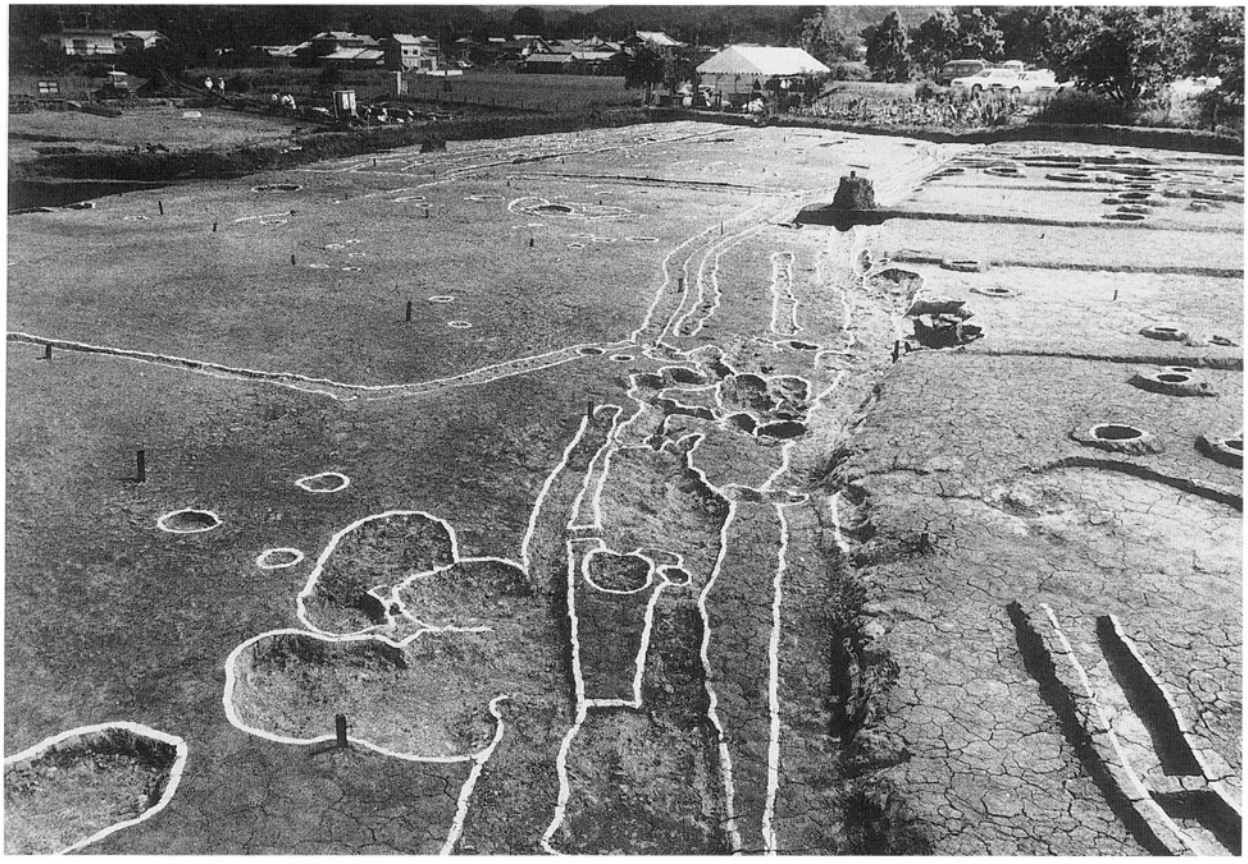


ＳＤ14とＳＺ17（東から）

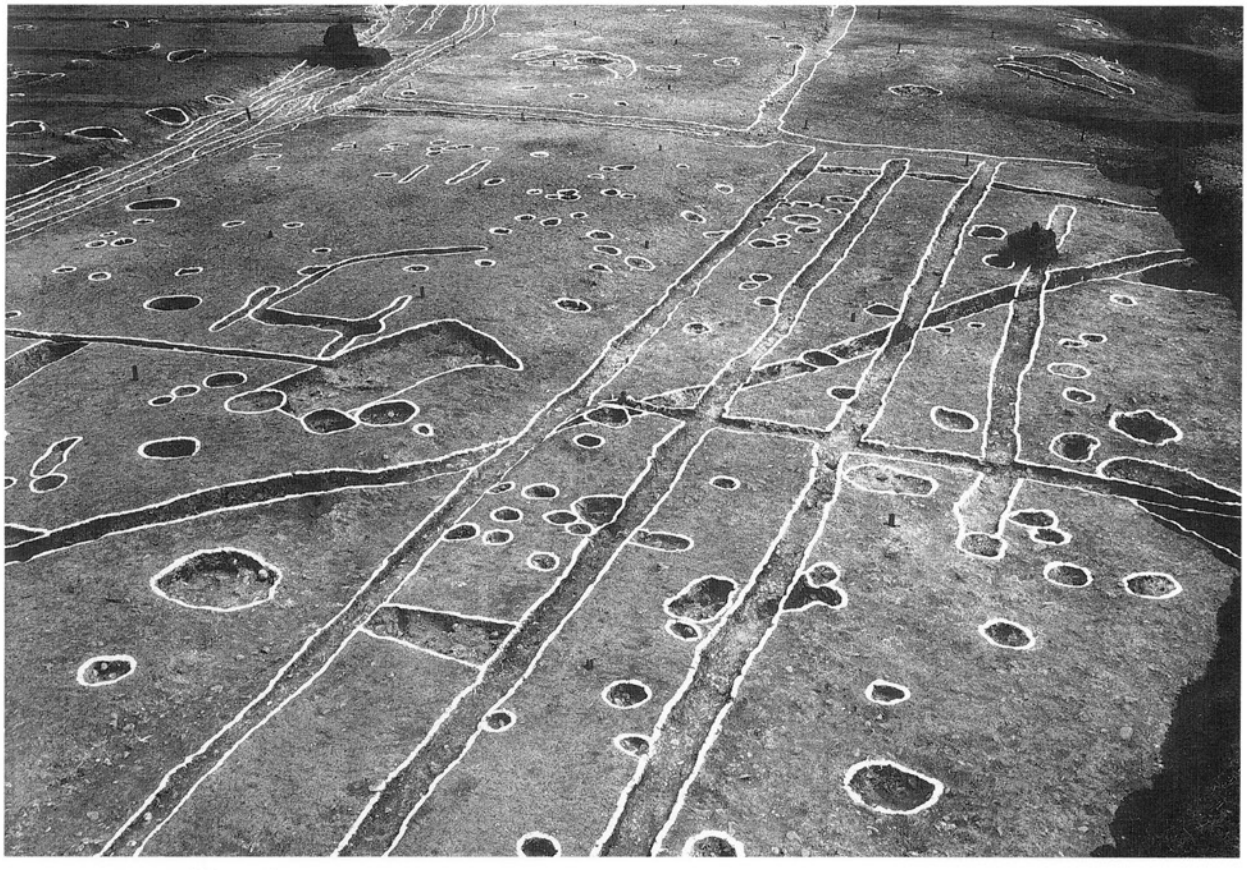


SK18検出状況（南東から）

SK18　大甕底部（北東から）



SD19・SD20・SD21（北から）



SB27・SD31（南から）

SB24（東から）

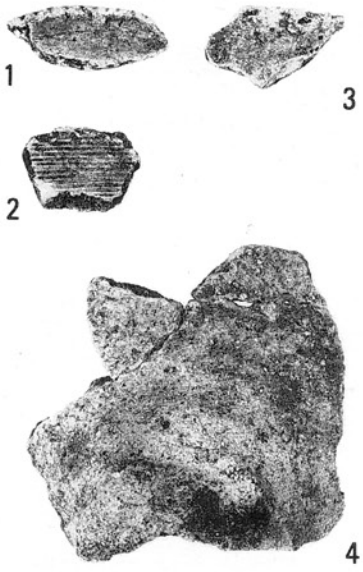
SB27（北から）

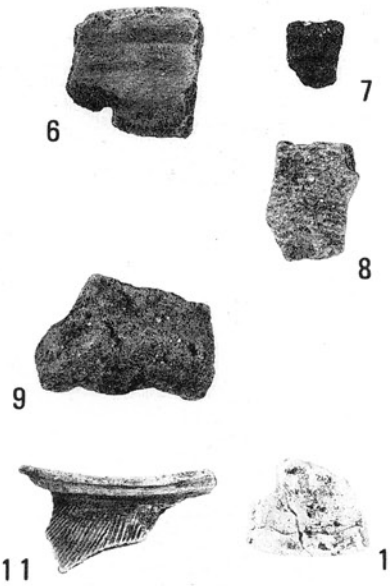
SE34（北から）

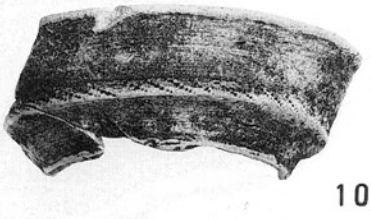
SB35（西から）

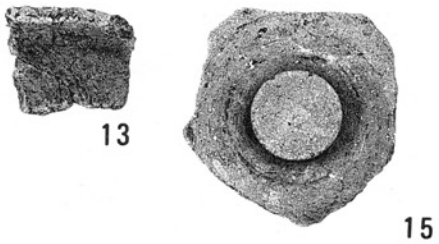
SH36（北から）

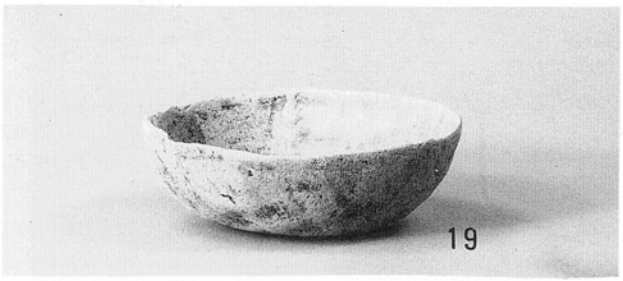
SD38（東から）

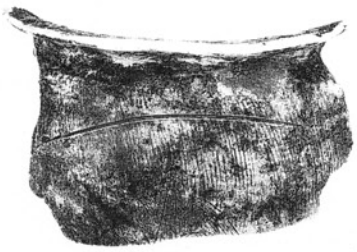




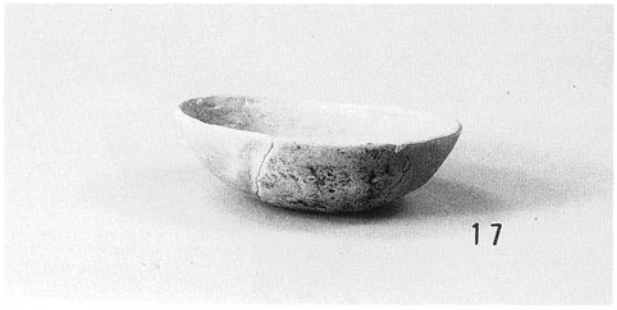




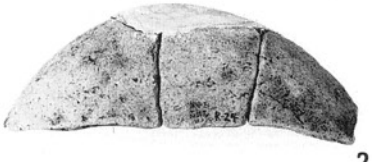


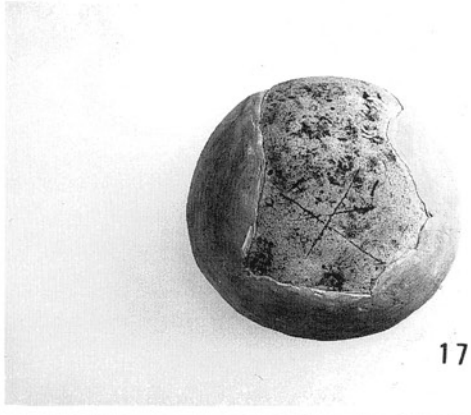


出土遺物（1）

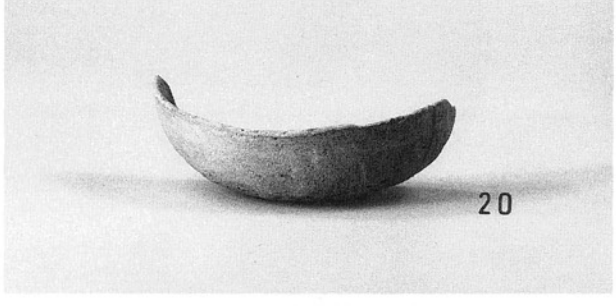

17

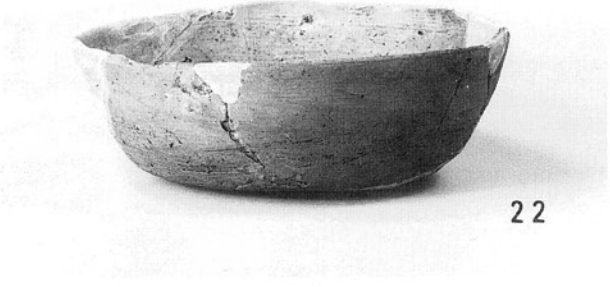
21


24

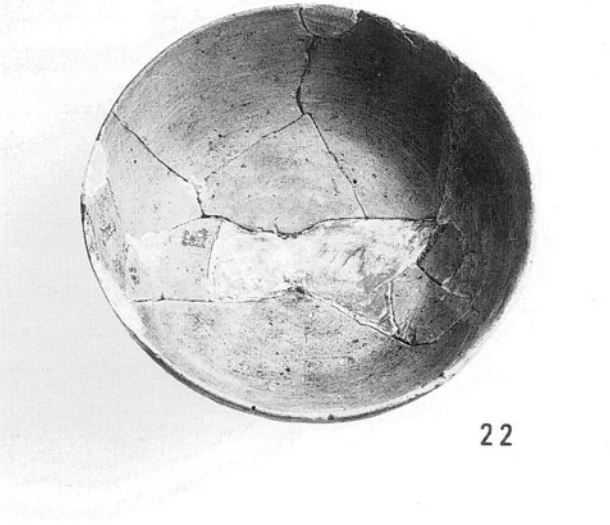

17

29


20

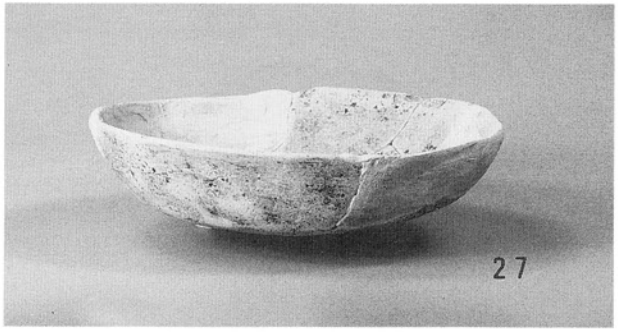

22

23

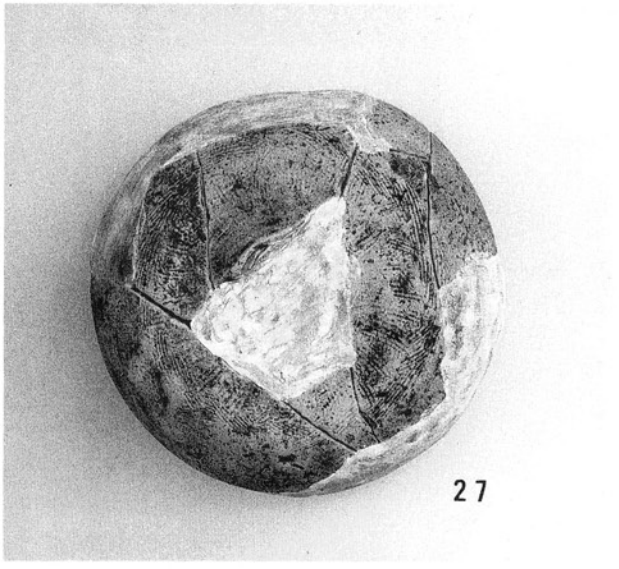

22

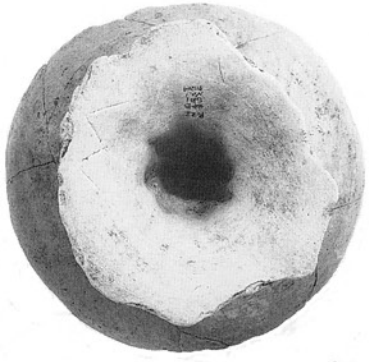
25

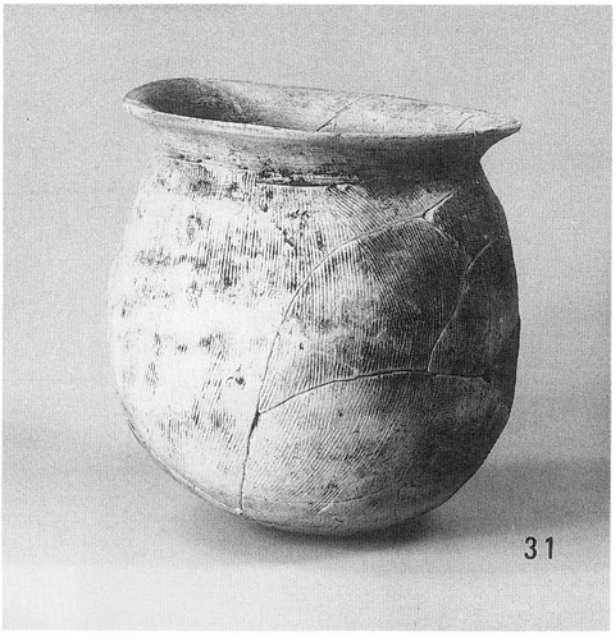
出土遺物（2）


27

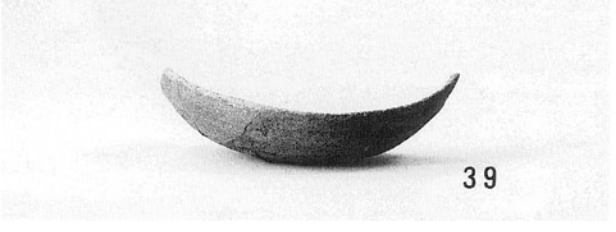
28

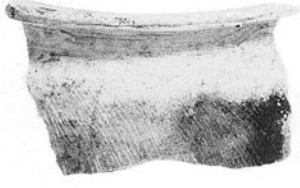

27


28


31

30

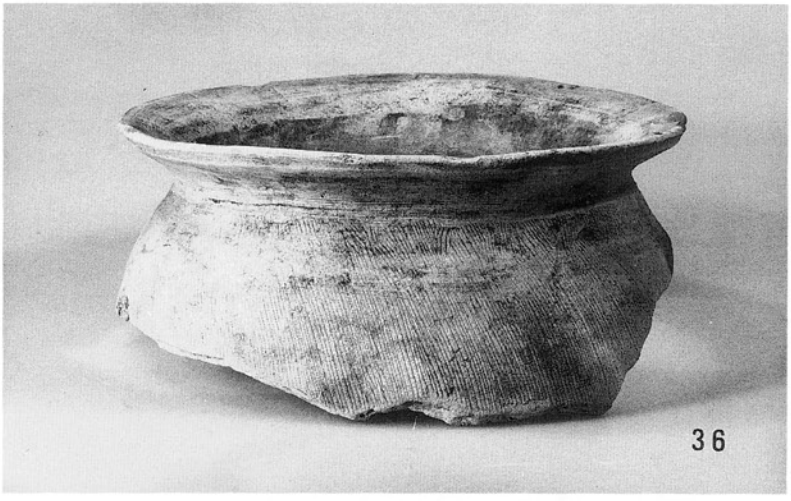

39


32

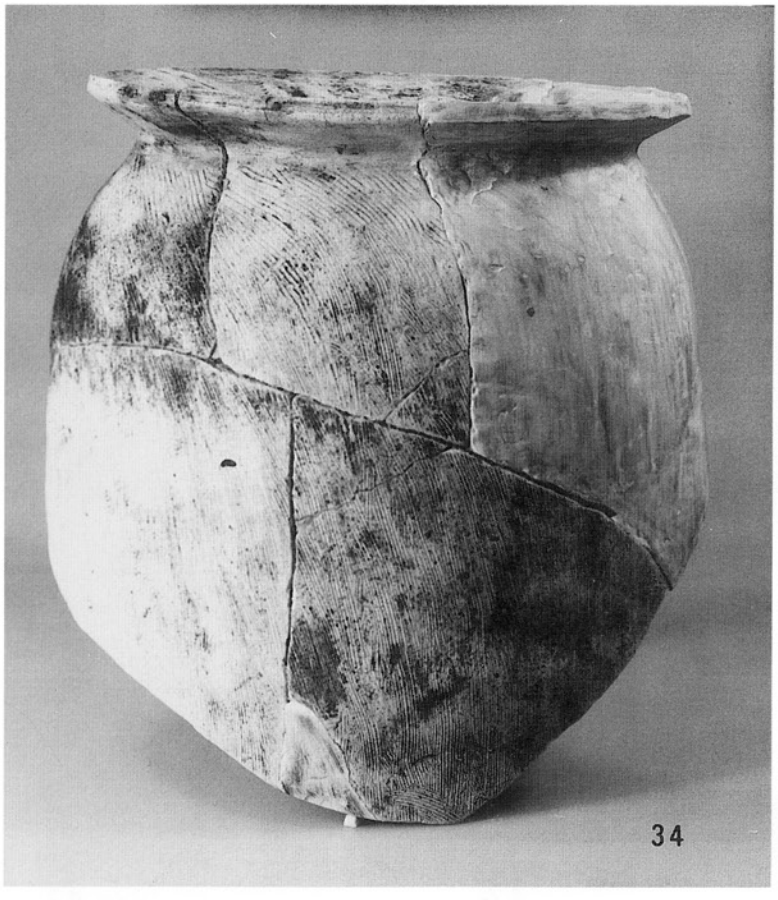
出土遺物（3）

33

35


36

37


34

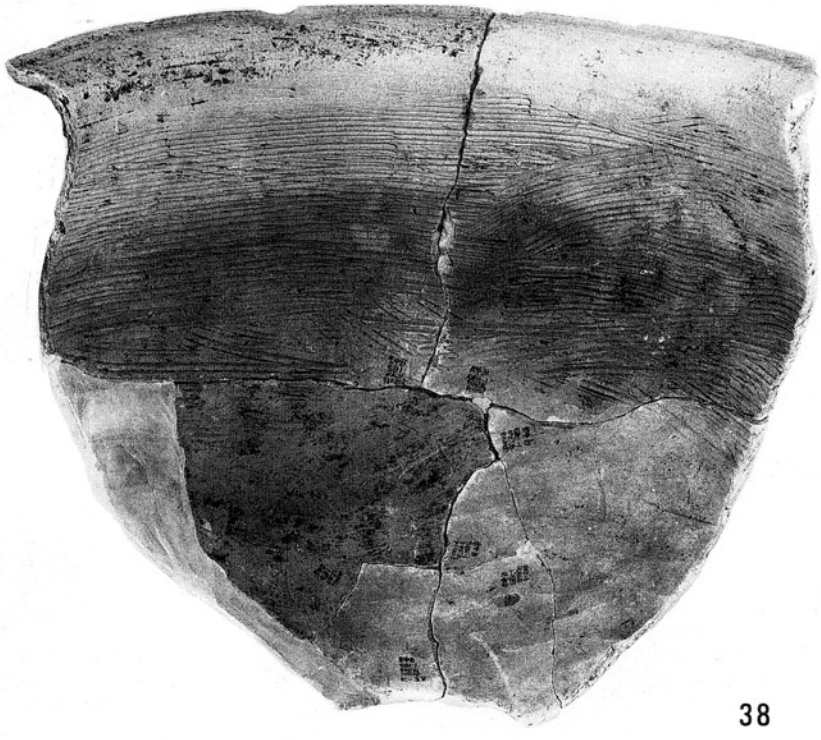
40

44

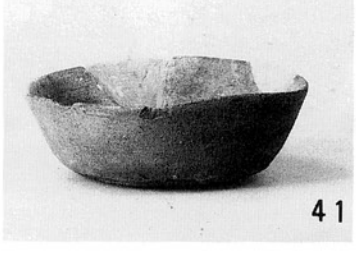
45 46

出土遺物（4）

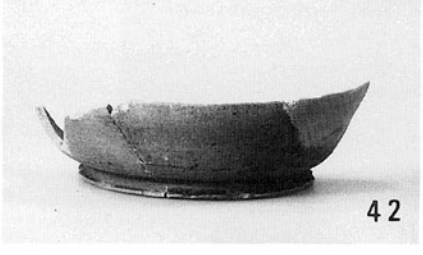
38



38



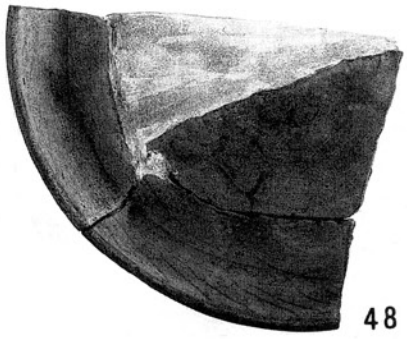
41

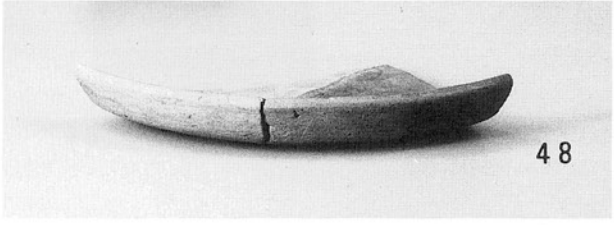


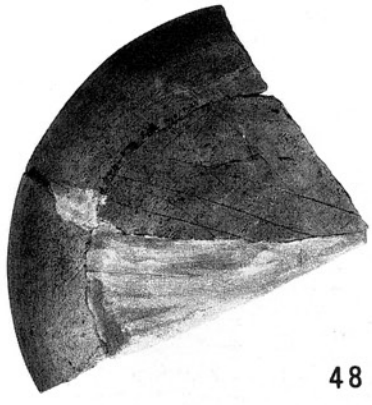
42

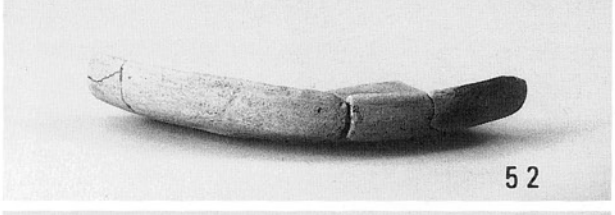
43

出土遺物（5）

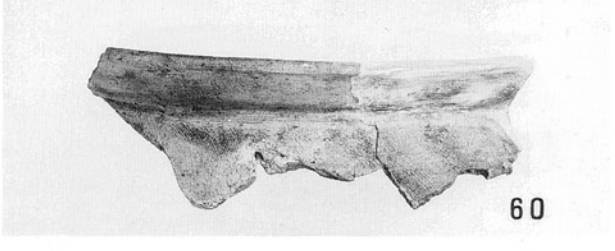

48

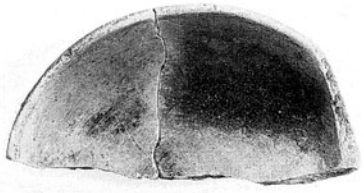

48

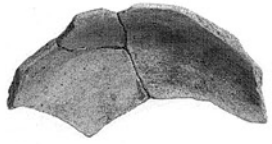

48

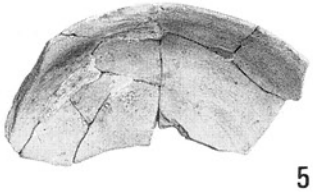

52

53

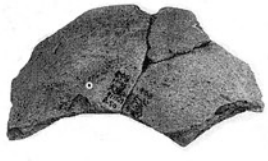

60


49

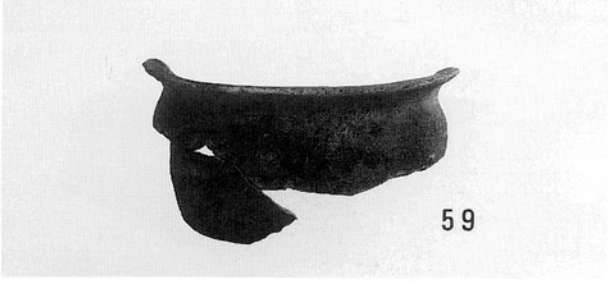

50


51

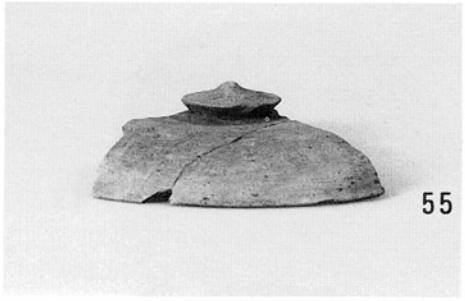
49


50

51


59

出土遺物（6）


55

55

65

54

64

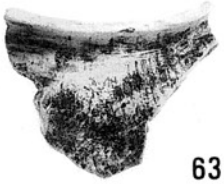
54

61

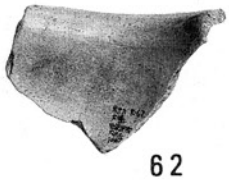
61

出土遺物（7）

62



63



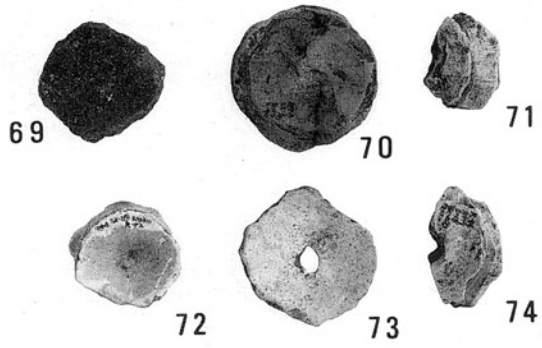
62

63

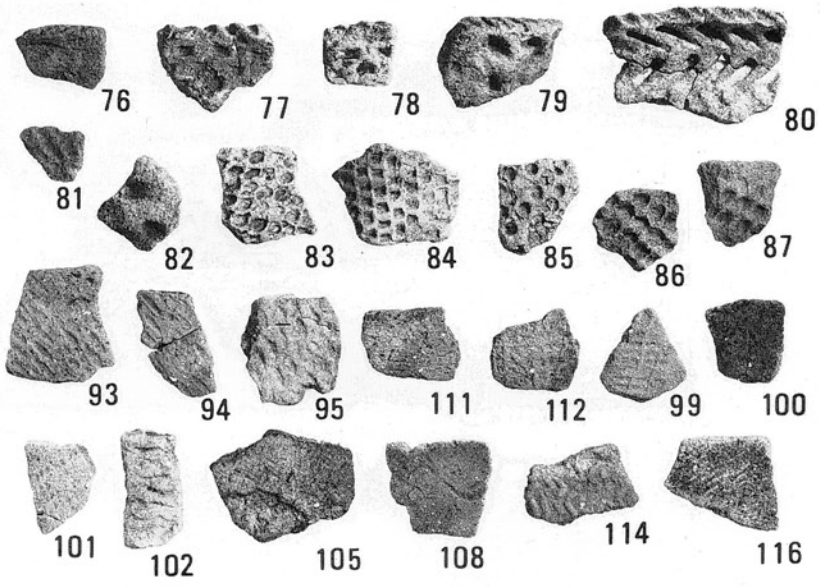
75

75

出土遺物（8）

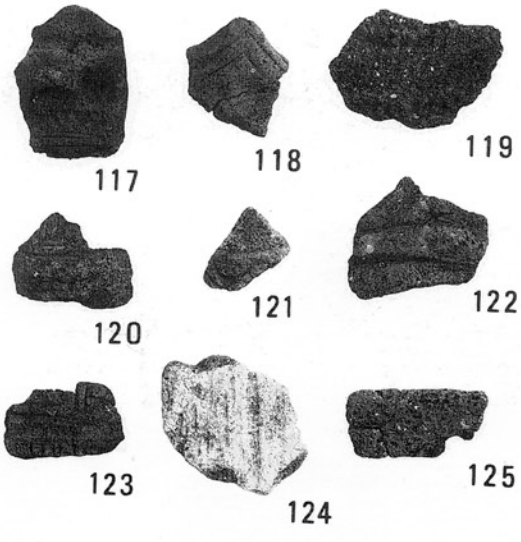

69
70
71
72
73
74

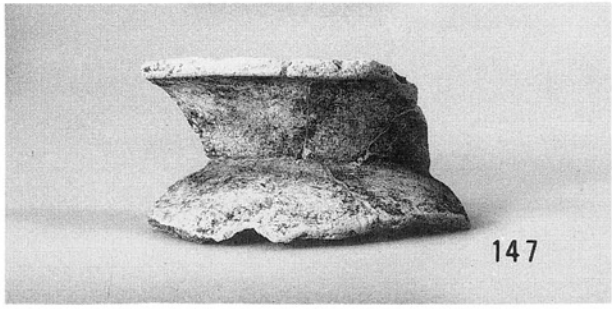
66


76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
93
94
95
111
112
99
100
101
102
105
108
114
116

148

149

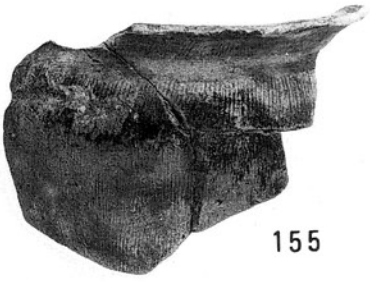

117
118
119
120
121
122
123
124
125


147

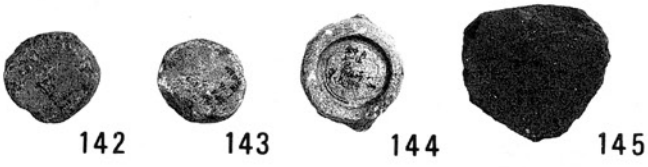
159

出土遺物（9）

133 134 135 136 137


155

138 139 140 141

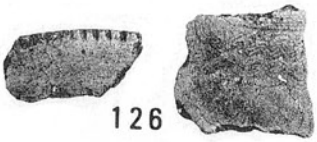

142 143 144 145

158

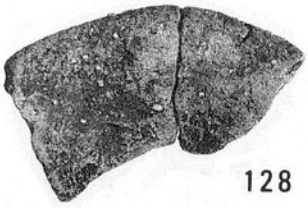
160

160

160

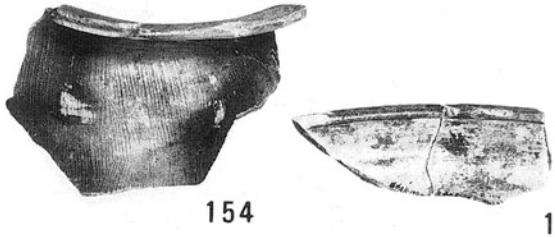

126 127

150 151


128

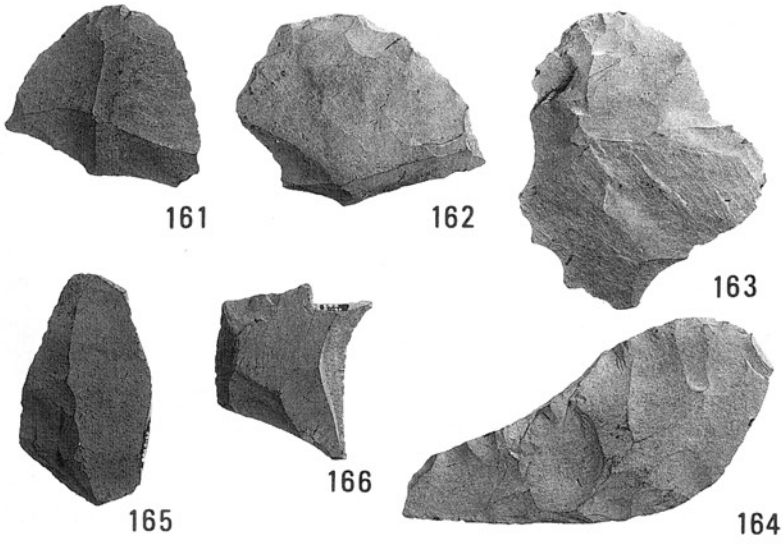
152 153

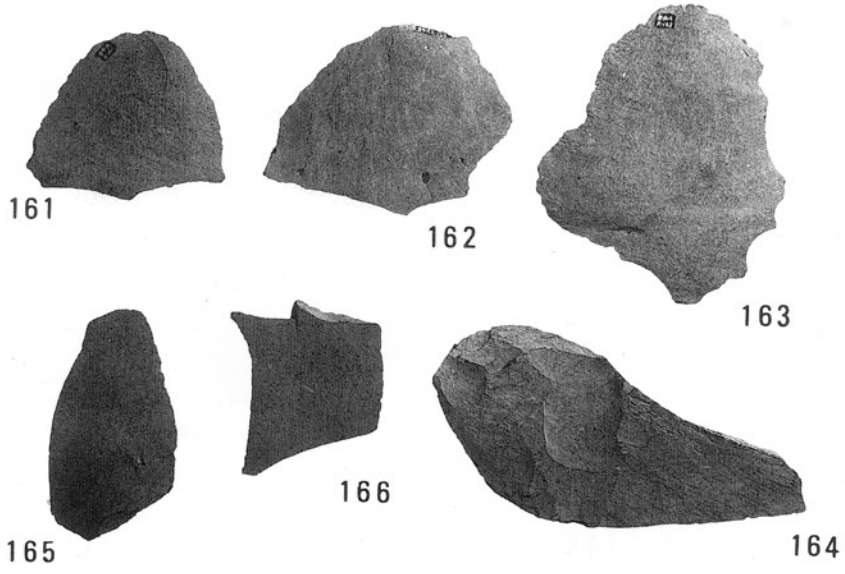
129 130


154 157

146

出土遺物（10）





出土遺物（11）

Ⅳ. 朱　中　古　墳

1．位置と周辺の古墳

櫛田川が松阪市と多気町の境界として流れる地域の左岸には、頂上の標高が150～250mほどの丘陵地が川と並行して横たわる。その最東端部、標高62mほどで水田との比高が約40mの丘陵頂部が調査対象地であった。この丘陵頂部からは、東方向に、櫛田川の流れ、そしてその両岸に広がる水田地帯が広く見渡せる。

周囲にはいくつかの古墳が知られており、櫛田川に面した丘陵地は、流れの両岸とも古墳造営地帯となっている。

本墳の北東方向、櫛田川の左岸段丘面上の水田地を隔てて張り出す丘陵には、横穴式石室が露呈する弁天窟古墳、長谷古墳が所在し、また、馬蹄形の尾根に連続して７基（推定墳１基）の古墳を営む中万大谷古墳群や、低い独立丘陵上に形成された尾だけ古墳群なども知られる。

さらに北方の丘陵地東縁部にも、山添、西谷、天王山の各古墳群が並ぶ。このうち、天王山古墳群所在地では埴輪や須恵器が採取されており、その中には５世紀代のものとされる須恵器もある。この天王山から西方向への、まさしく伊勢平野と接する丘陵部の最北端縁辺部には、高田２号墳、坊山１号墳、久保古墳などの４世紀代にまで遡る古墳が造営されている。

一方、本墳の南、櫛田川を挟んだ多気町側の丘陵には、黒田山古墳群、石山古墳群、石塚谷古墳、大日山古墳群、明気古墳群、立岡山古墳群などの木棺直葬の古墳群が形成されている。さらに玉城丘陵の西端にあたる丘陵部には、河田古墳群などの群集墳の所在をみる。

しかしながら、古墳の存在が顕著なのは、現在の国道42号線より東側（櫛田川の下流域）である。西側（上流域）では、現在では、３kmほどのぼった左岸に横穴式石室をもつ庄古墳が見られるくらいである。右岸の多気町大字四疋田地内にも、狐谷、三昧山、茶臼山、西杉内などに古墳が存在したとのこと（村林仁八「吾が郷土」1932）であるが、現在その所在は確認できない。

2．調　査　結　果

1．はじめに

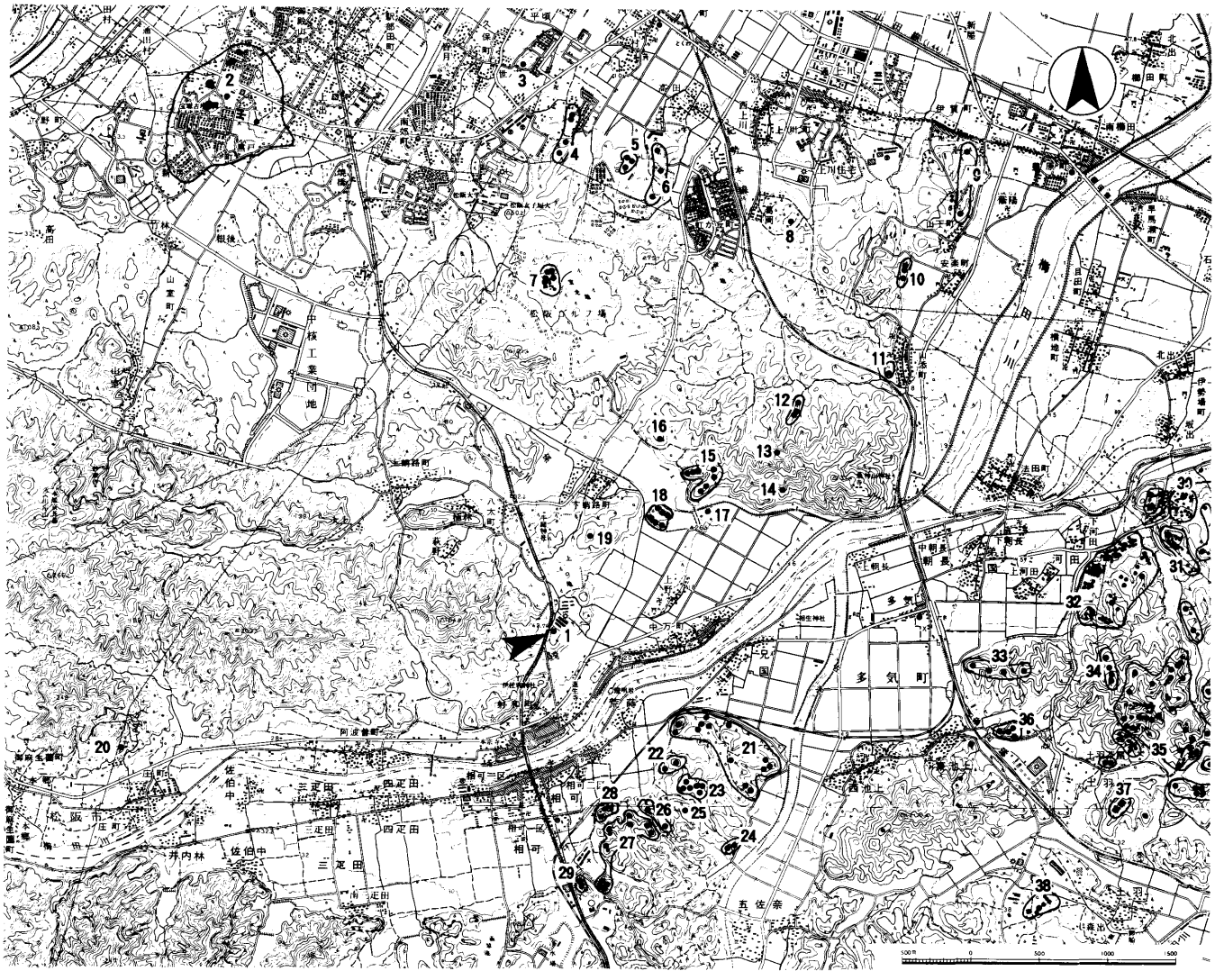
南東方向に櫛田川を見下ろす丘陵頂部に、円形の高まりが見られた。それは、それほど高くもなく、また、はっきりと基底線がみられるわけでもなく、自然地形という感が強かった。しかし、裾部にあたる所で埴輪細片が表採されたため、古墳を想定して発掘調査することとなった。

この高まりから北東方向に10mほど離れて、南斜面が加工されたような感じをもたせるわずかな高まりがみられ、さらにその北側にもわずかに盛り上がったような地形がみられた。

ところで、昭和45年に記入された「埋蔵文化財包蔵地調査カード」（遺跡台帳）には、秋葉山古墳群という名称で１～３号墳の記載がある。付記されている略地図を見ると、その１～３号墳は、まさしく前述の丘陵の前述の３ヵ所の高まりにあたるものと読み取れる。しかし実際は、秋葉山という丘陵は谷を隔てた南側の丘陵の呼称であり、従って、遺跡台帳の秋葉山古墳群という名称は不適切であり、その名称を廃し、今回、朱中古墳群１～３号墳として調査をした。

2．古墳群調査の概要

１号墳には、幅1.5mのトレンチを東西南北に十字



	遺跡名	様相
1	朱中古墳	
2	宝塚古墳群	1号＝前方後円・全長95m、円筒埴輪、5C前 2号＝帆立貝式か？元々は、推定墳も含めて88基もの古墳があったとされる。
3	久保古墳	円墳。径52.5m、高5m。4C後半代か？
4	権現山古墳群	円墳4基。内2基は消滅。
5	坊山古墳群	円墳3基。1号＝径35m、高5m。神獣鏡・円筒埴輪片、4C末、南斜面に円筒埴輪棺。
6	高田古墳群	円墳3基。2号＝径27m。内行花文鏡・石釧、円筒埴輪棺。4C末。1号＝径33m、3号＝径25m。
7	西野々広古墳群	全長28mの前方後円墳1、径18mの円墳1、径10m前後の円墳10基。全て木棺直葬墳か？
8	浅梶木古墳群	推定円墳、径9.5m
9	天王山古墳群	円墳10基。須恵器・円筒埴輪・人物埴輪片。須恵器から推し量るに、5C後半から7C後半に至るまで古墳が造られた様相。
10	西谷古墳群	円墳3基、径9から10m。
11	山添古墳群	円墳。
12	やつで古墳群	円墳3基、3号墳は竪穴式石室。

	遺跡名	様相
13	長谷古墳	径15mの円墳。横穴式石室、片袖、南に開口。
14	弁天窟古墳	横穴式石室、全長8.4m、南に開口。
15	中万大谷古墳群	円墳7基。3号墳は竪穴式石室。
16	片田古墳	痕跡墳、須恵器片、埴輪片。
17	射原垣内古墳	径18mの円墳。盗掘。
18	尾だけ古墳群	7基の古墳。円墳が主。5号墳から須恵器。
19	岡山古墳	径11mの円墳。
20	庄古墳	径16mの円墳。横穴式石窟、玄窟長7m、南に開口、須恵器、6C後半。
21	黒田山古墳群	15基の古墳（但し、9基は推定）、開墾削平あり。
22	宮ノ谷古墳群	円墳2基。2号は中世墓かも。
23	石山古墳群	円墳6基。半壊墳2基推定墳2基。
24	倉懸古墳群	円墳2基。1号盗掘。2号木棺2基。須恵器、鉄刀。6C後半。
25	石塚谷古墳	直径30m。木棺3基。銀象眼大刀・馬具・須恵器6C後半。
26	大日山古墳群	4基の古墳。但し1・3・4号は発見時マウンドなし。2号は主体部なし。7C前半。

	遺跡名	様相
27	明気古墳群	12基の古墳。円墳8、方墳4基。木棺直葬。須恵器、馬具、玉類、12号に炭化棺材。5C後半～7C前半。
28	立岡山古墳群	1～4・6号。円墳。6号＝径16m、木棺直葬、須恵器、6C前半。
29	中尾古墳群	円墳2基。
30	神前山古墳群	23基の古墳。1号＝帆立貝式、全長38m。画文帯神獣鏡。埴輪、5C後半。
31	大塚古墳群	22基の古墳。1号＝帆立貝式、全長52.5m、埴輪。
32	河田古墳群	100基の古墳。ほとんどが木棺直葬だが横穴式石室もあり。6C後半以降の群集墳。
33	飯倉古墳群	円墳4基。
34	八つ田古墳群	4基の古墳。1号横穴式石室。
35	上村滝古墳群	81基の古墳。横穴式石室16、竪穴式石室1基
36	女山古墳群	4基の古墳。4号＝方墳、棺跡2基、須恵器、土師器、7C後半
37	権現山古墳群	方墳2基。2号＝39×46m、滑石製小壺・円筒埴輪（朝顔含む）。5C前半。
38	森出古墳群	7基の古墳。7号＝方墳、木棺跡、須恵器、7C後半。

第29図　朱中古墳と周辺の古墳（1：50,000）

にいれた。表土(腐葉土)の下は風化した岩の混じる濁りのない黄褐色の土で、表土から30cmの深さで岩盤となる。西斜面で溝状の遺構(SZ1)が見られたのでその部分のトレンチを面的に広げ、また、念のために北東と南東方向にもトレンチをいれた。

２号墳には、ほぼ南北のトレンチと、１号墳につながる南西方向のトレンチをいれた。やはり、表土の下はすぐに地山の様相であった。しかし、高まりの頂部に遺構らしきものが検出されたので、面的に広げてみたところ、ＳＺ２が検出された。

３号墳にも十字のトレンチをいれたが、表土の下はすぐ地山であった。

これらの他に、１号墳の南東方向にややテラス状の地形が見られたので、念のためトレンチを入れてみたところ、地山をカギ状に整形した痕跡が検出された（ＳＺ３）。

以上のように、主体部や周溝など、古墳の一部分であると断定できる遺構は検出されなかった。しかし、円筒埴輪片や須恵器片の出土などから、頂部の高まり（１号墳）に関しては、古墳が造営されていたとしてもいいのではないかと判断し、それを「朱中古墳」として報告する。

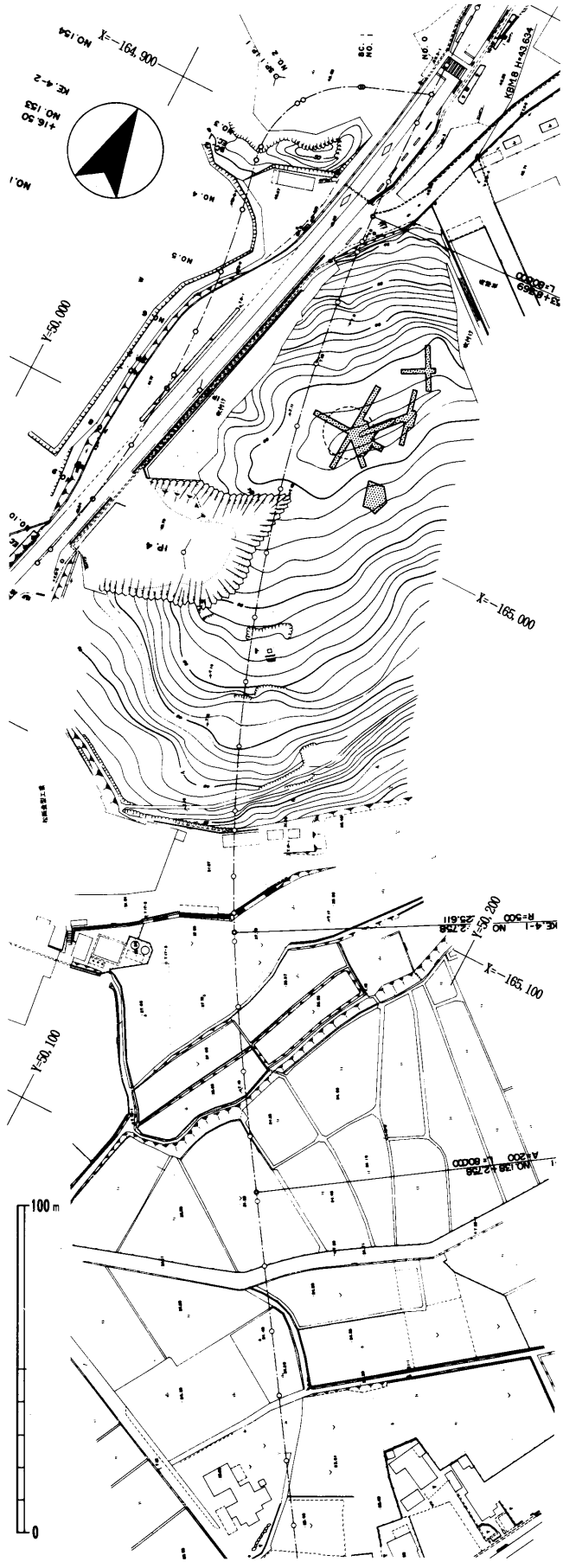
２号墳、３号墳とした高まりについては、古墳であったという痕跡を何も見つけられなかったので、自然地形と判断した。

３．朱中古墳

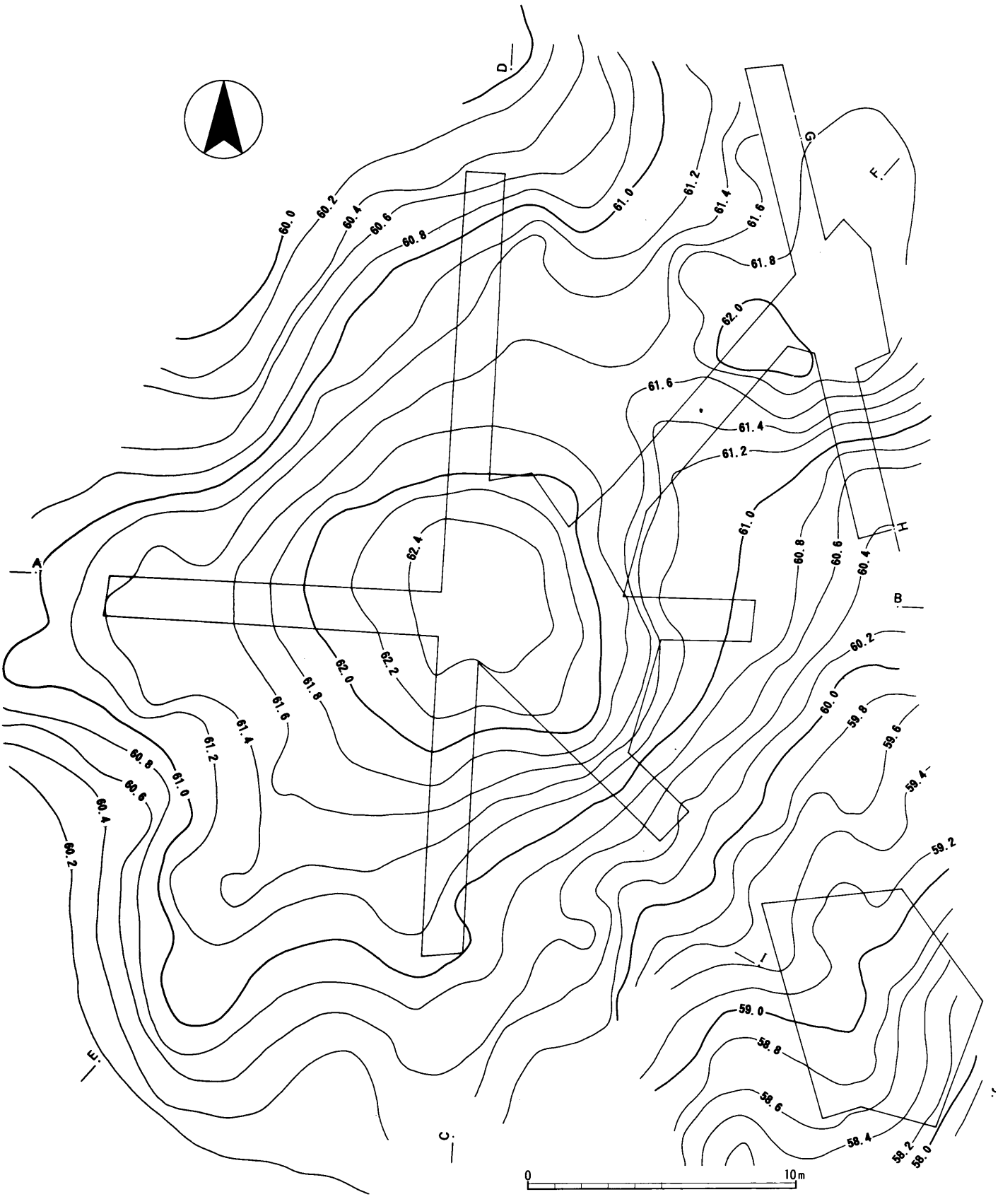
１）墳丘と埋葬施設

地形測量図における標高61.6mの等高線のあたりを基底線とする、径16m前後の円墳と考える。現況では表土（腐葉土）の下はすぐに地山である。地山に痕跡が残るまで掘り込まれた主体部や周溝はつくられなかったようで、それらは検出されなかった。ただ、中心より東に片寄ったところで、北西－南東方向に細長くＳＺ１が検出されたが、曖昧で規格性のない平面形や、微量の須恵器細片が埋土に紛れ込んだように出土するという状況などから、古墳に伴う遺構ではないと判断した。

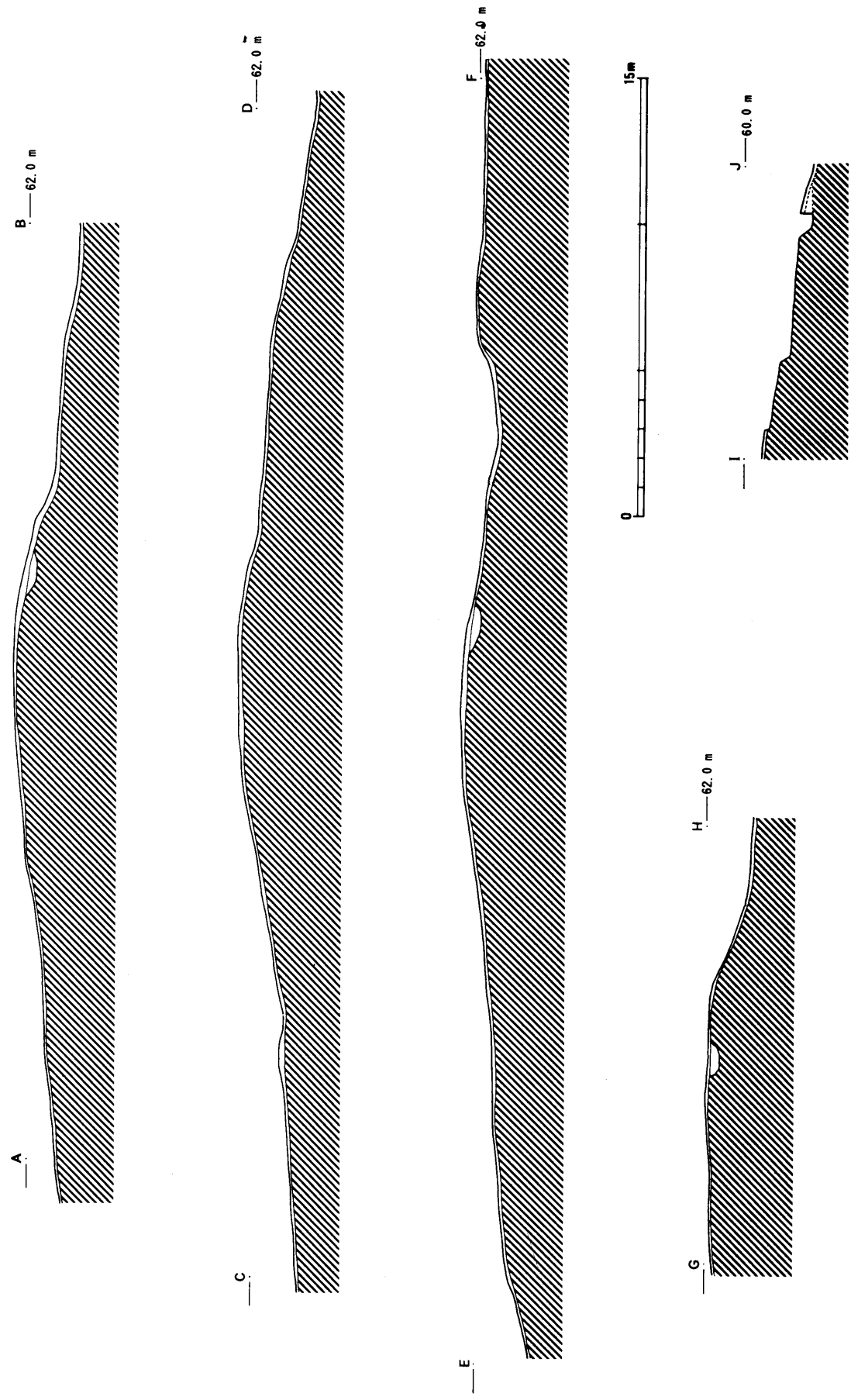
北方向に設定したトレンチの墳丘裾付近で、須恵器甕片が、やや集中して出土した。



第30図　遺跡地形図（1：2,000）



第31図　調査区地形測量図（1：200）



第32図　調査区地形断面図（1：200）

2）遺　物

地表面の腐葉土内、もしくはその直下から、須恵器細片と埴輪細片が出土した。

また、表土直下からは、山茶椀片と常滑甕片の２点の中世土器片も出土した。

○須恵器

破片ばかりである。表採、もしくは腐葉土直下からの出土が多く、樽型瓶片(4)のみが溝状遺構ＳＺ１の埋土からの出土である。

広口壺（甕？）（１～３）　　１と２は口縁端部、３は頸部であろうか？　口縁端部はやや肥厚し丸くおさまり、その直下には断面三角形の稜が巡る。ただしその稜は、表面の劣化のため端部がややつぶれた状態となっている。２・３には外面に波状文が施されている。

樽型瓶（４）　　口頸部の取り付け部分と、側面の破片が見つかっている。出土地点が近いこと、胎土・色の類似性などから、同一個体として図示した。口頸は、体部からすぐに外方向に開き、「く」字形に取り付く。断面の観察では、口頸部と体部で色調が違い（口頸部－灰色、体部－赤灰色）、体部の粘土を頸の内側に引き伸ばしてきて接続した様子がうかがえる。

甕（５・６）　　北トレンチ表土直下で集中して十数片の破片が出土した。全てが同一個体かどうかは不明であるが、胎土、色調、成形技法などは良く似ている。（５）は体部中央部付近の破片で、外面は平行タタキ目が残り、内面はきれいにナデられている。（６）は底部にまわりこむ部分である。外面は平行タタキが斜めに重なり合い、内面は粘土のつなぎ目や凹凸が残る程度のナデ調整がなされる。

鉢（７）　　円形の粘土板に、円錐台形の筒が取り付けられたような器形を推測させる破片である。樽型瓶の側面部片とも考えられるが、ここでは一応鉢ということにした。

○埴輪

主に表採により、埴輪の破片が９点ほど採取された。全て６㎝内外の細片であり、埴輪の全体像はつかめない。ただ、円筒埴輪の一部分であろうことは看守できる。また、口縁にあたる一点（８）については、朝顔形埴輪の破片ということも考えられる。表採、若しくはそれに近い出土であることから、全ての破片において劣化が激しく、調整等の十分な識別は困難な状況である。図示した(９)と(10)はタガの部分、(11)～(13)は基部細片である。他に、体部からはずれたタガの細片（断面M字形）や体部片などがある。透かし孔部分の破片は出土していない。

・外面調整

(13)の小片のみ、やや粗めのヨコハケが施されているのが分かる。またこの小片には、底面外周に工具によるキザミ目状の凹みがある。

・内面調整

口縁部の(8)ではやや粗めのヨコハケがかすかに見て取れる。基底部では、(12)で指押さえ痕、(11)でおそらく指によるであろう縦方向のナデの跡がみられる。また、(11)では、最下部に、板の端部で押さえられたようなやや角張った感のある調整痕があり、いわゆる底部調整のひとつといえよう。

・タガ（突帯）

粘土紐を体部に押さえつけて貼り付け、ヨコナデして整形している。（９）は断面が富士山形の線対称形になるのに対して、(10)は最突出部が幅の片方に寄る。

○中世の遺物

山茶碗（14）　　底部の小片である。高台は厚さ４㎜ほどの粘土紐を雑に貼り付けたもので、籾殻痕が多数みられる。

４．その他の遺構

・ＳＺ１

朱中古墳の東斜面にあり、長さ7.2m、幅1.5～0.8m、深さ30～10㎝の溝状の遺構である。北西－南東方向に直線的に検出されたが、北西部では輪郭が不整形になり、上バのラインが内側に凹む。埋土は、周囲に比べてやや褐色を帯びていた。埋土の、どちらかというと上の方から、樽型瓶片（４）が出土している。

・ＳＺ２

遺跡台帳で秋葉山２号墳とされた高まりの頂部付近で検出された、東西方向に走る溝状の遺構である。幅1.0～0.9mほどで、東方向は調査区外へと延びて行く。西端から３mほどは、輪郭に曖昧さがあり、

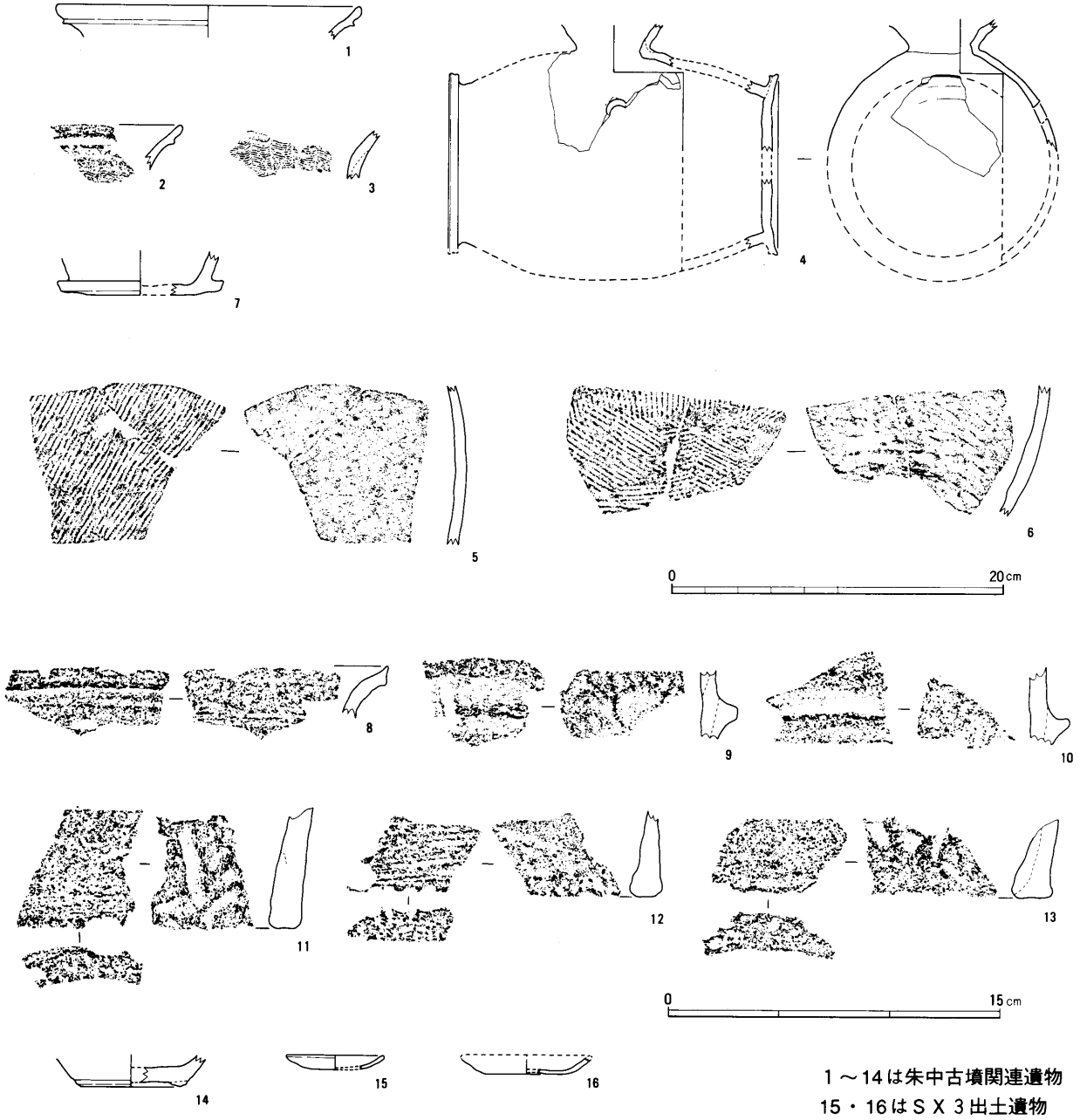
底部にも凹凸が見られた。しかし、調査区東端壁の近くでは深さも一段下がって30cmほどとなり、はっきりした断面U字形の溝となる。遺物は検出されなかった。

・ＳＺ３

斜面を少しカットしてつくったテラス状の削平地である。表土の下から、Ｌ字状にきれいな遺構のラインが出てきたが、掘削すると、20～30cmの深さで地山の土、あるいは風化した岩石（花崗岩系）となる。調査区東端は溝状に落ち込んでおり、テラス状の床面が強調されるかたちとなる。その床面は南北に細長く、南端で４ｍの幅をもち、北へ行くほど狭くなる。遺物はほとんどなかったが、灯明皿とも思われるような土師器細片(15・16)が２片と３cmほどの丸みを帯びた砂利石が少量みられた。中世以降のある時期に、祠とか山の神の石碑とかが祀られていた場所ということが考えられる。

〔遺物〕

土師器　小皿（15・16）　　厚さが2㎜前後で口径が10cmに満たない、薄く小さな皿片である。内面及び口縁部外面は撫でてあるようだが、外底面はオサエ痕の凹凸が残る。(16)は(15)に比べて堅く焼かれており、表面の風化もあまり進行していない。(15)と(16)は時期差があるようである。



１～14は朱中古墳関連遺物
15・16はＳＸ３出土遺物

第33図　遺物実測図・拓影（1:3,1:4）

3・まとめ

盛土も埋葬施設も残っておらず、遺物も細片しか出土しなかった。古墳である確たる証拠は得られなかったわけである。しかし、丘陵頂部で樽型瑕片や円筒埴輪片が出土するという事実からは、やはり古墳の造営を強く想定することができ、「朱中古墳」が存在していたことはほぼ間違いないものと思われる。

古墳に関する出土遺物は須恵器片と埴輪片である。

須恵器には樽型瑕という出土例の少ない器種が見られる。この器種は、陶邑古窯跡群では、すでにⅠ－4（ＴＫ２３）段階ぐらいには作られなくなるということである①。一方、出土した甕の体部片は、外面に平行タタキを施し、内面に丁寧なスリケシ調整が行われているものである。これらのことから、朱中古墳は５世紀後半の築造であろうと思われる。

このような、Ⅰ型式（中村浩編年）の須恵器を伴う古墳は、槻田川に面した丘陵地では、左岸で天王山古墳群②、右岸で神前山１号墳③が知られる。（もっとも、天王山古墳群については、発掘調査ではなく、土取りに伴う表採であるから、古墳からの出土というのは、あくまで推定の域を出ないが・・・・・）朱中古墳もこれらの古墳と並んで、この地域に須恵器が登場した時期に造られた古墳の一つとなる。

埴輪は、残念ながら表面の風化が激しく調整等が不明というものがほとんどであるが、須恵器と同時期のものとして差し支えないだろう。

（西村修久）

〔註〕

① 中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑　Ⅲ』大阪文化財センター 1980

② 『松阪市史　第二巻　史料篇　考古』松阪市　1978

③ 下村登良男ほか『神前山１号墳発掘調査報告』明和町教育委員会　1973

朱中古墳　須恵器

No.	器　種	出土位置	法　量　(cm)	成形・調整の様相	胎　土	焼　成	色　調	残存状況	備　考	登録No.
1	広口壺	北トレンチ 表土直下	口径：約18	○回転ナデによる調整	密	やや軟	外：灰褐 7.5YR5／1 内：灰褐 10YR5／1	口縁のみ 10×2.5cmの 小片		001-01
2	壺orはそう	墳丘東側	――――	○風化激しく詳しい調整不明 ○外面に波状文	密 0.5cm弱の 砂粒微量含む	軟	黄灰 2.5YR6／1	口縁のみ 5×3.5cmの 小片		001-02
3	甕?	北トレンチ	――――	○回転ナデ調整 ○外面に波状文	密 0.5cm弱の 砂粒微量含む	やや軟	外：灰褐 7.5YR5／1 内：灰N6	6×3cmの 小片	○粘土のつなぎめ部分	001-03
4	樽型瓶	SZ1 埋土	頸基部径：4.4 体部最大径：約14 側面径：約11		密 0.5cm弱の 砂粒微量含む	堅	外：青黒 5BG2／1 内：青灰 5BG5／1 体部断面：灰赤 10R6／2 口頸部断面： 明オリーブ灰 5GY7／1	体部と頸部の 接合部： 11×9cm片 側面部 7×4cmの 小片	○体部片と側面片が同一個体であるという決定的な確証はない。 ○体部断面の色と口頸部断面の色が全く異なり、口頸部の接続の様子がよくわかる。	002-01
5	甕	北トレンチ 表土直下	――――	○外面：平行タタキ ○内面：すり消しナデ	密	やや軟	外：灰白 7.5Y7／2 内：灰N6	体部 11×9cm片		003-01
6	甕	北トレンチ 表土直下	――――	○外面：平行タタキ ○内面：すり消しナデ	密 0.5cm大の 砂粒少し含む	やや軟	外：灰白 7.5Y7／2 内：灰N6	底部に近い 体部 12×7cm片	○No.5の甕片と同一個体か? ○ほかにも同一個体と思われる破片が十数点あり	003-02
7	鉢	SZ1 埋土	底部最大径：約10	○体部：回転ナデ ○底部：内面ナデか? 外面指オサエか? ○底部は貼り付け	密 2cm大の白色 石粒2個含む		外：灰N4 ただし自然釉は暗オリーブ灰（5GY3／1）や緑灰（7GY5／1）がまだらに混じる。	底部のみ 5×4×2cm の破片	○底部も含めて、外側には自然釉がかかる。 ○鉢ではなく、樽型瓶の破片の可能性もある。	001-04

朱中古墳　埴輪

No.	種類・部位	出土位置	形態の様相	調整の様相	胎土	焼成	色　調	残存状況	備　考	登録No.
8	朝顔?・口縁端部	(表　採)	○口縁端部は上方開き気味につまみあげられ、断面三角形。 ○推定径35cm前後	*風化激しくはっきりしないが、 外：ヨコナデ 内：ヨコハケ	やや粗 0.5～1cmの 砂粒含む。	良	にぶい橙 7.5YR7／4	7.3cm　片		001-05
9	円筒・タガ部	(表　採)	○断面台形のタガが貼り付けられている。	*風化激しくはっきりしないが、 外：タガはヨコナデ 内：オサエ（タガの取り付けのため）	やや粗 0.5～1cmの長石・石英系砂粒含む。	良	浅黄橙 7.5YR8／4	6×3cm　片		004-01
10	円筒・タガ部	西トレンチ 表土直下	○断面は、どちらかというと三角形。	*風化激しくはっきりしない。	やや粗 1cmほどの砂粒が少し混じる。	良	わずかに残るもともとの表面は にぶい橙 5YR7／4 現状での全体的な色調は にぶい黄橙 10YR7／4	6.5×3.5cm　片		004-02
11	円筒・基部	(表　採)	○底端部は1.5cmほどの厚さ。上部に行くに従い薄くなる（現存片端部1.0cm）。	*外面風化激しくはっきりしないが、 外：ヨコハケ? 内：ナデ	やや粗 1～1.5cmほどの砂粒多数含む。	良	にぶい橙 7.5YR7／4	6×5.5cm　片		004-03
12	円筒・基部	(表　採)	○底端部は1.8cmほどの厚さ。薄くなりながら逆ハ字形に開き上に延びる。	*外面風化激しくはっきりしないが、 外：ヨコハケ? 内：オサエ	やや粗 1～1.5cmほどの砂粒多数含む。	良	にぶい橙 7.5YR7／4	6×3.5cm　片		001-06
13	円筒・基部?	(表　採)	○底端部は1.5cmほどの厚さ。上部に行くに従い薄くなる。（現存片端部1.0cm）	*表面風化で明瞭ではないが、 外：ヨコハケ 内：オサエ? 粘土の重なりが1層はげている可能性大。 *底端部外周に刻み。	やや粗 1cmほどの砂粒が少し混じる。	良	風化の弱い所 橙 5YR7／6 風化の激しい所 にぶい橙 7.5YR7／4	5×3.5cm　片		004-04

朱中古墳　中近世土器

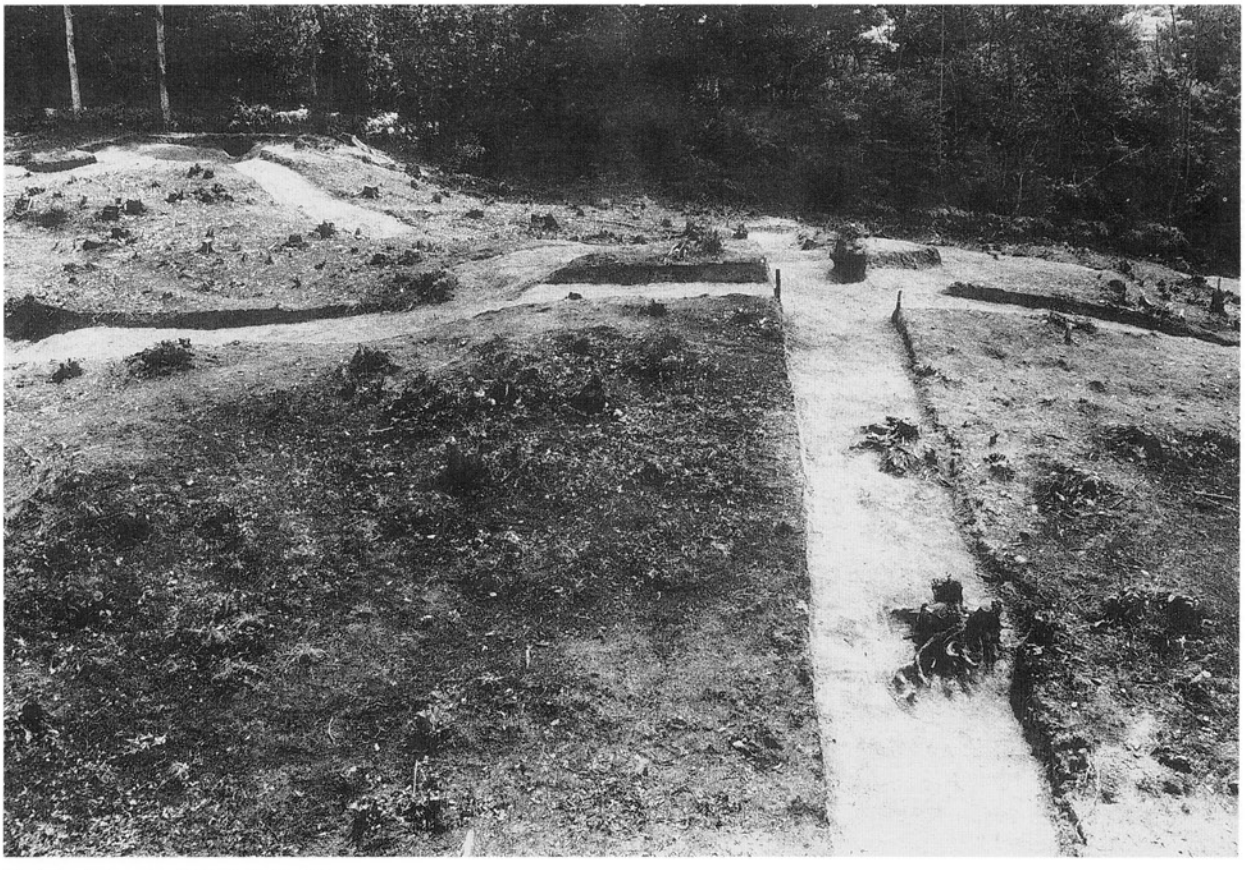
No.	器　種	出土位置	法　量 (cm)	成形・調整の様相	胎　土	焼　成	色　調	残存状況	備　考	登録No.
14	山茶椀	墳丘南東 斜面 表土直下	高台径：約6	○体部水挽き ○見込み部はナデ? ○高台は雑な付け高台	やや密	堅	灰白　5Y7／1	底部のみ 1／3存	○高台に籾殻痕多数	003-03
15	土師器 小皿	SZ3	口径：約5.8 高：約0.9	○円形粘土板を手で皿状に窪めて制作か? ○内面：ナデ ○外面：指オサエのまま	密	良	橙　5YR7／6	約1／4存	○表面風化	003-04
16	土師器 小皿	SZ3	口径：約7.8 高：約1.2	○円形粘土板を手で皿状に窪めて制作か? ○口縁部：ヨコナデ ○外面底：指オサエ 後、軽いナデ ○見込み部：ナデ	やや粗 表面は少しザラつく。	良	橙　5YR6／6	約1／6存	○近世のものか?	003-05

第12表　遺物観察表

朱中古墳全景（北西上空から）

朱中古墳・伐採開後の墳丘状況（北から）

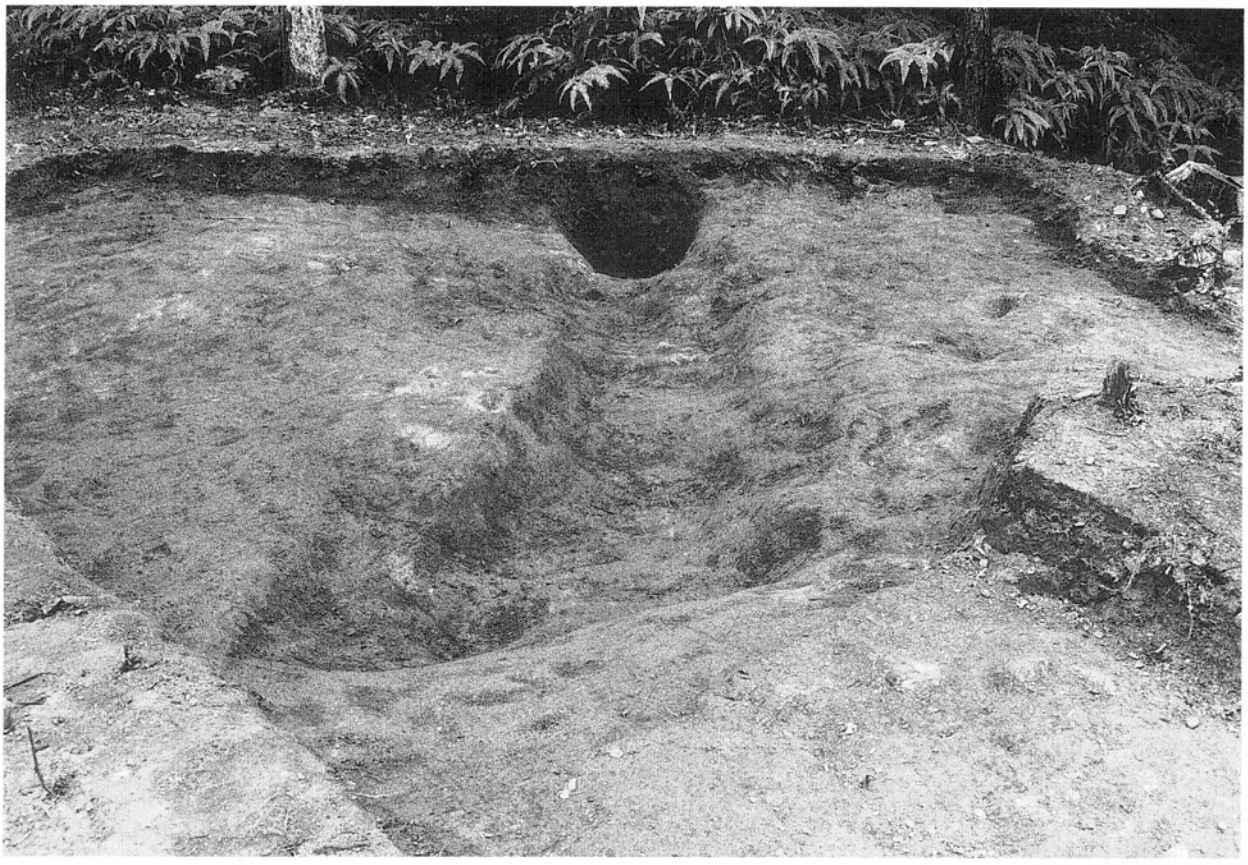
朱中古墳墳丘（北東から）



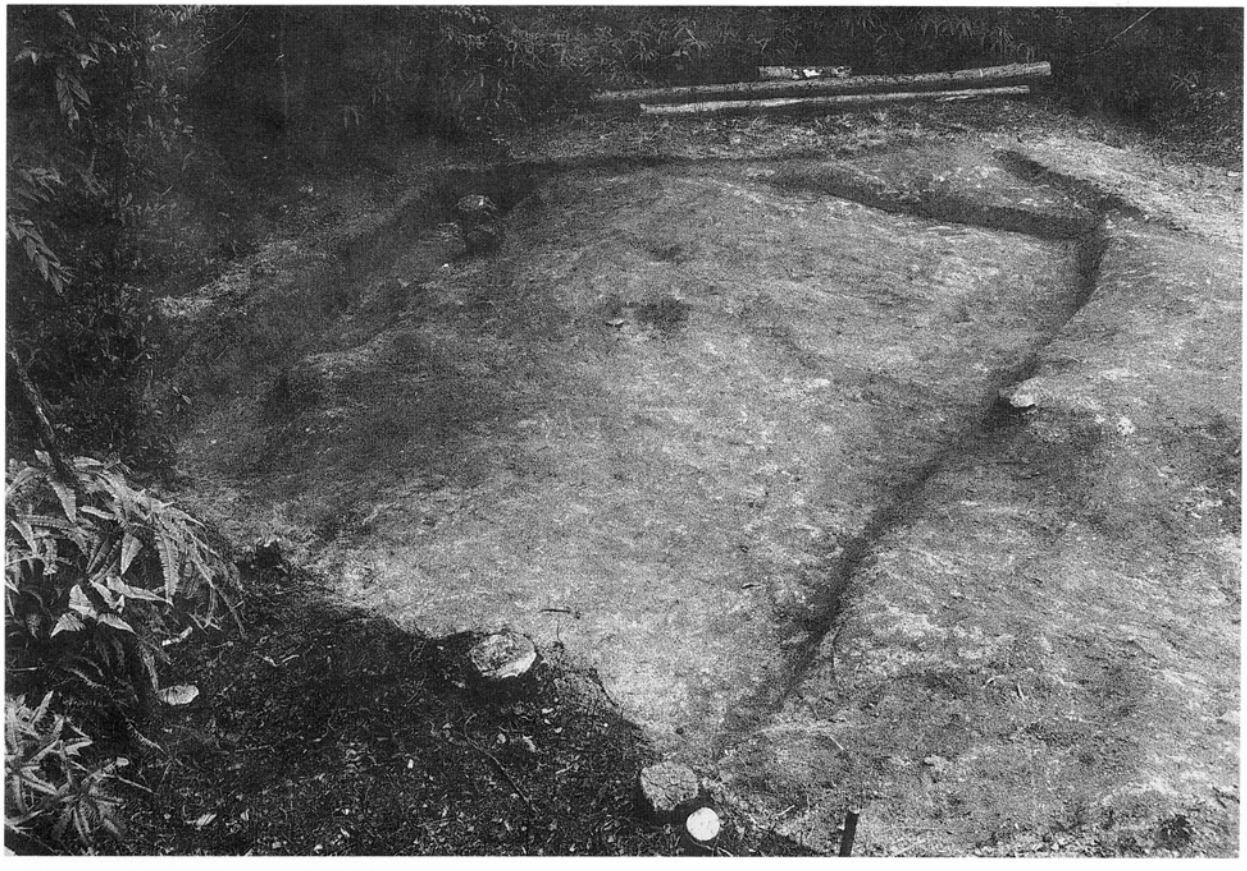
朱中古墳トレンチ状況（西から）

ＳＺ１（東から）

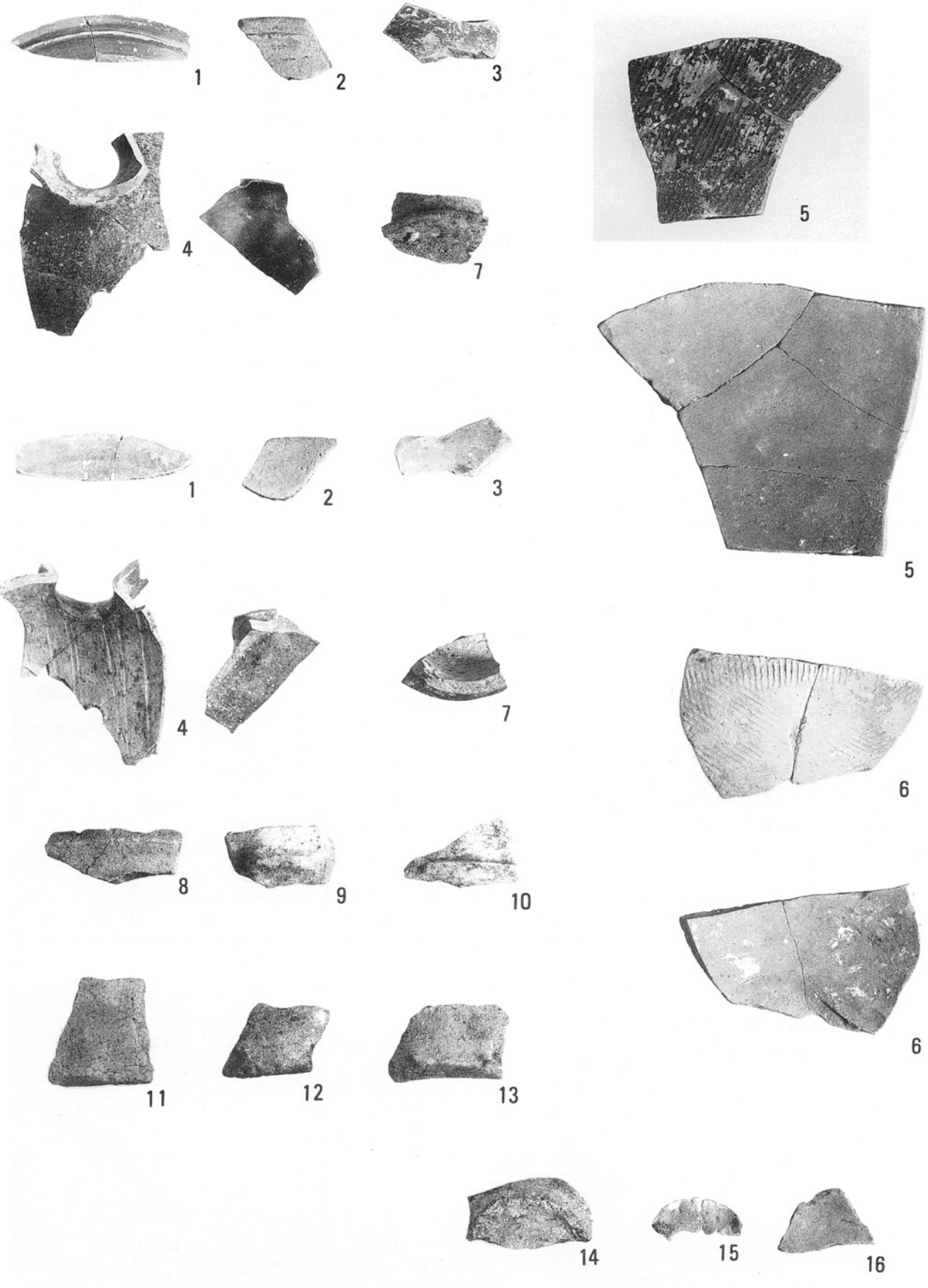
ＳＺ１（南東から）



SZ2（西から）



SZ3（北東から）



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しゅなかいせき・しゅなかこふん
書名	朱中遺跡・朱中古墳
副書名	一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告
巻次	V
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	123-5
編著者名	伊藤克幸、田村陽一、西村修久、小浜　学
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-03　三重県多気郡明和町竹川503　TEL　05965-2-1732
発行年	西暦　1996年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
しゅなかいせき 朱中遺跡	みえけんまつさかしいざわちょう 三重県松阪市射和町 あざしゅなか 字朱中	24204	638	34° 30′ 36″	136° 32′ 47″	1991.6.8～1992.3.13 1994.9.5～9.22	5,384	一般国道42号松阪・多気バイパス建設に伴う事前調査
しゅなかこふん 朱中古墳	みえけんまつさかしいざわちょう 三重県松阪市射和町 あざしゅなか 字朱中	24204		34° 30′ 41″	136° 32′ 44″	1990.7.23～9.12 1993.6.25～8.20	1,098	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
朱中遺跡	集落跡	縄文～江戸	土坑 集石遺構 竪穴住居 掘立柱建物 溝 井戸	縄文土器、石器 弥生土器、土師器 須恵器、土馬 灰釉陶器、山茶碗 中・近世陶器、 土製円盤、 土鐘など	縄文早期の押型文土器は遺跡の南半部下層より出土。隣接する鴻ノ木遺跡の北限。遺跡の主体となるのは、奈良・平安時代。
朱中古墳	古墳	古墳	テラス状遺構	土師器、須恵器 円筒埴輪、礫器 チャート剥片	すでに大きく破壊されており、墳形などについて全く不明。

平成8(1996)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年6月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　123-5

一般国道42号線松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅴ

朱中遺跡・朱中古墳群

1996・3

編集　三重県埋蔵文化財センター
発行

印刷　文化印刷有限会社